

うたわれていくもの

病弱マン

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

クオンとハクが会話を交わした三年後

再び世界に異変が

# 目次

二人の白皇その後	1
ハクの世界	6
ヤマトへ（船上）	11
帝都へ（街道）	16
集結	21
再開	26
現状把握	35
解散後の2人	42
タタリとの戦い、そして	51
異界から戻りて	61
初陣	70
人型のタタリ	80

初陣を終えて	89
次戦に備え	98
異界の仕事	108
異界の仕事（2）	121
タタリ戦の前に	131
タタリ戦	139
異界の仕事（アトウイ、ノスリ）	149
異界、休日	158
タタリ戦後	165
異界（クオン、ネコネ）	173
特訓（クオン、ネコネ）	180
作戦前日	188

生者のため	292
キシタル	285
ハクの本気	277
両者の思惑	271
特訓の段取り	264
シスとムネチカ(2)	256
シスとムネチカ(異界)	247
作戦会議	239
引越しと療養	231
満身創痍	224
新たなオーツ	216
消えない違和感	207
オーツ戦の前に、	197

共闘	404
オシユトル対ボーンズ	396
アイコと言うオーツ	387
オーツ襲来	379
思い出	371
家族	361
キシタルの思惑	353
ハク v s ヴライ	345
真実	336
休日と旅	326
ハクとオシユトルとネコネ	317
ハク対オシユトル	309
死者と生者	300

決着	414
別れ	426
長い特訓を終え	434
放ったらかしの代償	442
トウスクールかエンナカムイか	450
ウイツアルネミテア、ミコト	456
解決策を求め	465
ユズハ、トウスクール	473
再会（ハクオ口編）	481
オボロとの対決	490
助言	500
ハクの覚醒（前編）	507
ハクの覚醒（後編）	515

圧倒	523
クオンの決意	534
クオン覚醒	541
前夜	550
アトウイ覚醒	561



## 二人の白皇その後

クオン

「もう逃がさないかな」

その言葉からはや3年、未だにハクは見つからない

でも確かにあの時ハクは会いに来てくれた、何か、何か方法があるはず。

そう思った私はトウスクールに戻りお母様達とお父様に相談してみたのだけど

ハクオロ

「あの次元に干渉できる方法はそう多くはない、私の代わりに依代となった、その意味はあの男もわかっていたはず。わかっていながら其方を助けるためにその条件をのんだ」

クオン

「わかってるかな、私も前を向いて生きていくとあの時約束した、でも、あの人は生きています。それを知っているから、諦めることなんてできない。お父様、なんでもいい、僅かな可能性でもいい。あの人に、ハクに会えるなら、」

ハクオロ

「ふむ、」

しばらく考え込むハクオロ

娘を助けるために私の代わりを引き受けたのだ、確かにこのままでは無責任になつてしまふな。

クオン

「、、、」

決して諦めない、そのような決意が見てとれる。

ハクオロ

「なくはない」

クオン

「それじゃあ!!」

ハクオロ

「だがそれはかのオンカミ、ウィツアルネミアを完全に消滅させる必要がある。知つていようクオン、あの者の力を一度解放してしまつたお主なら、それがどれほど困難であり、そしてどれほどの犠牲を払うかを。そしてそれをあの男、ハクが望まぬ事を」

クオン

「あつ、」



クオンの顔が悲しみに染まる、わかっているのだ。そんな事をすればその犠牲はクオン1人ですむわけがない

また大勢の人が死ぬ、そんな事はできない、けどクオンはハツと先ほどのハクオロの言葉を思い出す

クオン

「お父様、ハクは、私のすべてかな。教えてほしい」「なくはない」と言った意味を」

ハクオロ

「ふっ、冷静でなによりだ。ならばお主に託すでしょうか、ウルトリイ！例の物を」

ウルトリイ

「はんに」

クオン

「ウルお母様、？」

ハクオロ

「クオンよ、オンヴィタイカイカンは今タタリとして依然各地に存在する。あれはウィツアルネミテアの力を受けあのような姿になっている。それはわかるな？」

クオン

「ええ、そしてハクが各地を渡りそれを浄化していることも」

ハクオロ

「ウィツアルネミテアはその性質上現実世界に自分が残した力が無くなるとその存在事態が保てなくなる。ハクが今タタリを浄化しているのはお主に再び会うためにタタリを浄化し顕現するためなのかもしれないな」

クオン

「ハクつ、」

ハクオロ

「だがその数は尋常ではない、中にはウィツアルネミテアの力を強く受けているタタリもいる。ハク1人ではいざれ限界も来よう、お主の仲間の分も用意してある。限定的ではあるがその勾玉の力を使えば一時的にハクと同じ土俵に立てる。後は、説明するまでもないな」

クオン

「お父様、ありがとう、必ずハクと一緒に戻ってくるね」

そう言いその場を後にした

ハクオロ

「娘にしてやれるのはここまでだ、あの勾玉を作るのにだいぶ苦勞をかけたなウルトリイ」

ウルトリイ

「ハク様に唯一渡していなかった力があつたからこそです。私は形を作つただけですか  
ら」

ハクオロ

「タタリの中でも意思を保っているやつかいなやつもいる、決して楽な道程ではなから  
うな、信じるしかないか」

## ハクの世界

ハクオロより勾玉を託されたクオン

その数は10を超えていた

クオン

「まずは皆に集まってもらわないとかな、ヤマトに行けばアンジュの一声で集まっても  
らえるだろうけど無理強いはできないし、とりあえずアンジュに会いに行ってみるか  
な」

そこでクオンはハクオロの言葉を思い出す

ハクオロ

「その力を使えば一時的にハクと同じ土俵にたてよう」

その言葉を思い出しさっそく勾玉を取り出した

クオン

「でも、どうやって使うんだろう、」

使い方がわからないと思ったのもつかの間、勾玉を握りしめると辺りの景色が歪む

クオン

「これって、!!」

???

「はあ、やつぱり来てしまったか。あまり危険な場所は来て欲しくないんだがな。せつかく自由になったつてのに、自分の事は忘れて幸せに生きてくれてよかつたんだぞ?」  
その声だけで誰か分かつた、すぐに駆け寄つていきたい。でも言い返さないと気がすまなかつた

クオン

「勝手なことと言わないでほしいかな、貴方が生きているなら私は決して貴方を諦めない。死んでいたとしても貴方以外を受け入れる気なんてないかな。、ハク」

徐々に視界が鮮明になってゆく、そこには3年以上探していたハクの姿があつた。

ハク

「まったく、先代も中々の食わせもんだな。こうなる事を見越していたと見える、まつ来てしまったものは仕方がない。久しぶりだな、クオン。とは言え自分からは頻繁に会いに行つてはいるがな」

クオン

「わかつてるかな、それとなく感じていたから。だからお父様に相談しにいったんだよ、

このままじゃ会えないと分かっていたから。3年前のあの日以降、夢にすら会いに来てくれない貴方に会うために、」

目に涙を浮かべながらクオンはハクに近づく

クオン

「やつと、会えた、、ハクっ!!」

そう言うとハクに駆け寄り抱きつく

ハク

「すまなかった、自分も、会いたかった」

クオンはそこでハクの異変に気付く、今のハクの姿はだいぶ弱っているように見える

ウルウル、サラアナ

「主様、無理は禁物。先ほどの戦いの傷が完治していません、このままだとまたアレに見つかれば勝ち目はないかと」

ハク

「わかっている、認めたくはないが、先代の判断は正しかったのだな」

クオン

「ハクっ、一体なにが、」

ハク

「クオン、会えて嬉しかった。今はこれ以上ここにすることができない、クオンもとりあえず元の世界に戻るといい。皆を集めまた来てくれ、そこで今起こっている事を話そう」

そう言い残しハクは消えていった、私もまた景色が歪む前の元の世界に戻っていた。夢のような感覚、でも記憶もある。あれが現実だったと確信できる

クオン

「ハク、必ず、連れ戻してみせるかな。待つて、すぐに皆を集めてみせるから」  
変わってハクサイド

ハク

「はあつ、はあつ」

息を切らしその場で膝をつく

ウルウル、サラアナ

「主様つ、横になる。この場はとりあえず安全です、しばらくゆつくりなさるとよいかと」

ハク

「ああ、すまん。まさかあそこまでとはな、油断もしたが万全であっても無理であつたろうな、」

その体はなにやら無数の斬撃によりもはやボロボロであった、常人であれば絶命しているであろう傷、生きているのは単にハクが人ではなく端的に言うならば「神」であるからだろう、だが例え神であろうと死なないわけではない。神魂による傷は人間の身体につける傷と変わりない

タタリとこの世界で戦うというのはそう言うことだ。

ハク

「アレはあまりにも危険だ、が。頼る他あるまい、」

そう言い眠りについた



## ヤマトへ（船上）

クオンは今船に乗りヤマトを目指している、だがその表情は微妙そうだ。なぜなら、クオン

「えっと、どうして船に乗ってるのかな？フミルイル？」

フミルイル

「どうしてと言われても、私はクーちゃんのお側付きだから♪」

音符が見える、

クオン

「、私が何をしに行くか分かってる？結構大変な旅になると思うかな」

フミルイル

「オシユトル様、ではありませんね、ハク様を助けに行くんですよね♪ふふ、クーちゃん嬉しそう〜」

クオンの顔が一気に赤くなる

クオン

「わ、私は助けてもらったお礼をするために行くんだから、そ、そんなつもりで行くわ

「けじゃないかな！」

フミルイル

「クーちゃん？もうクーちゃんがハク様の事大好きなのはバレてしまってるんだから何を言っても説得力がないですよ？」

クオン

「~~~~つ！」

この3年でフミルイルはさらに手強くなった、なにげにこの娘もハクに恋心を無自覚に抱いている節がある、強敵すぎる。その双丘は反則でしょう、

フミルイル

「とにかくヤマト、帝都に行つて皆に会うんですね。一応叔父様がすでに文をアンジュ様宛に送つてあると言つてましたから案外早くに全員集まるかもしれないですね」  
♪

なんで音符が見えるんだろう

クオン

「全然聞いてなかったかな、いつのまに、」

フミルイル

「クーちゃんつたらもうものもらつたらそのまま突つ走つていったそうだから、ふふ

ふっ」

クオン

「あうっ、、そ、それは」

???

「ふっふっふ、健気な仕草もまた我が娘に次ぐくらい美しいねえ」

クオン

「あ、お久しぶりかな。ソヤンケクルさん元気にしてたかな？」

ソヤンケクル、聖上により右大臣だか左大臣だかを任命されているものの基本的にはこうして船の上でやる事は変わらないらしい

ソヤンケクル

「ハツハツハ、いやあくクオン殿。あなたの恋はこのソヤンケクル、大いに応援させてもらうよ。そしてなんとか我が娘に帰ってきてもらおうよろしく頼むよ！」

???

「けっ、いい加減娘離れでもしちやあどうなんだい。見てるとみつともねえつたらねえぜ。」

クオン

「ゲンホウさん？あなたもこの船に？」

ゲンホウ、ソヤンケクル同様右大臣だか左大臣に任命されている。昔馴染みらしくよく喧嘩をしている様はトウスクールにまで噂が流れてくるほど

ゲンホウ

「ああ、ちよつとトウスクールまで物資の取引をしてな、その帰りよ。面倒クセエことにこいつの船しかなくてよ、とんだ貧乏くじを引いたと思ったが、嬢ちゃんたちに会えたなら御の字と言ったところか」

ソヤンケクル

「なんならこの場から突き落としてやつてもいいんだよお？ 聖上には立派に役目を終えて溺死しましたと報告しておくから安心したまえ」

ゲンホウ

「ハツ、いまだに娘離れもできねえ青二才にやられるほど老いぼれちやいねえよ。嬢ちゃんよ、正妻でなくても構わんからウチのガキもあの男に尽くさせてやつちやくれんか？ あれほどの男はそうそういいねえからな、変な虫がつくよりよつほど、安心できらあ」

クオン

「考えておくかな、きつとハクの事好きいな娘は多いし。それについてはもう覚悟ができているから」

そう、ハクは第一印象としては頼りなく、女に好かれる要素は全くなかった。でも気

付けば誰よりも頼れる存在になり皆を救った。

好きになるのは仕方ない、そう思えるほどハクはいい男になった。だから独り占めしてはいけない、そう誓ったのだ。それは他の娘も同様であつたし、他の娘はさらに言うならクオンには及ばないとさえ思っている。クオンはそのことに気付いてはいないが

ゲンホウ

「あんたも随分成長したもんだ、たった3年で、たいしたもんだな」

ソヤンケクル

「ああ、アトウイ。やはりお前は父の元には帰ってこないのか、」

その夜は珍しくゲンホウがソヤンケクルを慰める酒盛りとなりある意味歴史に残る日でもあつた

## 帝都へ（街道

クオン

「1年ぶりかな、」

ヤマトから離れてトウスクルに戻る前に各地を1年近くハクを探していたためヤマトに来るのは実に1年ぶりであった。

フミルイル

「私は大使としてよく来てるから最近ではクーちゃんよりヤマトは詳しいかもですねえ」

そんな話をしてしていると船の方から叫び声が、

ソヤンケクル

「アーントウーイーイーイー!!何処にいるんだーい!!」

クオン

「……、そっくりかな」

フミルイル

「ふふふ、そっくりですね」

2人はそう言いのかし帝都に向かった

クオン

「早くアンジュに会いに行かないと、」

フミルイル

「クーちゃん、焦らずに。ハク様は皆を連れてくるようクーちゃんにお願いしたんでしよう、ならそれまで無理はしなないと思います。」

クオン

「、、、そうかも、、しれないけど」

フミルイル

「心配なのは当然だけど確実に進んでいきましよう、ね」

クオン

「うん、」

フミルイルが言葉巧みにクオンを落ち着かせる、大使として散々外交やらを経験してきたからか中々の手腕である。

フミルイル

「それに叔父様を送った文をアンジュ様がちゃんと読んでその意図を汲んでくれているならそろそろですよ、クーちゃん」

クオン

「???

???

「おつ、ようやく来たじゃない。」

???

「おお！ひさしぶりだなあねごー！」

クオン

「ヤクトワルト!?それにシノノンまで」

ヤクトワルト、ハクがまだ神になる前、まだ人であった時に共に戦った大切な仲間の一人、その娘シノノン。

クオン

「ヤクトワルト、髪切ったんだね。似合ってるかな」

ヤクトワルト

「どうにも身だしなみに気をつけなきゃならんらしくてねえ、まっいい歳だしな。いい機会だったんじゃない」

クオン

「シノノンも、大きくなって。元気にしてたかな？」



シノノン

「おお、どんどんおんならしくなつてキウルもメロメロだぞ。あねごもまたいちだんといろけがましたな」

クオン

「あはは、ありがとう。ヤクトワルト？ いい加減シノノンに変なこと教えないほうがいいかな？」

ヤクトワルト

「~~~~~♪」

口笛を吹きながら誤魔化す

クオン

「もうっ、」

ヤクトワルト

「まあとりあえず馬車に乗んな、旦那のことで進展があつたんだろう？ 聖上が首を長くして待つてるじゃない、キウル、ルルテイエ、ノスリ、オウギ、ミカツチ、ムネチカ、アトウイ、ネコネ、皆すでに集まっているじゃない」

クオン

「えっ、文があつたとは言え早くないかな？なんでこんなに早く、」

ヤクトワルト

「旦那の助けができる、また会えるとなれば皆すぐに集まってきたじゃない。まったくどいつもこいつも旦那の事となると俺もだが馬鹿になっちまうじゃない」

シノノン

「じゃなーい」

クオンは皆の頼もしさとまた集える喜びからまたしても泣いてしまった  
ヤクトワルト

「まだ詳しくは聞かねえが、旦那は、」

クオン

「うん、思ったより大変みたい。でも生きてるから安心してほしいかな」

ヤクトワルト

「そうかい、生きてくれていたかい。そいつは嬉しいじゃない!!」

そう言い馬車を走らせて行った

## 集結

クオン

「待たせちやったみたいかな」

一同

「クオン「様、さん、はん、殿」!!」

クオン

「皆、久しぶりかな。元気そう、で、あれ？ネコネの姿が見えないのだけれど」

アングジュ

「うむ、今はちよつと外しておる。最近はネコネも成長しているの。術ではなく格闘もこなせるようになってきおつた。さすがはオシユトルの妹と言ったところじゃな、そんなわけで注文していた武器をエンナカムイに送るところであつたのだが、今回の事でこちらに出向くことになつたので武器庫に取りに行つておる最中じゃ」

クオン

「ネコネが格闘を？なんか想像がつかないかな、でも皆3年も経つとさらに頼もしくなつたってことかな。じゃあネコネが戻ってくるまで本題は、」

ネコネ

「大丈夫ですよ姉様、今戻りましたです」

クオン

「ネコネっ、見違えたかな、こんなに綺麗になつて。それが新しい武器？」

ネコネ

「ハイです、手に装着して引つ掻く爪を想定して作ってもらつたです。素早さを活かす感じですよ」

アトウイ

「さつきも話してたんやけどなあ、ほんつとネコやん美人さんになつてるもんやからおにーさんも妹としてやなくて女として見るんと違うん思つてなあ。ノスリはんと新たな恋敵現るつて盛り上がつてたんえ〜」

ネコネ

「ありがとうございますですよアトウイさん、でも私はいつまでも兄様の妹でありたいと思つてます。兄様は、私の大好きな兄様ですから」

クオン

「雰囲気もだいぶ良い女になつちやつてるかな、ノスリ？負けたんじゃない？」

ノスリ

「な、なにを言っている。そもそも私はハクをそういう目で見てなど、な、仲間だから助けにいくだけであつて、」

ファミルイル

「昨日のクーちゃんそっくり♪」

クオン

「あう、」

ルルティエ

「ふふ、まるであの時を思い出すような、そんな感じがします」

クオン

「ルルティエもじゆうぶん成長してないかな、その胸、ファミルイルにも負けてないんじゃない、」

ルルティエ

「こ、これはなぜかここ最近急に、あうう」

アンジュ

「かっかっかつ、久方ぶりの再会ゆえ楽しいのは良いことじゃ。じゃが、そろそろ本題に入ってもらおうかのう。クオン」

クオン

「あつ、うん確かに。ちょっと浮かれちゃったかな。本題に入る前に、皆にこれを渡しとくね」

そう言つて皆に勾玉を渡す

ムネチカ

「ふむ、これは？」

ミカヅチ

「何やらとてつもない力を感じるな、若干ではあるが仮面も共鳴している」

オウギ

「察するに、ハクさんのいる所へこれがあれば行ける、とかでしょうか？」

クオン

「早い話そういうことかな、ただ時間は限られているみたい。1日の間に行ける時間のようなものがあるみたいだから。」

前回クオンがハクのいる世界に行き戻った後、その日の内には行くことができなかつた。翌日になると勾玉に力が戻ったのを感じたため試しに使つてみたところハクの許可がないと入れないと双子に帰された。その時ハクは療養中であつたそうだ。そのことをクオンは皆に話した

ヤクトワルト

「なるほどねえ、旦那も相変わらず無茶するじゃない。」

キウル

「なら早く兄上を助けに行かないと！」

クオン

「そうしたいのは山々だけど、あくまでこれは行き来できる手段でしかない。いつでも行けるなら私が何度も行ってるかな。つまりハクがこの勾玉に呼びかけない限りこちらから何もできないのは変わらないみたい」

キウル

「それじゃ今までとほとんど変わらないじゃないですかっ、」

クオン

「ハクは皆を集めてまた来て欲しい、そこで全てを話すと言ってくれたかな。だからきっと大丈夫。ハクはまた私達を頼ってくれる、その確信が今の私にはある」

そう言った次の瞬間全員の勾玉が光り始めた

## 再開

気がつけば全員見知らぬ、いやどことなく記憶にある場所にいた、そうだ、トウスクルに行った時にウオシスと戦ったあの場所、

クオン

「どうしてここに、ここは確か、」

ハク

「ああ、似ているが別の場所だ。ここならそれなりに長く使えるのでな。さて、久しいな、皆。」

皆各々ハクを呼び集まる

ハク

「ちよっ、落ち着け!!時間はある!!誰だ今ケツ蹴ったの!?!」

クオンはハクの歓迎っぷりを見て笑っていた

ハク

「クオン!見てないでなんとかこいつら落ち着かせろ!おい誰だまたケツ蹴ったの!?!」

ちなみに1発目はミカツチ、2発目はシノンである



そんなやりとりが20分ほど経ちようやく落ち着いて話すことができるようになった

ハク

「くっ、ケツが痛いぞ、」

なぜならシノノンに次いでヤクトワルト、アンジュと続きトドメはココポときたものだ、

ミカツチ

「皆に心配をかけたのだ、甘んじて受けるんだな」

アンジュ

「まったくじゃ、クオンだけではない。皆忙しい中時間を作り其方を探しておったのじゃ。そのくらいで済ましたのじゃから感謝するがよい」

ハク

「それについてはまあ、すまなかった。お詫びと言うわけではないが会ってもらいたいやつがいる」

一同

「???」

ハク

「そろそろ姿を見せてもいいんじゃないか？」

???

「なんで呼ばれたのか疑問だったが、そういうことかい。あまり死者をぼんぼん呼び出すもんじゃねえぜ、あんちゃん」

ネコネ

「ま、さか、」

ハク

「馬鹿言うな、お前を呼び出すのにどれだけ大変だったと思う。多分もう二度とできんぞ、ありがたく思え。ちゃんと別れをすます良い機会だろうが」

ミカツチ

「クツクツク、粹な事をしてくれるではないか」

姿が鮮明になり一同驚きを隠せないでいた

ネコネ

「あ、兄、様、？」

オシユトル

「ネコネ、でつかくなつたなあ。あの時はほんとすまなかつた、辛かつただろう」

ネコネ

「兄様っー!!」

泣きながらオシユトルに抱きつくネコネ

ネコネ

「ずっと!!ずっと謝りたかったのです!!兄様の邪魔をして!!ハクさんを巻き込んで!!」

オシユトル

「もういいんだネコネ、俺あお前達を守れたことを今でも誇りに思っている、あんちゃんも俺の予想以上の活躍だったみたいだしな。そうであろう?ミカツチ」

ミカツチ

「最初は貴様の代わりになると言ってもそこまで期待はしていなかったがな、時が経つにつれ貴様となんら変わらんほどの強さになっていた。つくづく面白い男よ」

オシユトル

「なんとそこまで、あんちゃん、さすがに強くなりすぎじゃねーか?」

ハク

「仮面の力があつたからなああの時は。ある程度までは誤魔化しが効いたんだよ。さすがにミカツチほどの達人を相手にするにはそれだけでは無理があつたが」

ミカツチ

「フンっなんならまたやってもいいが?」

ハク

「冗談、現界したら仮面の力も使えん以上もはやお前には勝てんよ」

ミカヅチ

「クツクツク、まあそういうことにしといてやる」

オシユトル

「そういうわけだネコネ、お前は何も悪くない。母上にもオシユトルは何も悔いることなく命をかけたと伝えてくれ。」

ネコネ

「はいですつ、グスツ、」

ハクの方に振り向くネコネ

ネコネ

「兄様に会わせてくれてありがとうございますのですよ兄様、？あれ、なんかややこしいですね、」

オシユトル

「ハツハツハ、かまわねーよネコネ。俺はもう二度とここには来れねーんだろあんちやん？」

ハク

「ああ、死者と生者の境界が曖昧な世界ではあるが一度しか呼び出せないようになってる。何故かは自分もわからん」

オシユトル

「つと言うわけだ、もう会えないのは辛いかもしれねえがあんちゃんは生きてる。俺が全てを託した男だ、お前の兄を名乗るになんの問題もない」

ネコネ

「ほんとに、認めてもらえるですか？兄様以外を兄様と呼ぶことに」

オシユトル

「もちろんだ、幸せになるんだぞネコネ」

ネコネ

「ハイです、兄様、それと、あの時守ってくれてありがとうございますよ、グスツ」

オシユトル

「ああ、いいってことよ、おっとあまり時間が残されてねーみたいだな、あんちゃんと違つて死者だからかねえ」

ハク

「ああ、すまない、これでも頑張った方なんだが」

オシユトル

「いいや、じゆうぶんよ。あんちゃん、ネコネと母上を、頼む」

ハク

「ああ」

オシユトル

「ミカツチよ、お主との決着つけたかったが叶いそうもない。すまぬな」

ミカツチ

「別れが出来ただけ良しとしてやる、さらばだ」

オシユトル

「うむ、さらばだ」

そしてアンジュの方へと視線をやる

オシユトル

「姫殿下、いや今はもう聖上であらせられますか。このオシユトル先の帝の勅命を果たせず、」

アンジュ

「よいのじやオシユトル、お主のその志、その信念はハクに受け継がれた。お主を失ったのはもちろん悲しいが、余も前を向いて生きておる。頼れる仲間もいる、だから安心してよいぞ。そちらで父上に会うことがあるならアンジュは元気にしていると伝えてく

れ」

オシユトル

「ハッ、必ずや」

オシユトルの姿はもうほとんど消えかかっていた

オシユトル

「あんちゃん、ありがどうな」

ハク

「おう、まろによく伝えておいてくれ」

オシユトル

「任せろ、、じゃあな、ネコネ」

ネコネ

「兄様、さよなら」

その言葉を最後にオシユトルは消えていった

ハク

「大丈夫か、ネコネ」

ネコネ

「ちゃんとお別れが言えたです、兄様、ほんとに、ありがどうなのですよ」

ハク

「ああ、ミカツチも満足か」

ミカツチ

「むっ、そう、だな、礼を言う。別れもできなかつたゆえな」

ハク

「そうか、そうだな。さて、ここからは皆を呼んだ理由や手伝って欲しいことについて話したい」



## 現状把握

ハク

「何処から話したもののか、」

ハクは皆に今置かれている状況を話し出す

ハク

「そうだな、自分は今タタリを浄化している最中だ。理論上だがウィツアルネミテアの力を受けているタタリがいなくなればその力はかなり弱くなる。そこに人ではなくこの星そのものに封印する。」

クオン

「封印なの？お父様から聞いた話だとタタリがいなくなればウィツアルネミテアは消滅すると聞いたけど」

ハク

「タタリだけではなく万物にまで影響を及ぼしているからなヤツは、それを全て浄化できれば消滅もあるのだろうか、基本的に悪さをしてるのはタタリだからな。浄化するのはタタリだけにしたいと考えている」

クオン

「でもウィツアルネミテアを消滅しない限りハクはっ、！」

ハク

「弱ったウィツアルネミテアを自分から星へ移す。そもそも意思を持たない星に封印できればやつは二度と出て来れん。そうなれば自分もこのお役目から解放される、無事そつちの世界へ顕現できるだろう。」

ヤクトワルト

「聞いている限り可能らしいが、星に封印するのはほんとにできんのかい？ 絵空事のように聞こえるじゃない」

ハク

「なに、そこまで大層なもんでもない。それに封印自体は自分がやる。本来なら調停者の力が必要な封印だが今回ののは封印の移動だ。自分とウルウル、サラアナであれば可能だ」

ウルウル、サラアナ

「ばつちこい。お任せを、調停者よりも完璧にこなしてみせます」

ハク

「まあ最終目標としてはこんなもんだ。むしろ問題はその過程にある」

ムネチカ

「タタリの浄化、であるか。確かに一筋縄ではいかぬだろうが、解せぬな。ハク殿であればもはやあの程度では物の数ではないはず」

ハク

「まあ確かにそつちの世界で徘徊しているタタリであれば問題はなくはないが、そこまで深刻ではない。タタリを浄化する、それはつまりこつちにいるタタリを倒す必要がある。こつちにいるタタリは無敵ではない、攻撃も通るし人の手で倒せる。だがその強さはあの徘徊しているタタリの比ではない」

皆その言葉を聞くと少し不安がよぎったのか空気が重くなる

ハク

「こつちらにいるタタリはあの液状のような姿ではない、基本的には獣の類の見た目でな、強さにより体格が大きくなる」

ミカヅチ

「獣であればそこまで苦戦はしないようにも思えるが、聞いた話によると貴様、ずいぶん手酷くやられたようではないか。」

ハク

「実際獣と行っても強さは桁違いだ、あまり油断はするなよ。そして今お前が言ってい

た自分が手酷くやられた相手だが、獣型の強さを遙かに超えた人型のタタリだった」

一同

「……っ!？」

ハク

「タタリはオンヴィイタイカヤンの死にたくない願いによつて生まれた、その代償として理性を失っている。それはこちらの世界のタタリも同様だ、こちらの世界でタタリを倒せば現実世界のタタリも連動して自然と浄化される。だが人型は理性を失っていない、ありえないことだ」

クオン

「お父様が言つてたかな、ウィツアルネミテアの力を強く受けたタタリがいるって、まさかその人型が、？」

ハク

「おそらく願いを叶えたにも関わらず理性を失つていない事に気付いたウィツアルネミテアがさらなる力を使い理性を奪おうとしたのだらう、だがそれでも理性を失わずにいたゆえとてつもない力を手にいれたと推測できる。おそらく現実世界でも相当手強いタタリのはず、それこそ先のアマテラスの火力でも倒せないほどの、な」

アンジユ

「ならばなおさらこちらの世界で倒さねばならんのじゃ、なんとしてでも」

キウル

「倒せるでしょうか、正直聞いてるだけで胃が痛くなりますが、」

ハク

「この面子で連携できれば難しくはなからう、一体だけなら、な」

ミカツチ

「ほう、やはりな、貴様が一体を相手に手酷くやられるのはどうにも腑に落ちなかったが、そういうことか」

ハク

「人型のタタリだが、自分が相手にしたのは三体。やつらの口ぶりからしておそらく30は超えている、もはや自分1人では不可能だと判断してな。こうやって助けを求めたってわけだ」

クオン

「最初から呼んでほしかったかな、いつも自分1人でなんとかしようとして！周りの気持ちはもうちよつと考えてほしいかな！」

ハク

「うっ、む、」

クオン

「ハクっ！返事！」

ハク

「悪かったよ、これからはちゃんと呼ぶから勘弁してくれ」

その約束を全員とさせられたハク

心なしか嬉しそうなのは気のせいではないだろう

ミカツチ

「しかし人型のタタリとはな、ムネチカよ、どう思う」

ムネチカ

「ふむ、倒せるらしいがその強さはあのハク殿を窮地に追い込むほど、我が守りもどこまで持つか」

ミカツチ

「三体だったとはいえ、相当な強さであろうな。ならばっ、」

仮面に手をつけるミカツチ

ハク

「ああ、やめとけよミカツチ。お前もあまり無茶できん体だろう、それ以上仮面の力は使  
うなよ」

ミカツチ

「むっ、」

ハク

「これ以上仮面のせいでネコネを泣かすわけにはいかないんだ、わかってくれ」

ミカツチ

「むう、やむを得んか」

ハク

「ムネチカ、守りは任せてよいか？」

ムネチカ

「うむ、どこまで通用するか分からぬが最善をを尽くそう」

そうやって各々に役割を与えてその日は解散となった

## 解散後の2人

各々に役割を伝え解散となった、はずなのだが

ハク

「なぜ、まだここにいるクオン？ 皆は帰ったぞ？」

クオン

「あー、ひどいかなー。私に帰れと言うんだ？ ふーん」

あ、これはやばい。そう感じたハクは双子に目配せをする

ウルウル、サラアナ

「仕方がない、主様を今まで独占できただけ良しとします。ごゆっくりどうぞ」

ハク

（相変わらず何を言ってるんだこいつらは、）

クオン

「べ、別に話をするだけかな!! な、何もそれ以上の事なんて望んでは、い、いなくもないけど」

ウルウル、サラアナ



「??、だからどうぞ、クオンさん何をそんなに赤くなっているのですか？具体的に、何を勘違いしていたのですか？」

クオン

「何もないから！さっさとあっちに行つててくれるかな！」

去り際に二人がガッツポーズをしていたのは言うまでもない

ハク

「で？話つてのは？」

クオン

「うん、前も聞いたことあつたと思うけど、ハクは全てが終わつた後、何をするつもりなのかなつて」

ハク

「そういえばそんな話をしたことがあつたな、あの時は気ままに旅をするとか言つてたな、」

クオン

「うん、あの時とはまた事情が違うだろうから答えも変わってるんじゃないかって、」

ハク

「とりあえずはトウスクールに行つて先代に会うのが先決だろうな」

クオン

「あ、なんか力を一部受け継いでなかったんだっけ、ふふっ文句でも言うつもりかな？」  
ハク

「何を言っている？先代はクオンの親父さんだろう？クオンを嫁にするならあいさつしなきゃ筋が通らんだろうに」

クオン

「へっ!?よ、嫁!?!」

ハク

「あ、そうか。オボロ皇にもあいさつせにやなんのか、ボコボコにされそうだな、ハ  
ハッ」

クオン

「ハ、ハク！な、なんか急すぎて、は、話についていけないのだけど!」

ハク

「もしかして迷惑だったか？クオンと一緒になれば自分としては幸せなんだが  
クオンの動揺はとまらないがなんとか冷静になり深呼吸を繰り返す

ハク

「ク、クオン？」

クオン

「ハク、凄く嬉しいし私も、その、一緒にになりたいのだけど、唐突すぎるかな!!」

ハク

「うおっ!!」

急に大きな声を出されよくわからない反応をするハク

クオン

「物事には順序が必要かな!お互いをよく知って、ちゃんと愛を確かめあって、ってあれ?」

ハク

「条件は揃ってるみたいだが?」

クオン

「うう、で、でもさすがにいきなり言われたらびつくりするかな!!恥ずかしいかな!!」  
ハク

「うーん、確かにいきなりだったか、それはすまんかったな」

「そう言い満面の笑顔を見せるハク

クオン

「あっ、」

その顔を見るとクオンは瞬く間に顔が真っ赤になっていった。  
クオン

「ずるいかなっ、その顔で、ぶつぶつ」

ハク

「ん？何か言ったか？」

クオン

「な、なんでもないかな！」

しばらく沈黙が続く、

クオン

「ねえ、ハク」

ハク

「ん？」

クオン

「私はね、ハクが好き、この気持ちは誰にも負けないつもり」

ハク

「ああ、自分もクオンが好きだ。」

クオン

「でもね、アトウイも、ノスリも、ルルテイエも、ハクの事、」

ハク

「自分もそこまで鈍感ではないつもりだ、わかっている」

クオン

「ゲンホウさんにもね、言われたんだ。正妻じゃなくてもいいからノスリにもハクの愛情を注いでやれないかって、」

ハク

「お、おい。自分はそこまで節操のない男ではないつもりなのだが？」

クオン

「わかってるかな、私が望めばきつとハクは私だけを愛してくれるかな。でも私は、皆にも幸せになつてもらいたい。家族になれるなら、あのね、私にお母様がいつばいい理由、わかるかな？」

ハク

「そう言えば、いや、まさかつ」

クオン

「あはは、お父様も意外と気の多い方だったから。私はね、あの家に生まれたからあの空間の楽しさを知っているの、だからね、ハク。貴方さえよければけど、考えてく

れないかな？」

ハク

「むう、よく考えれば想像に難くないことであつたか、」

クオン

「あはは、ハク、口調がオシユトルの時みたいになつてるかな」

ハク

「む、もはや慣れてきていたからな。時折出てしまうな、」

クオン

「長い事やってたものね、仕方ないと思うかな。」

ハク

「まあその件はそちらの女衆でも話し合つてくれ、どうにも自分が決めるとややこしくなりそうだし、」

クオン

「了解かな、一応皆の了承を得たらちゃんとした返事を聞かせてくれるかな。そこは男らしく決めてねハク」

ハク

「はああ、了解だ、やれやれ、どうしてこうなつた、」

クオン

「ふふっ諦めるしかないかな、時は戻せないのだから」

ハク

「!!?」

ハクが何かに気付く

ハク

「ウルウル!!サラアナ!!」

ウルウル、サラアナ

「ここに、主様、この気配は」

ハク

「やつらではないが、少しでかいな」

クオン

「ハクっ、まさか!？」

ハク

「タタリだ、皆は一度帰ってしまった以上自分達でなんとかするしかない、クオン、頼めるか？」

クオン

「もちろんかな、そのためにここにいるのだから！」



# タタリとの戦い、そして

ハク

「こいつはまた、ずいぶんとでかいな、ガウンジくらいあるか、」

クオン

「けっこう強い部類だったりする？私は見るの初めてだからよくわからないのだけど」

現れた獣型のタタリを見てクオンは冷静に相手の強さを見極めようとする

ウルウル、サラアナ

「今までの相手を考えると中の上、中々の強敵です、ですが問題はそちらではないかと」

クオン

「えっ？」

ハク

「うむ、問題はここまで接近を許しながら某が気付けなかったことだ。こやつ本体が所有している能力なのかあるいは、」

クオン

（また口調がオシユトルに、なんだかかわいいかな）

クオンはそう思いながらもすぐに目の前の敵に集中する

ウルウル、サラアナ

「付近にアレの反応はない、とりあえずはこの一体だけと思われます」

ハク

「ふむ、ならばこやつを早々に片付ける！クオン！ウルウルとサラアナの術でやつを消し去る！某とお主でヤツを引きつける！行けるか？」

クオン

「当然、問題ないかな。行くよ、ハク！」

クオンが凄まじい速さで攻撃をしかける、ハクもそれに続きウルウル、サラアナに攻撃がいかないうように自身にその注意を引きつける

クオン

「こつちかな!!」

クオンの動きにタタリが釣られる

ハク

「くらえいつ!!」

ハクの一撃がタタリをとらえる、が

ハク

「ぐっ、こやつ、硬いな、」

クオン

「ハクっ！大丈夫？」

クオンが駆け寄ってくる

ハク

「ああ、問題ない。物理攻撃は効果があまりないようだな、だが、時は稼げたか」

クオン

「そうだね、すごい術が飛んでくるかな、ハクっ」

ハク

「ああ、合図をしたら左右に分かれヤツを翻弄する。準備はいいか」

クオンは何も言わず頷く

ハク

「今だ!!」

クオンとハクが素早く左右に分かれ移動する、どちらを狙うか迷ったのかタタリは一瞬硬直する、その硬直が決めてとなった

タタリ

「!!!」

気づけば真下に巨大な黒い渦が発生していた、抜け出そうと暴れるタタリだが、無論なす術もなく飲み込まれていく。最後の抵抗なのか腕を大きく伸ばし双子を狙う

ウルウル、サラアナ

「あまい、その程度、主様はお見通しです」

ガキイイイーン!!

タタリの最後の攻撃はハクの鉄扇により防がれた

ハク

「もうよい、お前達の時代は終わったのだ。そのような姿になってまで生きながらえたかったわけではないだろう。もう休め」

そう言った後タタリは渦の中に消えていった

???

「ありがとう、」

どこからか声が聞こえた、

ハク

「、、クオン、無事か？」

クオン

「うん、あれが、獣のタタリなんだね。確かに強かったかな、」

ハク

「今回は一体だけだったのが幸いしたな、ウルウル、サラアナ、他に気配はないか？こつちでもやってはいるが今のところあれ一体だけだ」

ウルウル、サラアナ

「主様、いる、アレが近づいてきます」

ハク

「!!!」

ハクが急ぎ気配を探る

ハク

「くそつ、消耗してる今では厳しいか、数は、一体だが、間が悪すぎる」

「???

「おや、君だったのか、まだ生きていたんだね。死んでもおかしくなくらいだったのに。」

クオンは瞬時に気付いた、人型のタタリだと。そしてその底知れない強さに恐怖すらいなくほどだった

ハク

「何用だ、ここにいれば其方の力は十全には発揮できまい、某と戦えばただではすまぬ

ぞ」

消耗しきっている今ハツタリくらいしかやれることはなかった

???

「あつはつは、心配しなくてもここでは戦わないよ。今の君なら瞬殺できるだろうけど場所が悪いからね。結界内では例え倒しても我々の益となる魂はとれないからね」

ハク

「ならば何故来た？」

???

「僕のペットが急にこつちにきちやつてき、あ、そつかと言う事は君に倒されちゃったんだねあの子は」

ハク

「先のタタリか、」

???

「あの子は存在を希薄にできるから面白かったんだよ、でもまあ倒されたんなら仕方ないね。じゃあ僕は帰るよ。」

ハクはその者の動きに細心の注意を払っている、その次の瞬間

クオン

「えっ？」

ハクと人型が互いの武器を互いの喉元に突きつけていた

???

「やはり、一筋縄ではいかないね君はっ」

ハク

「帰るなら早く帰るがいい、これ以上ここにどどまるなら刺し違えてでも貴様を殺す」

クオンがハクの殺気を感じ取る

クオン

「ハクっ、貴方はそこまで、」

クオンは気付いてしまった

「殺す」この言葉を平然と言つてのけるほどハクは余裕のない3年を過ごしたのだと

???

「、まあいつか。じゃあね、ペットの借りはいずれ返させてもらおうから。覚悟しとくん  
だね」

そう言つて人型は消えていった

ハク

「……ふう、」

クオン

「ハク、大丈夫？」

ハク

「ああ、はは、ちよつとは幻滅したか？あんな自分は見たことなかったろう」

クオン

「幻滅だなんて、するわけないかな。ただ、ハクのこの3年間は想像を絶するんだなつて、私は、ハクに会いたかっただけだから、なんか恥ずかしくて、」

ハク

「今の自分、そして人型のやつのも含め皆に報告頼めるか？」

クオン

「うん、任せといて、」

本当なら残っていたい、今のハクを見て心からそう思ったクオンだが今は耐えるしかないことも分かっていた

だから、

クオン

「ハク、」



クオンが駆け寄りハクにキスをする

ハク

「ク、クオン!？」

クオン

「必ず、必ず生きると約束して、さっきの貴方の言葉、刺し違えてもって聞いた時、私は、悲しくて、、」

ハクは失言した事に今気づいた

ハク

「すまない、もちろん死ぬ気はない。だが言うべき台詞ではなかったな、」

クオン

「うんっ、、うんっ、、」

ハク

「ありがとうクオン、だがそろそろ今日はお別れのようだ、先ほどの戦いで思いのほか時間が短縮されたようだな、」

クオン

「うん、ぐすっ、ハク、必ずまた呼んでね、」

ハク

「もちろんだ、またなクオン」

そうしてクオンは元の世界に戻っていった

クオン

「、、、つよし!!皆に報告しないとかな!」

初めてあちらの世界のタタリと戦い、人型にも遭遇した事を皆に報告した

## 異界から戻りて

クオン

「、、、と言う事があったのだけど」

皆クオンが異界で経験した事を聞き終える

アンジユ

「ふむ、人型とはそこまでの脅威であるか。他ならぬクオンが言うのじや、相当であろうな。」

皆クオンの強さを知っている、だからこそクオンの語った内容から自分達の成そうと  
してる事の難しさを痛感していた、が

ヤクトワルト

「まっ旦那が苦戦してたんだ、当然と言えば当然だったじゃない」

キウル

「そうですね、問題は足手まといにならないだろうかと言う感じでしょうか」

オウギ

「確かにそうですね、いざ対峙して相手の動きが見えませんでしたと言うのは戦う以前の問題でしょうから」

ミカヅチ

「そこは問題あるまい、あの戦争を、そしてあの異変を乗り越えた者なら足手まといにはならんだろう」

ムネチカ

「小生もそこは問題ないと判断する、ハク殿はミカヅチ殿に仮面の力を使わぬよう注意していた。ならば我々の連携がしっかりしていれば充分戦力になるであろう」

アトウイ

「ウチは相手が強ければそれでいいしなあ、さらに言うならおにーさんと背中を預け合う感じで戦えたらもう最高やなく」

結局は皆そこまで気負う事はなかった

アンジユ

「ところでクオンよ」

クオン

「ん？まだなにか気になることでもあるかな？」

アンジユ

「大ありじゃ!!お主っ一人で勝手に残りおつて!ハクと何をしたんじゃ!あんなことやこんなことして一人だけずるいではないか!」

クオン

「んなつ、!べ、別に話してただけかな!途中でタタリも現れて話も途中だったし!」

アンジユ

「どうだかのう、お主の事じゃ。どさくさに紛れて口付けくらいはしておるんじゃないか」

クオン

「!!」

アンジユ

「なつ、その反応!!やはりやっておるではないか!!抜け駆けとはいい度胸じゃのうクオン」

クオン

「べ、別に両思いだから問題ないかな。うん」

アンジユ

「むきーっ、クオンのくせに!クオンのくせに!」

アトウイ

「なあなあクオンはん？ウチも今度おにーさんと子作りしてええけ？」

クオン

「子っ、！！そこまではしてないから！！」

アトウイ

「そうなん？じゃあ先におにーさんと子作りええけ？」

クオン

「はあ、アトウイ、ノスリ、ルルティエちよつとこつちへ」

ノスリ、ルルティエ

「??？」

クオンは異界にて、ハクに提案した事を3人に告げた。とりあえず明確にハクに好意を寄せているこの3人をまず取り込もうと考えたからである。アンジユはハクの身内も同然なので除外していた

ノスリ

「んなつ、なー！！父上までもそんな事を！！」

ルルティエ

「私が、、ハク様と、！」

アトウイ

「ふうん、悪くない考えやえ。一番はクオンはんやからどうしようか迷ってたし、クオンはんからその提案が来たなら断る理由はないなあ。ウチ、その提案乗ったえ!!」

クオン

「アトウイは賛成みたい、ノスリ、ルルティエはどう？強制はもちろんしないかな」

ルルティエ

「私も、賛成です。形はどうあれハク様と結ばれるなら」

クオン

「ノスリは？」

ノスリ

「うっ、しかしだな、」

クオン

「あまり難しく考えないほうがいいかな、ハクが好きなら賛成して欲しいだけだから。私もそうなれば皆と家族になれるからすごく楽しくなる気がするの」

ノスリ

「あつ、そう、だな、いつまでも認めないのは良い女のすることではないし。うん、私も、賛成だ」

クオン

「ふふ、ありがとうノスリ」

ネコネ

「、、まったく、兄様もとことん罪な人です。」

クオン

「あつ、ネコネ」

ネコネ

「まあ皆さんが兄様の妻になれば皆さんは等しく姉様となるわけですから特に反対する理由もないですが」

クオン

「ありがとうネコネ、ふふ、大家族になっちゃうね」

ノスリ

「しかし父上もハクの事相当買っているのだな、」

オウギ

「それはもちろん、たまに顔を出してはハクさんはまだ見つからないのか必ず聞いて来ますからね」

ノスリ

「そうか、なるほど、、ってオウギ!?いつのまに!?!」



オウギ

「ああ、これは失礼。何やら面白い話をしてそうだったのついで」

クオン

「ノスリの性格からして隠せるものではないから別にいいのだけど、女の会話を盗み聞きは感心しないかな」

オウギ

「おやおや、それではこの辺で失礼します」

クオン

「まったたく、さて、後はハクに男らしく決めてもらうかな」

アトウイ

「なんや楽しくなってきたえ、ようやくおにーさんと結ばれると思うと、もうお腹の下のキュンキュンする感じが止まらんえ、なあクラリン？」

クラリン

「プルプルプルプル〜」

ルルティエ

「ハク様、今度こそ、精一杯のご奉仕をつ」

2人の意気込みがすごい

ネコネ

「だ、大丈夫ですか、あれは」

クオン

「ま、まあなんとかなる、、んじやないかな」

不安になる2人であった

異界

ハク

「ふむ、ここか」

ウルウル、サラアナ

「穴、結界内でわずかにできた穴のようです。ですがこれは」

ハク

「オシユトルを帰した時か、そのタイミングを見計らって自身の存在を消したあのタタリが侵入、と考えるのが自然だが、あのタタリに結界をこじ開ける力はない。ならばあの人型がこじ開けたのか？ いや、気配はなかったはず」

ウルウル、サラアナ

「現時点ではわからない、確かなのはこの穴から獣型も人型も入ってきたと言う事くら

いでしょうか？」

ハク

「ああ、今後結界を展開する時は細心の注意が必要だな」

ハクは例の倒した獣型のタタリを思い出していた

何か他のとは違う、それこそ人型にペット扱いをされるタタリなど、聞いた事がなかった

それにあのタタリが浄化された時に聞こえたあれは、

わからない事が増えてきた、ハクはそれがたまたまなく不安だった

## 初陣

異界から戻り3日が経った時、皆はハクに呼ばれ再び異界へと向かった

ハク

「すまなかつたな、ちよつと情報を整理しているとあれよこれよと問題があつて皆を呼ぶのが遅くなつた」

クオン

「あのタタリ襲撃の件かな？」

ハク

「ああ、一応結界を張つていたのでな、なぜ侵入できたのか調べていた。今回も張つているが皆油断はしないよう頼むぞ」

そこでハクは結界に穴が開いていた事を話す

ミカツチ

「いつ開けられたのかは分からぬのか？貴様が張つた結界ならわかりそうなものだが」

ハク

「おそらくはオシユトルを帰した時だろうな。結界外に出たのはアイツだけだからな、

かと言つても死者が出て行つた程度では少々一部分が弱くなるくらいだ、その一瞬を狙いこじ開けるなんざ並大抵のものではできん、」

クオン

「じゃああの時の人型が？」

ハク

「その可能性も考えたがそれなら気配を察知できたはず、、」

アトウイ

「要はよくわからんけど結界に穴が開いてタタリが入つてきた事しかわからんって事でええけ？」

ハク

「まあ簡単にまとめるとそういう事になるな、なんだアトウイちよつとは頭がよくなつたか？」

アトウイ

「おにーさん酷いこと言うなあ、これでも八柱が1人やえ。それなりに勉強してきたつもりなんよ。ノスリはんは相変わらずやけどなあ」

ノスリ

「そ、そういう事はオウギに任せているからな。」

ハク

「はは、その分強くなったのだろうノスリ？それはそれで成長だ。誇っていいと思うぞ」  
ノスリ

「ハク、と！当然だ!!我が弓の精度はもはやヤマトに並ぶ者はいないほどだから!!」  
キウル

「確かに、今のノスリさんの弓の実力はヤマト一と言つてもいいほどです。僕は政務に追われあまり成長できていないので実力不足になるかもしれないかもしれませんが」

ハク

「キウル、政務もまた人を成長させる一因だぞ。視野が広がるしな。」

シノノン

「そうだぞキウル、このシノノンのだんなになるんだからいつまでもよわきはよくないぞ」

キウル

「はは、そうだねシノノン。ありがとう」

皆あまり緊張していない、かと言つて気を抜いているわけでもない。ほんと頼もしくなった、この3年間で見違えるほどに、

ハク

「ふむ、ならばさっそく倒しに行くか？タタリを」

皆それを聞くと一気に真剣な眼差しになった

ハク

「良い気迫だ、まずは小手調べだ。この結界から出るが出た瞬間戦闘は始まる。皆準備はいいか？」

皆迷う事なく頷いた

ハク

「ならば某の力で移動する、出陣るぞ!!」

そう言うと同時に景色が変わる、そこには20を超える獣がいた。空気で分かる、この獣は現実世界で倒していたものより明らかに強いと。

ミカヅチ

「なるほどな、獣型とやらでこれほどとはな。中々に楽しめそうだ」

アトウイ

「ああ、すごいなあ、これで小手調べなんやもん。アハ、アハハハ」

ハク

「ふむ、」

ハクが皆の様子を見て瞬時に指示を出す

ハク

「ミカツチ！アトウイ！お前らには下手な指示を出すよりかは勝手に動いたほうが効率が良い、とりあえず暴れ回れ!!」

アトウイ

「ああ、やつぱおにーさんはウチのことよく分かつてるなあ、じゃあ遠慮なくっ!!」

ミカツチ

「元よりこの程度の相手なら貴様の指示など聞く気はない、では参る!!」

ハク

「クオン！ヤクトワルト！可能な限りでいい！アトウイとミカツチの援護を！」

ヤクトワルト

「任せるじゃない！」

クオン

「了解かな」

ハク

「キウル、ノスリは分かっているだろうが後方からの各個撃破だ、オウギは某と共に前衛が撃ち漏らしたやつらを叩く、ルルティエは救護役を主に万がここまで敵が来たら聖上と共にココポで倒してくれ。ムネチカ、ルルティエと聖上は任せた」



アンジュ

「待つのはじや！何故余が後方で待機なのじや!？」

ハク

「聖上、いや、今はアンと呼ばせてもらおう。アンの力は強大だ、使うのは今じゃない。前回の時同様に人型が乱入してくる可能性も無くはない。そうなった時アンの力が必ず必要になってくる、見てるだけは辛いだろうが耐えてくれ」

アンジュ

「ぬっ、わかつたのじや、他ならぬ其方が決めた事であったな、忘れておったわ。其方はヤマトの総大将を務めたほどじやからな」

ルルティエ

「アンジュ様、こちらに。皆の勝利を信じましょう、ハク様、この場はこのルルティエにお任せを」

ハク

「ルルティエ、頼もしくなったな、オウギ、行くぞ」

オウギ

「ええ、それではみなさん、また後ほど」

ハク

「おっと、そうだネコネ、お前もアンとルルテイエと同じく後方待機だ。見た感じ相当腕を上げたに見える、もしもの時は頼む、ウルウル、サラアナ、お前達は先に伝えた通りだ。よいな」

ネコネ

「ハイです、兄様もお気をつけて。死んだら許さないですよ」

ウルウル、サラアナ

「御心のままに」

ハク

「うむ、待たせたなオウギ、では行くぞ」

そして前衛の2人と援護2人だが

皆それぞれ圧倒的な強さで獣型を倒していく、だがそこに

ミカツチ

「ぬうっ!!こいつは!!」

それはハクとクオンが倒したタタリより一回り、いやそれ以上に巨大なタタリだっ

た

ハク

「やはり想定外のタタリが出るかつ、嫌な予感ばかり当たる!!」

ハクがミカヅチの元に駆け寄る

ハク

「無事か、つて聞くまでもないか」

ミカヅチ

「当然だ、だが貴様の言つた通り、一筋縄ではいかんようだな」

ハク

「ふむ、だが助けはいらんのだろうか？」

ミカヅチ

「仮面の力なくともこの程度なら1人で充分よ、オオオオオ!!」

ミカヅチが巨大なタタリに向かっていった、そして1分もしないうちに結果は出た、タタリが細切れにされていく。

ハク

「さすがと言うべきか、だが」

ミカヅチ

「ぬうっ、！」

ハク

「さすがにこれ以上は戦わせられんぞ、戻ってルルティエに診てもらえ」

ミカツチ

「やむを、得んか、」

ここでミカツチを後方へ撤退させる

そこからハク、オウギは前衛の撃ち漏らしたタタリを確実に倒していく。

だが、しばらくすると撃ち漏らしが多くなってきた、気になったので別行動を取っていたオウギと合流する

ハク

「、、オウギ、戦況は？」

オウギ

「タタリの数は残りわずか、こちらはミカツチさん、アトウイさん、ヤクトワルトさん、前衛3人が継戦不可。クオンさんが凄まじい強さで残りを殲滅中、姉上、キウルさんや後衛にはもはや危険はなさそうです」

ハク

「アトウイ、ヤクトワルトまで撤退したか。当初の数より多いな、」

オウギ

「ええ、しかし後わずかと言ったところです。ですが個人的には後方から随分距離があるのがどうにも、」

ハク

「!!?」

確かに、気付けば元いた場所よりかなり前に来ていた

ハク

「、と言うことは、危ないな」

オウギ

「ええ、人型が理性を持っているならおそろくは」

ハク

「誘い込まれたか、オウギ、某は戻る、状況をクオンに伝えてくれ。余裕があるなら急ぎ戻って来てほしいとも」

オウギ

「了解です、皆さんを頼みます」

ハクが急ぎ後方に戻る、もはや確信があった。人型がいると

ハク

「小手調べだったはずだが、まさかいきなりとはな。アンとウルウル、サラアナ、ルル  
テイエ、ネコネでどこまで耐えられるかつ、」

## 人型のタタリ

アンジユ

「さすがはハクと言ったところかの、、そちが人型のタタリじやな」

アンジユがとてつもない気迫で睨みつける

???

「へく、中々の気迫だな。あのすました仮面野郎も悪くはなかったが、こっちはこっちで  
楽しめそうだ。」

アンジユ

「お主、名はあるか？」

???

「名前、か。人であった頃の名は捨てたよ、俺はな。今はバムナーと名乗っているぜ」

アンジユ

「人、オンヴィタイカヤンの時か」

バムナー

「あんたらの世界ではそう呼ばれているみたいだな、さて、あまり長話もするつもりも

ないんでな。死ぬ覚悟はできたかい？」

ネコネ

「何処を見てるですか？」

いつのまにかネコネが間合いを詰めていた、アンジユもこれには驚きを隠せなかった  
アンジユ

「ネコネ!? いつのまに！」

バムナー

「、、っ!! てめえ!!」

ネコネが驚きの速さでバムナーを攻撃し、距離をとる

ネコネ

「これは失礼しました、あまりにも無防備すぎたのでつい手が出てしまったです」

澄ました顔で挑発するネコネ

バムナー

「なるほど、なるほどなあ。確かに、甘く見ていたようだ、この中で一番気を付けないといけないのは奥の嬢ちゃんだと思っただが、てめえも追加だなあ、!!」

バムナーの雰囲気が変わる、戦闘態勢をとったのだろう。ネコネも構えを見せる

ネコネ

「聖上、ムネチカさん。守りを頼んだです」

ムネチカ

「し、しかしネコネ殿1人ではっ、！」

ムネチカが止めようとする、が

ミカツチ

「ムネチカよ、やらせてやれ。」

ムネチカ

「ミカツチ殿!?何故だ、ネコネ殿は其方の妹も同然であろう!？」

ミカツチが微笑む

ミカツチ

「今のネコネだが、正直俺やお前でも勝てるかわからんぞ。」

ムネチカ

「な、につ、まさか。」

それを聞いたムネチカは正直ミカツチの言っている事を信じている事ができなかつた

ミカツチはさらにこう言つた

ミカツチ

「元々術関連の才能は抜きん出ていた、さらに武の才能も尋常ではなかつたのだ。この



3年、ネコネに戦いを教えて来た俺だが、最近一本とられたばかりよ」

ムネチカ

「なっ、」

ミカツチ

「あの武器も中々理に叶っている、ネコネの術をまとい直接叩きこむ事が可能だ。くつくつく、番狂わせがあるかもしれんぞ」

そうミカツチが言った次の瞬間ネコネが動いた

ネコネ

「、ツシ!!」

バムナー

「ふんっ!!」

一度互いの攻撃を出すと互いに距離をとる

そんな攻防がしばらく続いた、そして

ネコネ

「やっぱり、、なかなか手強いですね」

なかなか相手に決定打を与えられない、、おそらくバムナーはまだ本気ではない。ネ

コネはそれを直に感じていた

バムナー

「強いな小娘!!正直驚きを隠せんよ、なるほど、全員を相手にすれば確かに勝てんわ。しかも、本命が到着してしまったか」

ネコネがバムナーの視線の先に目をやる

ハク

「皆無事か?」

ハクがバムナーに意識をやりつつ皆の無事を確認する

ネコネ

「兄様っ、ハイです、戦っていたのは私だけなので聖上やルルティエ様には怪我はないです」

ハク

「遠くからだったがネコネの戦いを見させてもらったよ、ネコネ、ありがとう。助かったよ」

そう言いネコネの頭を撫でる

ネコネ

「あ、あ、兄様も無事でなによりなのです」

ハクはネコネのその言葉を笑顔で返す、そしてバムナーに相對する

ハク

「お前だったか、名前は、バムナーだったか」

バムナー

「ハク、だったな、先日は俺の仲間が世話になったな。まさかほんとに生きていたとは、なかなかのしぶとさよな。」

ハク

「今日は小手調べに来ただけでな、できればここは帰ってもらいたいのだが？」

バムナー

「ほう？今なら俺を浄化する好機なんじゃないのか？いいのかこのまま見逃して」

ハクが後方にある丘を見つめる

ハク

「ふん、お前だけならこんな提案はしない。いるんだろう、あの時の2人も」

バムナー

「、やはり貴様は危険だな。ここで消しときたいがさすがに前回同様と言うわけにはいかんか。いいだろう、ここは引いてやろう、それに」

バムナーはネコネに目を向ける

バムナー

「小娘との決着はこんなところでつけるには惜しい、いいか小娘、貴様は俺の獲物だ。忘れるなよ」

ネコネ

「どうでもいいですよ、私は兄様さえいればいいので」

バムナー

「くははっ!! まあいい、貴様らの命は次まで預けといてやる。さらばだ!」

そう言うとはバムナーは去っていった

それと同時にオウギ、クオンが合流

クオン

「ちよつと遅かったかな、ハク、皆は?」

ハク

「ああ無事なようだ、人型をネコネ一人で食い止めていたようだな。遠くから見ているが、お前と同じくらい強いんじゃないかクオン」

クオン

「、、、へ?」

ネコネ

「まあ師匠がミカツチ様ですから、それなりに強くはなつたつもりなのですよ」

ミカツチ

「それでも早すぎる成長よ、天才と言っても過言ではあるまい」

ミカツチがいつのまにか会話に入ってくる

ハク

「ミカツチ、怪我はどうだ？」

ミカツチ

「傷自体は多いがどれも深くはない、次の戦いも問題はあるまい。アトウイ、ヤクトワルトに至ってはバテただけよ、心配は無用」

ハク

「そうか、なら安心だな」

アンジユ

「ふっふーん、ところでネコネよ」

ネコネ

「は、ハイです、なんででしょうか？」

アンジユ

「余の見せ場を奪うとはどういう見じや？んく？」

ネコネ

「聖上は最後の希望なのですよ、その実力も最後まで敵に隠しておくのも兵法の一種なのです」

いけしやーしやーと語るネコネ、だがアンジュには効果覲面のようで

アンジュ

「ぬ、そ、そうか、最後の希望か、う、うむ確かにそうじゃな!!」

ネコネ

「相変わらずちよろいです」

クオン

「い、いろんな意味でたくましくなったかな、ネコネ」

ハク

「まったくだ、ある程度皆の力は把握していたがネコネだけは予想を遥かに超えていたな」

クオン

「私は話を聞いたただだから未だに信じられないかな、あはは」

そう話をしながら元いた結界内にもどる一同であった

## 初陣を終えて

初陣を終えて結界内に帰ってきた一同

ハク

「皆、すまん、、どうにも最近予想外の出来事が多くてな。まさか人型まで乱入してくるとは思わなんだ、」

ハクは小手調べと言った手前かなりの強敵と戦わせてしまったことを詫びた  
クオン

「戦の常かな、仕方ないこともあるよ、事実最初の群れは小手調べ程度の強さだったし。途中からアトウイ、ヤクトワルトがいかにも戦いにくそうだったしね」

ヤクトワルト

「いやあ、面目ねえ、、そこまで未熟ではないつもりだったが、いきなり強い個体が多くなってきてねえ、、体力の配分を間違えちゃったじゃない、」

アトウイ

「ウチも似たようなもんやなあ、強めの敵さんがぎょうさん来てから楽しくて全力出すぎたえ。あそこからさらに増えたもんやからちよつとキツかったえ、」

2人は自身の不甲斐なさに苛立ちを隠せないでいた

ハク

「敵の増援は常にあると想定しておいてくれ、最初の群れだがあれが最弱の部類に入る。ミカヅチが相手にしたデカブツはかなり強めの個体だったが」

ミカヅチ

「万全ではなかったとはいえ中々手強かった、これからの事を考えるなら単独で向かうのは得策ではなさそうだな、だが今回はヤツ、バムナーだな」

ハク

「ヤツはあんな性格をしているが中々の策士らしくてな、自分がやられた時も他の2人をうまく使っていた、ネコネ、中々やかいなやつに目をつけられたな」

心配そうにネコネに話しかけるハク

ネコネ

「大丈夫ですよ兄様、あの場は守りも必要だったので1人で食い止めてましたが基本的には皆と一緒に戦うので今後一対一で戦うことはないと思うですよ」

ハク

「うむ、あまり無理はしてくるなよ」

クオン



「、、ねえハク、お願いがあるのだけど」

ハク

「うん？なんだ？」

クオン

「ネコネと、戦わせてくれないかな」

ハク

「!？」

何を言っている、とも思ったが

ハク

「確かめたいのだな、ネコネの成長を」

クオン

「うん、我儘だろうけど、ネコネ、お願いできるかな？」

ネコネ

「本来なら姉様に手を上げるなんてしたくはないです、けど、私の成長を見てくれるのであれば、望むところなのですよ、っ！」

そう言うのと2人は臨戦態勢に入る、が

ハク

「あぁっ!! 待て待て! ……ここでやられると結界に支障が出かねん、別の場所があるからそこでやってもらう!」

そう言うのと2人を別の場所に転移させようとする、がさらに

一同

「自分達も見たい」

そう言われ全員を転移させたのだった

ハク

「はぁ、はぁ、ちよつと疲れた、」

クオン

「ご、ごめんねハク、私の我儘で、」

クオンが申し訳なさそうにハクの背中を摩る

なおこの行為が他の女衆が羨ましがっていたのは言うまでもない

そして

クオン

「ネコネ、受けてくれてありがとうかな。」

ネコネ

「礼には及ばないのですよ、私も姉様にどこまで近づけたか興味がありますので」

そう言うと2人とも構えだした

ムネチカ

「ハク殿、どう見る？」

ムネチカも興味津々のようだ

ハク

「おそらくはまだクオンの方が上だろう、だが、某が見たあのネコネが全力であればの話だが」

ムネチカ

「バムナーと戦っていた時ですら全力ではなかったと？」

ハク

「わからん、だが、違和感がな」

そこでミカヅチが割り込む

ミカヅチ

「全力ではあった、だが奥の手は出していなかったな」

ハク

「ミカヅチっ、そういえばネコネの師匠とかだったな。ちやつかり妹を弟子にしやがって。まあそれはそれとして、奥の手だと？」

ミカツチ

「その奥の手を使われ俺は負けた」

ハク

「なにつ、」

ミカツチが負けただと？そんなばかな

ムネチカ

「どうやら事実のようだな、小生も驚いている」

ミカツチ

「まあ見ているといい、始まるぞ」

クオンはネコネと相対した時すでに気付いていた、その強さが本物であると、

ネコネ

「いくですよ、姉様っ、!!」

ネコネが仕掛ける

クオン

「っ!!?」

ネコネのあまりに速い攻撃に防御が間に合わず吹き飛ばされるクオン

クオン

(ああ、強くなったなあ、ネコネ、)

クオンはネコネの成長に嬉しくなったのか涙を流す、がすぐに拭き取り本気になるクオン

「ネコネ、こつちもいくよ、ちゃんとしてきてね」

ネコネ

「い、っ、ハイです！」

クオンの猛攻撃が始まる、ネコネはなんとか防いでいる、が徐々に防ぎきれなくなってきた

ネコネ

「ぐっ、あっ、ああっ、!!」

クオン

「ハアっ!!」

今度は逆にネコネが吹き飛ばされる

クオン

「ふうう、」

構えを解いたクオン、だが

ネコネ

「まだ、っ、ですよ姉様」

いつのまにかネコネが懐に入り込んでいる

クオン

「えっ!？」

ミカツチ

「でるぞ、あれが」

ハク、ムネチカ

「!!？」

ネコネ

「ハアアアっ!!」

ネコネの体が光り出していた

ミカツチ

「術を使う際の魔力を身体強化に回す、体に魔力を纏わすなどよく思いついたものよ」

クオン

「、嬉しいかなネコネ、こんなにも、こんなにも強くなつて、」

ネコネ

「アアアアアッ!!」

ネコネの体から発せられる光によって視界が奪われるハク達

しばらくして光は収まり2人の姿が見えた、倒れていたのはネコネであった  
クオンがネコネを抱えてハク達の元に戻る

ハク

「満足か？」

そう問いかけるとクオンは笑顔で頷いた

クオン

「うん、ありがとう、ハク」

そう言うときクオンも倒れた

ハク

「さて、皆、結界内に戻るぞ、あそこは治療にももってこいだからな。」

一同

「おぉー！」

ハク

「話の続きは2人の目が覚めてからか、やれやれだな」

意識失ってなお満足そうな2人の顔を見ると怒るに怒れないハクだった

## 次戦に備え

クオン

「うっ、ん、ここは、？」

ネコネとの戦いの後気が抜けたのか気を失ってしまったクオン

ファミルイル

「やっと起きましたねクーちゃん♪勝ったはずなのに何故かネコネさんより起きるのが遅いなんてお寝坊さんにもほどがありますよ」

クオン

「ファミルイル、そうだ、ネコネは？」

ハク

「心配は無用だ、随分と前に目を覚ましているよ。ファミルイル殿、結界の見張りを任せてしまつてすまないな。シノノンの面倒もついでに見てもらつて大変だったろう、さらにはクオンの看病もな」

クオン

「あう、ごめんね、ファミルイル」



フミルイルはハクの指示により結界内に異変があれば勾玉を通じて知らせるために結界内に残っていた、シノノンも連れていくわけにはいかないのでその面倒も見ていた。そして皆が戻ってきたにも関わらずクオンがネコネと戦ったためその治療も行なっていた。

フミルイル

「いえいえ、死地に赴く皆さんに比べたら容易い事ですよ」

ドダダダダッ!!

誰かがすごい勢いで走ってくる

ネコネ

「姉様!!ご無事ですか?」

クオンが目覚めたと聞き急いで来たのだろう

クオン

「ネコネ、ネコネこそ、大丈夫?」

ネコネ

「私は大丈夫なのですつ、でも姉様が目を覚まさないからもしかしたら私が姉様をつて、!」

クオン

「大丈夫かな、ありがとうネコネ。そしてごめんなさい、；、姉失格だね、」  
ネコネ

「そんなことないのですっ！私こそ、姉様にとんでもないことを、」

見かねてハクが割り込む

ハク

「2人とも戦わなければよかったなんて思っただろ、互いの事をさらに理解できたんだ。だからもう謝るな」

クオン

「う、うん」

ネコネ

「ハイです、」

ハク

「自分は先に皆の所に戻る、今後の事を話す必要があるからな、2人とも落ちついてからでいいから来るんだぞ」

そう言うとうみルイルも察したのか二人を残し出ていった

クオン

「ネコネ、強くなったね、本当に、強く」

ネコネの頭を撫でるクオン、それはハクがやるのとはまた違った暖かさがあった  
ネコネ

「姉様、えへへ」

クオン

「ハクのため、かな？強くなったのは」

ネコネ

「、ハイです、姉様から兄様がタタリの浄化をしてると聞いた時、どうしても兄様の力  
になりたかったです。」

クオン

「そっか、それにしてもビックリしたかな。わずか3年で追いつかれちゃったなんて」  
ネコネ

「魔力による身体強化はあまり長時間持たないのですよ、だから実際にはまだまだなの  
です」

そうしてしばらく雑談した後皆のいる所に向かった

ハク

「来たか」

クオン

「ごめんね待たせちゃって、今後の予定、だっけ？」

ハク

「うむ、特別何かってことはない。やることは変わらんからな。ただ今回皆の成長ぶりを見てな、次は試して見たいことがある。守りに特化した陣形を組みたい」

皆すでに聞いていたのか特に反論することない、ただアトウイは少々気に入らないのか不貞腐れていた

アトウイ

「ガンガン前に出れんのはつまらんえ〜」

さっきからこれしか言っていない

ハク

「そう言うな、たまにはそのつまらん戦も経験しておけ」

アトウイ

「いけずやなあ」

そしてハクは細かい指示を出した後皆を帰す準備をしていた

そこでクオンは皆に目配せをし、クオン、アトウイ、ルルテイエ、ノスリ、ネコネを残し帰ることとなる

ハク

「まさかとは思うが、すでに話がついていると言うわけではあるまいな」  
クオン

「さつすがハク、話が早いかな」

ハクが頭を抱えている

ハク

「アトウイはまあ、そうだろうな、しかしルルティエ、ノスリ、お前達は本当にそれでいいのか？」

ノスリ

「クオンに言われてな、ずっと認めないのもダメだと思ったのだ、私はなハク、お前が好きだ。誰よりも、何よりもだ」

ルルティエ

「私の気持ちは、エンナカムイの時に聞かれたと思います。ハク様のためなら何だつてしたいのです、それがルルティエの、素直な気持ちです」

ウルウル、サラアナ

「酒池肉林、主様の到達点の一つです」

ハク

「いや、違うから」

即座に突っ込みを入れるがハクに逃げ場はなかった、なぜならネコネまであっち側にいるからだ

ネコネ

「兄様、英雄色を好む、です。大人しく皆さんを妻にしてあげるですよ。そうすれば皆姉様なので」

ネコネがめちやくちや嬉しそうにしている、全員の妹になる、それが目的らしい

ハク

「やれやれだな、クオン、アトウイ、ノスリ、ルルティエ。覚悟を決めたなら何も言うまい、本来ならば4人同時などありえん事だが、お前達が決めたのならあえて言わせてもらう。お前達を妻にしたいと思う。いかがか？」

クオン

「もちろんかなつ、ハク」

アトウイ

「ウチも、もちろんハイや！」

ノスリ

「う、うむ、よろしく頼むぞハク」

ルルティエ

「ハイっ！ハク様、いつまでもお側に」

ハク

「しかしまあ自分の何処がいいのかね、」

ハクは自問自答せずにはいられなかった

ハク

「ああ、言つとくがあくまで自分が現界してからの話だからな、タタリを浄化するまでは油断するなよ」

ハクが4人に気を引き締めてもらうように注意する、が

ウルウル、サラアナ

「主様、私達が現実世界へ行けば2人までならここに居残れますか？」

ハク

「ばっ、お前達、それは言う、な、と」

手遅れだった

クオン、アトウイ、ノスリ、ルルテイエ、ネコネ

「、、ふーん」

やばい、、やばいぞ

クオン

「じゃあ私はとりあえず確定かな」

アトウイ

「まあクオンはんは仕方ないなあ、ウチも残りたいたいけどちよつと確かめる事あるからウチとノスリはんは次でええかなあ」

ノスリ

「な、なぜ自分も含まれるのだ!？」

アトウイ

「生娘違う言うてたし、確かめたいなあ〜て」

ノスリ

「なっ、なっ!」

アトウイ

「まあそう言うわけやし、ルルやんが残るとええよ」

ルルティエ

「あ、ありがとうございますっ!」

ハク

「ちよ、ちよつと待て!!あまりにも急ではないか!？」

クオン



「もう諦めるかなハク、私達もそれなりに恥ずかしいのだから覚悟を決めて欲しいかな」  
ハク

「ぐっ、」

さすがに予想外すぎて予感云々の話ではなかった

そうしてその日はクオン、ルルティエがハクと共に過ごすのだった

## 異界の仕事

ハク

「さて、と」

ハクはクオン、ルルティエ、二人との事がすんだ後結界の様子を調べていた

クオン、ルルティエの二人はぐっすり眠っていた

ハク

「修復した穴は問題ないか、しかし未だにわからん、なぜこんな所をこじ開けた、そしてどうやって、」

周りを念入りに調べていくハク、しかし

ハク

「わからんな、ん？」

何か落ちている、

ハク

「これは、ここで倒したタタリのは、鱗か」

それを拾い上げた瞬間声が聞こえた

???

「ああ、やっと拾ってくれたか、」

ハク

「な、に、何だ、この感覚!」

気付くと結界内ではない場所にいた、そして見慣れない人間、

ハク

「貴様、人型のタタリ、なのか?」

???

「いや、我は其方に倒されたタタリよ、結界内だな。名をキステラと言う」

ハクは必死に状況を整理していた、そして

ハク

「あの鱗は、貴様が浄化される前に置いたと言うことか。しかも某が1人の時にしか見つけられないように細工までしていたと見える」

キステラ

「ふふ、理解が早くて助かる。まずは礼を、我を浄化してくれた事に感謝を。」

ハク

「あの謎の声はキステラ、お前だったのだな」

キステラ

「いかにも」

ハク

「なぜ某をここに？礼を言うためだけではなからう」

キステラ

「我の分かる範囲で情報を提供しようと思つてな、人型の事、其方の気にしている結界の事などをな」

ハクは無言のままキステラの話を聞く

キステラ

「人型のタタリ、其方らはそう呼んでいるな。正式な名称はオーツと言う、その正体はわかつていよう。度重なる呪いを受けなお理性を保った我々人間だった者達だ。」

ハク

「、、、」

キステラ

「ふふ、感傷的な話はしないよ。事実だけを淡々と話していくつもりだ。彼等オーツは総勢34、其方が戦った三名もまあ弱めの方だと思つてくれ」

ハク

「やはり、な」

キステラ

「結界に穴をこじ開けたのは我と同じ存在を希薄にする能力を持ったオーツだ、名をキシタル。人であつた時は私の兄であつた」

ハク

「そういう事か、分からんわけだ、」

キステラ

「大したことない情報しか持たなくてすまない、それでも伝えたかつたのでな。」

ハク

「いや、助かった。こちらこそ礼を言う」

キステラ

「そう言つてくれるならありがたい、最後に其方の持つている鱗だが、常に持つていているといい。私の能力を使えるようになる」

ハク

「ふむ、その力はないがたいな。ありがたく使わせてもらう」

キステラ

「ありがとうハク、其方には感謝しかない。どうか彼等を、頼む」

ハク

「ああ、某の役目でもある。必ず皆を浄化する」

キステラはそれを聞くと満足したような顔で消えていった。そして元の結界内に戻ってきた

ハク

「い、なつ、半日も経っているのか」

ハクは急ぎクオン、ルルティエの元に戻る。

そして部屋に入った瞬間に2人が全裸なのを思い出す

ハク

「くつ、そうだった。なんと無防備な、」

2人に毛布を掛けた後に起こす

ハク

「いい加減起きろ二人共！そして服を着ろ!!」

クオン

「うゝん、ああ、ハクだあ、ハクウゝゝ」

ルルティエ

「ハク様あ？どうぞこちらへ」

せつかく掛けた毛布が、

ハク

「ぐっ、寝ぼけている場合か!!こっちはこっちで仕事があるんだ、そして服を着ろ!!」  
クオンとルルティエの胸が右往左往に揺れる、特にルルティエの揺れ方はすごい、

ハク

(これは、また、これ以上ここにいてはまずいな、)

なんとか二人の追撃から逃れたハク

そしてしばらくして服を着た2人が顔を赤くして出てきた。ハクの顔を見ると申し訳なさと恥ずかしさでさらに赤くなる2人

ハク

「2人共、仕事をやってもらう。皆の勾玉はこちらから力を流すことでより効率よく力がたまる。その力を流すのは自分がやるがその間自分は無防備だ、だから結界内の見張りを頼む」

ハクは2人のため追求はせず淡々と仕事を与え、自身はその場を離れる

クオン

「ルルティエ、私、恥ずかしくて死にそう、」

ルルティエ

「はい、、ハク様にあのような姿を、」

クオン

「ちよつと、幸せすぎて、浮かれちゃったかな」

ルルティエ

「そうですね、私もです」

「そう言いながら結界内を巡回するのであつた

ハク

「ふう、こんなものか、さすがに一気には無理だな」

「ハクはその日に送れる力を送った後巡回している2人を探し始める

ハク

「お、いたな」

「2人がハクに気付く

クオン

「あつ、」

ルルティエ

「ハク様、」



2人は未だに気まずそうだ

ハク

「やれやれ、もう切り替える2人共。それでも自分の嫁か。こっちは良いものが見れたのだがな」

クオン

「ハ、、ハクっ!!思い出させないで!あんな、あんな私、、!」

ルルティエ

「あうう、」

ハクは2人を抱きしめる

ハク

「いいじゃないか。夫婦なのだ、恥ずかしい事も全て受け入れよう。互いにな」

クオン

「ハクっ、」

ルルティエ

「ハク様っ、」

そう言うのと2人もハクを抱きしめる

ハク

「さて、落ちついたか2人共？」

クオン

「う、うん、それで何かな？進展があつたとか何とか」

ハクはキステラから聞いた話を2人にも話した

ルルティエ

「オーツ、ですか」

クオン

「まさかあのタタリが、想像もできなかつたかな」

ハク

「統一名称でも分かつただけまあ前進と言えるからな、こつちの情報網を過信させるの  
に使える」

ルルティエ

「早く皆さんにもお伝えしないとっ」

ハク

「ああ、だがまだこちらに呼べるほど力がたまっていない。あと2日はかかるだろう、そ  
れまでは結界内の巡回をやつてもらふことになる。頼んだぞ」

そう言ううとハクは自室に戻つていった

クオン

「ルルティエ」

ルルティエ

「はい、クオン様。」

反省はしたのだろう、だがこの後の二日間この2人が夜這いをしに行ったのは間違いない

変わって現実世界

アンジユ

「ぬうう、、余のハクがああ」

アトウイ

「聖上、諦めも肝心やえ。おにーさんは聖上の叔父にあたるんよ。さすがに聖上ともあろう者が叔父と関係を持つのはオススメできんなあ」

アンジユ

「ぐっ、、しかしじゃな」

アトウイ

「立場言うものがあるえ、なっ」

アンジユ

「ま、まさかアトウイにそのような事を言われるとは、」

ムネチカ

「しかし4人を嫁に、であるか。何故であろうな、ハク殿なら許せてしまう気がする」

ミカツチ

「まあ先の帝の弟であるからな。敬意を払うつもりはないがやはりあのお方の弟となればそれなりに納得はできよう」

キウル

「そんなにすごい方なのに親しみやすいですからね、兄上と呼ぶのも本来なら憚られませんが何故か呼びやすいと言うか」

皆何故か納得していた

アンジユ

「やつぱりあの夢は事実じゃった、ハクを叔父ちゃんと呼んでいた、あの夢は」

アトウイ

「ノスリはくくん、次はウチらやえ、ちゃんと準備せななあ♪」

ノスリ

「わ、私は別に添い寝だけでも、じゅ、じゅーぶんだぞ？」

アトウイ

「あかんよノスリはん、ゲンホウさんにも言われてたやろ、添い寝じゃ子作りにはならんて」

ノスリ

「な、なぜそれを知っている!？」

アトウイ

「あんどき丁度廊下を通りがかってなあ、面白そうやし聞いてたんえ」

ノスリ

「なっ!？」

アトウイ

「ちゃんと子作りしような、ノスリはん♪」

ネコネ

「ふう、兄様も大変なのです」

シノノン

「おうキウル、おれたちもこづくりだ」

キウル

「シ、シノノンちゃん!?そういうことはもっと大きくなってからね!!」

ヤクトワルト

「キウルよ、さすがに今のシノノンに手を出したらさすがの俺もキレちゃうじゃない。わかってんだろうねえ」

キウル

「わ、わかってますよ!! 剣を抜かないでくださいよ!」

シノノン

「とうちゃんのかほごだな。あまりかほごすぎるときらわれるぞ?」

ヤクトワルト

「おottoとそいつは効くじゃない! 仕方ねえキウル、後は任せるじゃない」

キウル

「ヤクトワルトさん!? 冗談ですよね!? 冗談って言ってください!!」

ヤクトワルト

「父親の宿命なのかねえ、こんなにも早く親離れされるとは、悲しいじゃない!!」

キウル

「あぐ、お腹が、」

ネコネ

「ほんと、やれやれなのです」

## 異界の仕事（2）

ハク

「、、、お前達、少しは自分を休ませるといふ考えはないのか？」

あれから夜這いが続いているおかげか皆の勾玉に力を送る作業に支障が出ている

ハク

「今はタタリをなんとかしている最中であろう、あまり毎晩来られてもだな。ウルウル、サラアナの方がまだ聞き分けが良いほうだぞこれでは」

反省はしていたはずだが、やはり幸せだったのだろう。そう考えるとあまりキツくも言えなかったが、今回は少し注意をすることになったハク

クオン

「うっ、あの双子より、」

ルルティエ

「ハク様、申し訳ございません、ルルティエは、ルルティエは、」

叱りにくい、実に、叱りにくい

ハク

「怒ってはいない、だが次はアトウイ、ノスリも待つているのだろうか？自分は一人しかないのだ、我慢も覚えてもらわねば。現界した時自分はもう人間だ、体力にも限界がある。それにここで負ければ自分が現界することも叶わぬのだ、わかるな？」

クオン

「そ、それはダメかな!!」

ルルティエ

「ハク様がない世界、、ああ、そんな」

ハク

「自分もせっつかくお前達と夫婦になれたのだ、そのようなことになるのはごめんだ。だから今回はもう我慢だ。良いな」

グウの音も出ない、はずだが

クオン

「じゃあ、今回は今夜が最後かな」

ルルティエ

「そうですね、最後にしましょう」

ハク

「、、、、、、、、ん、っ？」



最後？ いやいやいやいや、昨日で最後じゃないの!?

なんでまだあるみたいないな空気になってるの!?

そう考えていると2人はいつのまにか巡回に出ていた

ハク

「ちよつ、、、、どうして、、、こうなった?」

ハクは女心が心底わからないと思つた

ハク

「ふう、しかしこれ以上滞るわけにもいくまい、今回で終わらさなければな。」

そう言うとはクは勾玉に力を注ぎ始めた

場所は変わり巡回中のクオン、ルルティエ

クオン

「あ、危なかったかな、一緒にいながらお預けとか冗談じゃないかな」

ルルティエ

「そうですね、でも次からは自重しないといけませんね。ノスリ様とアトウイ様にも」

クオン

「人型の浄化が終わらないとやっぱり私達も幸せにはなれないものね、、、でも今晚は譲らないかな!」

ルルティエ

「ちよつと気が引けるのは確かですけど、」

クオン

「それはそれ、これはこれかな」

ルルティエ

「クスつ、そうですね。さあ、巡回頑張りましょうクオン様」

クオン

「了解かな」

巡回をしている最中2人は今まで見た事のない墓を見つける、普段の巡回では見つけられなかったくらいの場所にあったのだから今まで見つけられなかったのも無理はなかった

クオン

「これは、誰のお墓かな、」

ハク

「兄貴とホノカさんのだ、現界すればまた作るつもりだがこつちでもとりあえず、な」

ハクが2人と合流する

ルルティエ

「先の帝とホノカ様の、」

クオン

「そっか、私はあの時しかゆっくり話せなかったけど、なんだかお茶目な方だったね」

ハク

「まあ数百年とは言え弟の名前すら忘れるくらいだったしな。お茶目ですましていいのかわからんが」

クオン

「ハク、その、本当の名前は、」

ハク

「自分はハクだ、昔の名はもう捨てた。それに今はもうこの名は気にいつてるんだぞ？  
それではダメか？」

ルルティエ

「クオン様、もうハク様はハク様です。オシユトル様でもなくオンヴィタイカヤンの名でもなく、それでいいと思います」

クオン

「うん、そうだね。ごめんね今更、ありがとうかな、ハク」

そう言う3人は中央に戻る

ハク

「とりあえず勾玉の力を使うことができるようになった、巡回の任ごころうだった、明日はまたタタリの浄化に入るだろう。よって今日はゆっくり休むこととして」

クオン

「却下かな」

ルルティエ

「却下ですね」

ハク

「し、しかしだな、タタリとの戦いでは体調管理をしつかりせねば、」

クオン

「ハク、もしかして、迷惑、かな？」

上目遣いで見つめるクオン

ハク

（迷惑なわけないだろう、自分だってタタリとの事がなく現界できているなら断るような真似はしない！）

ハク

「だ、だめだだめだ、いくら言われても事は急を要するのだ！タタリはまだまだいる！そ

んな時にこう毎晩のようにだな!!」

クオンとルルティエがなお上目遣いで訴える

ハク

「ぐっ、っ、こ、今回だけだぞ」

クオンとルルティエの表情が明るくなる

そして3人は寝室に向かう

現実世界

アトウイ

「はあ、今頃クオンはんとルルやんは幸せの絶頂におるんやろうなあ。なあノスリはん

?」

ノスリ

「う、うん、いいんじゃないか。幸せならなによりだ、うん」

アトウイ

「ノスリはくん?ウチの言ってる幸せの絶頂ってのはあ、こによこによ

ノスリの顔がみるみる赤くなる

ノスリ

「なっ、っ、なっ、っ、なあああ!!」

アトウイ

「いややなあノスリはん、ウチらもそうなるんよ？ほら、想像してみ？ここらへんがキウンキウンせーへん？」

ノスリ

「もーもういいぞアトウイ!!わ、私はちよつと政務に入る!!」

オウギ

「おや、姉上、本日の政務なら先ほど終わらせておいたのでどうぞアトウイさんとの会話を続けてください。それではまた」

ノスリ

「オ、オウギ〜!!」

アトウイ

「なら大丈夫やなく、そんなでなくノスリはんのその立派なもんを使うて〜、ごによ〜によ」

ノスリ

「~~~~~つ!!!?!?!?!!」

ネコネ

「アトウイさん、そのままだとノスリさん倒れてしまうですよ。ほどほどにお願いするですよ」

アトウイ

「ええ、でもいい加減この手の話題慣れてもらわんとなあ、おにーさんもこつちに戻ってきたら毎日誰かの相手せなあかんやろうしなあ。なんならネコヤンも混ざるけ？」

ネコネ

「遠慮しとくですよ、興味が無いわけではないですが私は兄様の妹なので」

アトウイ

「ネコヤンは中々焦らなくなつたなあ、前までは焦つて言葉が出なくなる感じやったのになあ。なあネコヤン、ネコヤンは恋愛せんのか？」

ネコネ

「兄様を超える魅力を持つ男性が現れたらすると思うですよ」

アトウイ

「ネコヤン、それ、無理やえ」

ネコネ

「そうですか？なら最終的に独身のままです」

アトウイ

「これはおにーさんに相談せんとあかんなあ、ぶつぶつ」

密かにネコネを引き入れるために画策し始めるアトウイだった



## タタリ戦の前に

ハクは勾玉に呼びかけ皆を招集した

ハク

「相変わらず遅くなってしまつてすまないな。だがそれなりに有益な情報を得ることができた」

ハクは人型の統一名称がオーツであること、その総数が34であること、自身が鱗の力により新しく能力が追加されたことを話す

ミカツチ

「ふん、なかなか順調ではあるな。しかしあの脅威でもまだ実力的には下の方だと言うのは少々今のままでは危険かもしれぬ。」

ミカツチが現状の戦力を危惧していたが

ハク

「うむ、だがそこは今気にしても仕方なからう。やつらが一斉に来なければ各個撃破を徹底する。次からは絶対に逃さん、だからこそ防衛陣を主に作戦を立てる。皆が連携できるとな」

アトウイ

「まあそれなら仕方ないなあ、つまらんとも思ったけどオーツと戦えるなら案外そつちのが楽しそうやしなあ」

アンジュ

「しかしハクよ、呼び出しはもうちよつと頻繁にはできんのか？タタリの数もまだまだ多いのじやろう？こう数日おきにだとタタリの全浄化にかなりの時間がかかる。最優先事項とは言え皆もいつまでもこの国におれるほど時間があるわけではない」

ハク

「ふむ、」

ハクがクオンとルルティエに目をやる。自分達の欲のたまに今回の招集は遅れた。それを理解している2人、次からはないようにアトウイ、ノスリにも注意しとくようハクから言われたそうだ

ハク

「、ふう、いやなに今回はキステラによりいつもより時間をとられたゆえな。次からはもう少し早く招集できよう。この面子であればそう長くなりはないと読んでいる、現状そちらの世界の仕事がなかなかできないのもすまないと思っっている。だがどうしても某1人では解決できなくてな、すまぬがあと少しの間、力を貸してくれぬか？」

ハクが頭を下げてお願いする

アンジユ

「い、いや！頭を上げよハク、意地悪を言ったつもりではない、余はもちろん皆もタタリの浄化が最優先なのは変わりないのじゃ！だからこそ元の仕事についてもしばらく他の者に任せておるのじゃ、だがいつかどうしても余を必要とする仕事があるゆえな、」

ハク

「ああ、その時はそちらの仕事を優先してくれて構わない。皆も同様だ、そちらの世界の平和を守るのもまた大事な事だからな」

クオン

「まあ私はこの件を解決するために来てるからその点では大丈夫かな」

ルルティエ

「私も事情を家族に伝えてきてるので大丈夫です」

ネコネ

「エンナカムイでの仕事は比較的暇なのです、キウルに頼んでいつ戻るかわからない任務に出ている事になってるので心配いらないますよ兄様」

キウル

「あはは、暇とは言えネコネさんに抜けられると皆さん落ち込んでましたけど。兄上、自

分もいつでも協力したいところですが、皇ゆえ、たまに抜ける事があるかもしれない、」

ハク

「ありがとなキウル、エンナカムイは自分の故郷だと思っている。だからそんなに申し訳なさそうにするな、な？」

キウル

「は、はい！」

ハク

「クオン、フミイルイル殿、ルルテイエ、ネコネは大丈夫と言う感じだな、他の皆はそれなりに立場があるだろう、最後の戦いともなると全員に来てもらうことになるが、それまでは来れない者は強制はしない。そちらの仕事も大事ゆえどちらを優先するかはよく考えて決めてくれ」

皆ずつと協力したいと言う気持ちがあるのはハクも理解していた、だが自分の帰る世界でもある。それを考えると強制などできるものではなかった

???

「ふむ、ならばそちらの仕事は我らが請け負うか」

ハク

「何奴?!」

いきなり声が聞こえた、皆視線を声の主に向ける

クオン

「お！お父様?!」

そこにはハクオロの姿があつた

ハク

「、なるほど、貴方であれば自分の力無しでもこれるか、先代」

ハクオロ

「ふ、驚かせてすまないな。なんとか自分用の勾玉を用意できたのでな、さて」

ハクオロはアンジュの元に向かう

ハクオロ

「ヤマトの聖上、お久しぶりでございます」

アンジュ

「同盟国ゆえ堅苦しい態度も必要ないぞ、2年ぶりかの」

ハクオロ

「それではそのように。視察に来られた時以来であるな」

アンジュ

「うむ、それで？其方が請け負うとはどういうことじゃ？」

ハクオロ

「此度の件、こちらのタタリ浄化に専念したいと思つてな。ヤマトの仕事を全部我らトウスクルの者で請け負うと言うのはどうかと」

アンジュ

「いくら同盟国と言えど難しいであろう。余ら其方らを信じておるが民にとっては面白くないかもしれん、最悪同盟関係を継続できんかもしれぬぞ」

ハクオロ

「無論トウスクルの者がヤマトの政務や会議などしたら民に不信感を買おう、あくまで影武者を使うだけだ。こちらにはそれを可能とする術がある、いかがか？」

ここでハクが割り込む

ハク

「先代よ、あくまで仕事を請け負うだけなのだな？」

ハクオロ

「ハクよ、これは私の罪滅ぼしだ。其方にすべてを押し付け私だけが幸せになる、さらには娘の幸せすら奪つて、な。そんな無責任な親になるつもりはない、だめか？」

アンジュ

「ふむ、本気みたいじゃな。ムネチカ」

アンジュがムネチカに確認をとる

ムネチカ

「本来であれば言語道断、一考にすら値しませぬが。今回に限っては受けても良いかと」

アンジュ

「うむ、ではハクオロよ。お願いできるか？」

ハクオロ

「うむ、任せよう。其方らが帰って来るたびに報告は必ずさせる。安心されよ」

クオン

「お父様、、ありがとうございます、何から何まで、」

ハクオロ

「言つたらう罪滅ぼしだと、早く終わらせて戻ってくるといい、皆も待っている」

クオン

「うん、お母様達によろしくかな」

ハクオロ

「うむ、それでは失礼するよ。」

そう言い残すとハクオロは元の世界に戻って行った

ハク

「ほんと食えない御仁だ。まさか自分の許可なくここに来れるとはな」

アンジユ

「じゃがこれで心配事はなくなった、心おきなく浄化任務に専念できるのう！」  
皆浄化に専念できると分かると一斉に気合が入るのだった



## タタリ戦

ハク

「すまないな、皆。解決したとは言えこちらの都合でそちらの仕事を犠牲にしてしま

い、」

一同

「……、はあ」

ハク

「な、なんだ？」

アンジユ

「言つたはずじゃハク、タタリの浄化は最優先事項じゃと。今まで其方だけでやってきた事自体おかしな話だったのじゃ。クオンも言っていたであろう、最初から呼んでおけと」

ハク

「……、そうだな、皆、頼むぞ」

一同

「おおー!!」

ハク

「皆、準備はいいな。出陣るぞ!!」

ハクの力でタタリの群れが居る所に転移する

クオン

「なかなか大きい個体がちらほらいる感じかな。ハク、どうする?」

ハク

「先も言ったが防衛陣を敷く、ムネチカ、ウルウル、サラアナ、頼む」

ムネチカ

「承知!!」

ウルウル、サラアナ

「守る、ムネチカ様の壁を強化します。滅多な事では破られないかと」

ハク

「うむ、ミカツチ、アトウイ、クオン、ヤクトワルト、お前達は前衛だが壁からあまり離れるなよ、オウギは戦況を見つつ4人が壁から離れないようにしてくれ、倒せる個体があれば撃破だ」

そう言うとお前衛4人は壁に近づくとタタリを殲滅しに行った

ハク

「アン、ネコネはオーツに備え待機、ルルティエはムネチカ、ウルウル、サラアナの様子を見つつ、限界が来たら教えてくれ」

ネコネ

「兄様はどうするですか？」

ハク

「キステルからもらった鱗の力を試す、少し離れることになる。アン、ネコネ、この場を頼む」

アンジユ

「うむ、任せるがよい！」

そうしてハクは鱗の力を使いタタリの群れの中心に向かった

ハク

（想像していたより気配を消せるみたいだな、全然気付かれないが、どれ）  
ハクは気配を消したままタタりに近づく

攻撃時はさすがに消せるものではないようなのでハクは能力を解除すると同時にタタリを切り捨てていく

ハク

「……ふむ」

ハクはその力を把握した所で再び気配を消し皆の所へ戻る

ハク

「今戻った、皆無事か？」

ネコネ

「あつ、おかえりなさいです兄様。前回の反省を活かしているのか皆さん順調そうなのです」

見たところ問題はなさそうだ、そこにミカツチが前衛から戻ってきた

ハク

「もう出る幕はないと言う顔だな」

ミカツチ

「今の敵ならばな、オーツの事も考えるならあまり無茶もできまい。」

ハク

「そうだな、しかし、今回は来ないかもしれないな。バムナーの口ぶりからすると奴ら3人とは次が最後であろう。」

ネコネ

「では兄様、ミカツチ様の代わりに少し前衛に行ってもいいですか？ 獣型とはまだ戦つ

ていないので経験しておきたいのです」

アンジュ

「余も経験しておきたい、よいか？」

少し考えるハク

ハク

「いいだろう、だが余力は残しておけ。大丈夫だとは思うがオーツが来る可能性が無く  
なつたわけではないからな」

2人は領くと前衛の3人と合流しに行った

ハク

「ミカヅチ、お主、限界であろう？」

ミカヅチと2人だけになつたので皆に聞かれないよう話す

ミカヅチ

「、、、いつ気づいた？」

ハク

「前回の戦いの時にな、仮面の力は装着しているだけでそれなりに力を使う、できるだけ  
仮面から得られる力を使わないように戦っているように見えた」

ミカヅチ

「なるほど、貴様もオシユトルの仮面を付けていたゆえ気付いたか」

ハク

「ミカツチよ、仮面を外せ。どうしても必要な時だけ装着するようにしろ。お主の力ならそれでも充分戦力になる」

ミカツチ

「ふん、そのような事、」

ハク

「お主の力は必要だ、仮面の力うんぬんではない。ネコネのためにも言っている」

ミカツチ

「分かっている、だがこの力は先の帝より与えられたのだ。我が誇りでもある、」

ハクは以前兄より聞いた仮面の話をミカツチに話す  
ミカツチ

「、、、、、そうであったか、」

ハク

「お主にとって誇りなのもわかる。だが兄貴のためにも外してはくれんか。頼む、」

ミカツチ

「、、、、あのお方の呪縛でもあったのだな、、、わかった、、、装着は控えよう」

そうしてミカツチは仮面を外した

そしてしばらくしてそこにいたタタリは全浄化された

オーツの気配もなく、一同は結界内へと戻る

フミルイル

「皆様、どうもお疲れ様です♪お茶をどうぞ♪」

フミルイルの淹れたお茶を啜り皆にミカツチの現状を話す

ネコネ

「ミカツチ様、なぜ黙ってたのですか？」

ネコネが今にもキレそうである

ミカツチ

「、、、、すまぬ」

珍しく素直に謝るミカツチ、それを聞くとネコネから怒気のようなものが消えていく

ネコネ

「まあ、今後仮面の力を使わないならいいですよ」

ムネチカ

「ふふ、ミカツチ殿もこうなっては折れるしかあるまい。」

ハク

「ああ、さて皆ご苦労だったな。今回はオーツの襲撃はなかったが大変だった事に変わりはないだろう。各々次戦まで英気をやしなっておいてくれ」

アトウイ

「じゃあ今回はウチとノスリはんが残らせてもらうな」

クオン

「アトウイ、ノスリ、くれぐれもお願いね」

ノスリ

「うむ、ま、任せておけ！」

ハク

「ふう、今回は大丈夫だといいが、」

そして、アトウイ、ノスリを残し皆は元の世界に帰っていった

ハク

「さて2人とも、ここに以上仕事があるのは聞いているな？」

アトウイ

「結界内の巡回やったなあ？それぐらいなら問題あれへんよ、なあノスリはん？」

ノスリ

「あ、ああそうだな。特に問題はないぞ」



ハク

「うむ、ならばさっそく頼む。自分もやることがあるのでな。しばらくしたらこの中央に戻ってきてくれ。」

そうして3人は仕事に取り掛かる

アトウイ

「ふーん、あまりよく見てなかったけどやっぱり広いなあ。ん？ノスリはんどないしたん？」

ノスリ

「、、、うう、だめだ、！緊張するっ、！」

アトウイ

「なんやもう夜の事考えてるんけ？気が早いえ、やらしいなあ」

ノスリ

「ち！違うぞ!!け、決してそのような！」

アトウイ

「まっ、楽しみではあるしなあ。ウチも考え出したらもう、いやー！待ち遠しくなってきたえ〜！」

巡回できてるか謎だがしばらくして中央に戻る2人

ハク

「戻ったか、異常はなかったか？」

アトウイ

「まあ問題なかったなあ」

ハク

（まあ、初日は仕方ないか、）

ハクは自室に戻ればどうなるかわかっていたが逃げれるわけではないので諦めていた。

ハク

「うむ、しばらくは巡回だけでつまらぬだろうが頼むぞ。自分はまだやることがあるので自室に戻る、お前達の部屋はあっちだ、ではな」

なるべくそれぞれ部屋をわけたが、もちろんその行為は無駄に終わった

## 異界の仕事（アトウイ、ノスリ）

ハクの危惧していた通りアトウイとノスリの乱れっぷりはすごかったらしく翌日注意せざるを得なかった

ハク

「初日ゆえあまりキツク言うつもりもないが、自分は逃げん。だからあまり焦るな。」

ハクは2人になんとか落ち着いてもらおうと説得を試みる

アトウイ

「ええ、でもおにーさんからあんなにされたら、なあ？もうウチらも我慢できなくなるし」

ハク

「そこまでしてる気はなかったのだが、そんなにだったのか？」

ノスリ

「ま、まあ、長い事付き合わせてすまないとも思ったが、確かにすごかった、ぞ？」  
まさか自分にも責任があったとは、そう思ったハクは今後抑えなければと猛省していた

アトウイ

「そんな顔せんでもなあ、気持ち良かったからそれでええと思うえ。もし時間を気にするのなら一回一回をちゃんと楽しむのはどうえ？回数がすべてでもないしなあ」

「なんかすごい事を言ってると思ったハクだがその提案は時短にも繋がるので悪くないと判断した」

ハク

「まあ、確かにそれならお前達も休める時間を作れるか。いいだろう、だが必ず守ってもらうぞ。昨日みたいに「もう一回やえ〜」は無しだからな」

アトウイ

「まあ仕方ないなあ。クオンはんにも言われてるし」

「だったら昨日の時点で守ってほしいもんだ、そう思わざるを得ないハクであったハク」

「ノスリもそれでよいな？」

ノスリに目をやる

ノスリ

「う、うむ！だ、だがその、」

ノスリがもじもじしている

ハク

「どうした？言いたい事はちゃんとやったほうが良いぞ？」

ノスリの顔が赤くなる

ノスリ

「回数は、少なくて、いいから、そ、その、」

中々口に出さないノスリ

アトウイ

「ノスリはん、ちゃんと伝える事が大事やえ。ほら」

アトウイに背中を押されハクの目の前に来るノスリ

ノスリ

「そ、そのだな、ちゃんと愛して、ほしいのだ、例え一回でも、その一回を、大事に、」

相変わらずこの手の話題に弱いノスリだがそれでもちゃんと言った彼女にたいして女を感じざるを得ないハク

ハクはノスリを抱きしめる

ノスリ

「~~~~っ!!」

ハク

「当然だ、安心しろ。よく言ってくれた、さすがノスリだな、すっかり良い女になってくれたようだ」

ハクの気持ちが伝わってくる気がしたノスリ、あまりの嬉しさに泣きだした

ノスリ

「あああ、ハク、私は、私は、」

ハク

「いいんだ、泣いても。これからはその気持ちを隠さずに伝えてくれると自分も嬉しい」

ノスリ

「うんっ、わかった、ハク、好きだ、お前が、大好きだ」

アトウイが羨ましそうに見ている

アトウイ

「おにーさん♪ウチも抱きしめてくなあ」

ハク

「わかっていると思うが今は抱きしめるだけだぞ？」

アトウイ

「んも〜いけずなんは相変わらずやなあ」

しばらく2人を抱きしめた後ハクはいつも通り勾玉に力を注ぐ、アトウイ、ノスリは巡回に回るのであった

勾玉へ力を注ぐはずだったハクだが、

ハク

「、、、やれやれ、来客の予定はなかったのだがな。何用かな？」

そこには先代ハクオロの姿があつた

ハクオロ

「ふふ、何から何までそっくりだな。親としては複雑だがその親に説得力がないのである。娘の提案だろうから尚更だが」

ハク

「まったくだ、自分もここまで節操の無い男だったとはな、恥じるばかりだ」

ハクオロ

「まだ増えるかもしれんな、其方の魅力は私以上と見た。まあその話はまた互いに酒が飲める席でも出来たときにするでしょう。少し情報がほしくてな、其方が掴んだ情報、話してはくれんか？」

ハク

「その時は愚痴に付き合ってもらうぞ、それでやつらについてだが、」

ハクはオーツについて話した

ハクオロ

「オーツ、か。予想していた以上にやっかいだな、」

ハク

「アンタも存在自体は掴んでいただろう、自らはあまり動かなかつたようだが」

ハクオロ

「親の手伝いでも捉えてくれると助かるがな。」

ハク

「言ってる、とりあえず役目である以上ははっきりやる。あまり心配はするな」

ハクオロ

「情報感謝する、こちらでも何か掴めたらまた来る。では戻ることにする」

そう言うのとハクオロは帰って行った

ハク

「まったく、暇なのかと思つたぞ。さて、始めるか」

ハクは勾玉に力を注ぎ始めた

変わって巡回中のアトウイとノスリ

アトウイ



「しかしノスリはんよう言えたなく、これは今晚ノスリはん時は激しそうやえ♪」  
ノスリ

「ハ、ハクが求めてくるなら、全力で応えてあげたいだけだ！」  
そこでアトウイが何かを思い出した

アトウイ

「そう言えばノスリはん、見てたえ〜。やっぱり生娘やったね〜」

ノスリ

「なっ、！そ、それはだなーい、今まで良い男がいなかったからであつてだな！そ、それなりに言い寄られていたのだぞ！」

精一杯の言い訳だった

アトウイ

「ふくん、じゃ、巡回続けるえ〜」

ノスリ

「ま、待て！信じてないな!？」

アトウイ

「あ、昨日はノスリはんされるがままやったけど今日はちゃんと、ごにょごにょ」

ノスリ

「ぐっ、わ、わかった、ハクのためだからな」

アトウイ

「うんうん、おにーさんもきつと喜ぶと思うんよ。頑張つてなあ」

そうしてまた巡回したかどうか謎な状態ではあるが3人は中央にある屋敷に合流する

ハク

「明日には勾玉の力を満タンにできよう。明後日にまた招集をかける。よって明日はゆっくりしといてくれ。自分も終わり次第休むつもりだ。」

アトウイ

「休むのは構わんけど、ちゃんとウチらの相手すんのも忘れんといてなあ」

ハク

「約束さえ守ってくれば自分に異論はない。自分も男だ、お前達とすることが嫌なわけないだろう」

まさか面と向かって言われると思わなかったのかアトウイまで少し照れていた

ハク

「気の多い自分ではあるがちゃんとお前達を見てるつもりだ、最初はクオンだけだったのは認めよう。しかしそれでもお前達は自分を選んでくれた。ありがとう2人とも、感

謝する」

アトウイ

「あはは、もうやることやったのに、何でやろ、恥ずかしいなあ」

ノスリ

「私もありがとうだハク、こっちの我儘だったのにそれでも受け入れてくれて」

アトウイ

「そうやなあ、ま、これからもよろしくな、おにーさん♪」

ハク

「ああ、こちらこそなあ」

そうして3人は寢室に向かった

さすがに今回は約束は守られた、アトウイ、ノスリも不満など微塵も感じなかったそう  
うだ

## 異界、休日

ハクはできるだけ早く勾玉を満タンにした後アトウイ、ノスリと共にある問題を解決するため意見を出し合う事にした

ハク

「しかしアトウイ、さすがにネコネまで引き入れるのは兄としてだな。オシユトルにも申し訳ないのだが」

アトウイ

「えくく、でも血繋がった兄妹ちやうえく？ネコやんもきつとおにーさんから言われたら反対もせんと思うし」

ハク

「母上も納得できんと思うぞ？自分も妹として接してきたからな、可愛い妹であるがゆえ自分が汚してしまうと考えたら罪悪感が凄まじいぞ、」

アトウイ

「その可愛い妹が何処ぞのわけわからん男に汚されることもあるんえ？」

ハク

「そうだったらその男に相応以上の罰が必要だな、本来なら殺してやりたいところだが」  
すっかりシスコンになってしまったハク。だがアトウイはそこに付け入る隙があると見ていた

ノスリ

「しかしハク以上の魅力ある男性か、人それぞれではあるがなかなか難しいと思うぞそれは、しかもネコネ基準で語るのだろうか？確かに無理だな、」

アトウイ

「なあ？ノスリはんもそう思うえ？おにーさん、ネコやんの母様もネコやんが独身のまま生涯を終えるなんて望んでないはずやえ。どう考えてもおにーさんが適任やと思うんやけどなあ、」

確かに、ネコネが生涯独身なんてことになればオシウトルに合わす顔もない、母上とネコネを頼まれたからにはネコネにちゃんと結婚してもらおう必要もあるだろう。

だがその相手が自分？血の繋がりが無いとは言え兄妹だ、簡単に納得できるものでもない、

アトウイ

「ネコやん多分やけど怖いんと違うんかなあ、兄妹としておにーさんと接してきて、それが壊れてしまうんやないかって。でもそれやと前に進めへんと思うんよ。なあおにー

さん、別にネコやんに魅力がないとか思ってるわけ違うんやろ？この数年であんなに美人さんになってるんよ？」

ハク

「む、確かに美人になった、が、」

そう、ネコネはほんとに綺麗になった、まだまだ成長期であるのに胸も人並みになっている。エンナカムイでもよく恋文をもらうとキウルが愚痴っていたほど

アトウイ

「ネコやんもいつまでも子供やないんやし、このままじゃ悪い虫がつかんとも限らんえ。だから、な、おにーさんなら全部解決できると思うんやけどな〜」

ハク

「、、、クオン、ルルテイエにも相談せねばなるまい。今自分の気持ちとしては兄妹の感覚が抜けん。だが血の繋がりが無いのもまた事実。そしてネコネの生涯独身も捨て置けん、正直よくわからんのだ」

アトウイ

「まあやつぱりいきなり言われてもって感じなんかなあ、ノスリはんはネコやんがウチらと一緒にするのはどう思うん？」

ノスリ

「兄妹どうこうは私にはわからない、だがクオンの提案は皆家族になることだ。それが楽しい事はわかる。増えすぎるのはあまり好ましくはないが、まだ後何人かは増えても問題は無いと思う」

「どうやら4人同時に嫁にするという行為は感覚を麻痺させる、ハクはそれを痛感していた、」

ハク

「お前達程の美人を妻にできているだけで自分はもう十分満足なんだがな、新たに妻を迎えたいとか別に思っていないんだぞ？」

アトウイ

「それはそれで嬉しいんやけどなあ、やつぱりおにーさんを好きな人がいると迎え入れてあげたいって思うんよ。」

ノスリ

「確かにな、それこそシス殿もハクに惚れているからな、あと数人は迎え入れたいところだ」

ハク

「シス殿もだと、光栄ではあるが仮にネコネ、シス殿も入れると6人だぞ？さすがに多くないか？」

アトウイ

「二桁行かないなら大丈夫え♪」

どういう基準だ、

ハク

「ふう、とりあえずクオン、ルルティエも交えて、場合によってはネコネ本人も交えて話をしよう。その場はまた別に設ける。それでよいな？」

アトウイ

「ま、そうやなあ。でもいつ設ける気なん？ オーツ浄化のためにあまり勾玉の力を別に使うのは避けたいんちゃう？」

ハク

「ああ、次の浄化作戦、まあ明日だな。それが終わり次第お前達4人とネコネを残し、残り時間を使って話をしよう。」

ノスリ

「まあいつまでもこの話題をしても進展はなさそうだしな。私はそろそろ戻る、2人ともまた今夜な」

ノスリが自室に戻る

アトウイ



「ノスリはんもちよつとは慣れてきたみたいやなあ、なあなあおにーさん、昨日のノスリはんのアレ、どうやった？あの大きさやからなあ、羨ましいなあ。」

ハク

「まあ、あの大ききでされるとな、ルルテイエの時もそうだったが、凄まじいの一言に尽きる」

アトウイ

「ルルやんもすごい大きくなつてたもんなあ。ウチもそれなりにあるつもりなんやけど」

自分の胸を揉みだすアトウイ

ハク

「あまり人前でやるもんじゃないぞ、特に異性の前ではな」

アトウイ

「いややなあ、おにーさんの前でしかやらんよこんなこと、しかもおにーさんなんだかんだで見てるし〜？もう、スケベやなあ」

ハク

「まあなんだ、あまり候補を増やしてくれるなよ。自分は一人しかいないのだから」

アトウイ

「もちろんやえ、構ってくれる回数が劇的に減るのはさすがに堪忍してほしいなあ」  
まあその認識があるならそこまで酷くはならないだろう  
ハクはそう思うと安堵の表情を浮かべた

## タタリ戦後

3度目となるタタリ浄化作戦、さすがに慣れてきたのか、もしくはこの3回でまた強くなったのか、とりあえずいつも以上に順調に浄化作戦を終えることができた

特に活躍しているのはネコネであった

まだまだ伸びしろはあったの言うまでもないが武の道に関しては実戦経験があまりにも少なかつた、それをオーツの一戦、そしてタタリの浄化作戦を二戦と経験していく中で加速度的に成長していった

クオン

「そろそろ私でも危ないかな、」

クオンはその成長ぶりに危機感を覚えながらも自信がまだまだ未熟であることに気付かされ鍛錬に励むことを決意する

ハク

「皆、苦勞だつたな、もはやあの程度では問題はなくなつてきたと見える。近々バムナー達3人のオーツとの決戦になるだろう。皆油断せずに頼むぞ」

ハクですら初となるオーツ浄化作戦、その刻はそう遠くはない。皆もまた気を引き締

めていた

ハク

「自分も未だにヤツらを浄化した事はない、1人倒したとして現実世界にどこまで影響を与えるかもわからない。だが1人だけでもかなりの規模で浄化されるのではと踏んでいる。」

そう、本来現実世界にはとてつもない数のタタリが徘徊しているが、こっちのタタリは現実世界ほど多くはない。つまり強い個体は現実世界においてそれなりの数のタタリと連動している。それをハクは今回の作戦で確信していた

つまりオーツほどの個体であればそれはもうかなりの数のタタリと連動している、当初は異界のタタリ一体に現実世界のタタリ一体が連動していると思っていたハク。

だが現実世界の浄化具合をこの3戦の間調べた結果ハクは気付いた、自分は勘違いをしていた。現実世界のタタリは個体差による強弱はほとんどなく、デカイ個体を倒した瞬間に現実世界で7ヶ所のタタリが同時に浄化されていた

これを感じたハクは異界でのタタリによる個体差が大きい理由に気付き、オーツはおそらく倒せば数百という浄化が成されると結論付けた

ハク

「結果としてやる事は変わらんがな、だがオーツを倒しきればおそらくこちらに現れる

タタリは激減するはずだ」

ここでハクは前回オーツがキステラをペット呼ばわりする理由がわかった

ハク

「ヤツらは元の人格をそのままに獣型を吸収できるのだろう、そうして吸収を繰り返しながら力をつけたがゆえにウィツアルネミアでも手がつけられなくなったと推測できるな。そうでなければあの大神がヤツらを放置などすまい」

クオン

「だんだん読めてきたね、でもそうなるとオーツの大将が気になるかな。その強さはもちろん、何を目的としているかが不明すぎるから」

ハク

「うむ、確かにな。今のところバムナーとアイツと一緒にいた2人、クオンは一度そのうちの1人と会っているな。そいつらしか自分は面識がないからな、目的は不明のままだ」

クオン

「その2人は名前わからないんだっけ？」

ハク

「ああ、バムナーしか名乗らなかつたのでな。」

アンジュ

「ま、仕方ないの。じゃがこちらの目的は変わらんとは言えタタリの数がこちらではだいぶ限られていると分かっただけ前進じゃの」

そう、ハクはそこが気になっていた。自らの力を削ってまで獣型を量産しているのは何故だ？野良で徘徊している獣型なら分かる、だがクオン達と共にここ3回で戦ったあれは野良ではなかった。そう、野良とオーツが放った獣型には大きな違いがある。単純に紋章があるのだ、それは未だハクしか知らない、なぜなら野良はこの3年であらかた片付いていたからだ。ハクは意外と少ないのかと安堵していた時にオーツと遭遇し、大怪我を負った。

それならば今や新しい獣型をオーツが自らの力を削り作ることはあまりにも不可解、単純にその圧倒的な戦力をこちらにぶつけた方が良いはず、

ハク

「何か、理由があるのは間違いないか、だが、」

今は気にしても仕方ない、ハクは切り替えて皆を帰すことにした

もちろんネコネの件があるためクオン、ルルテイエ、アトウイ、ノスリ、ネコネを残してだが

ハク

(考えることは山ほどあるが、今はこちらの問題に専念するか)

ネコネ

「なんなのですか？この面子に自分がいることに違和感があるのですが」

ハク

「本来ならこうなる予定はなかったんだがな、アトウイ、説明を」

アトウイはネコネを自分達の一員に加えることを提案する

クオン

「ネ、ネコネを!?さすがにそれはどうなのかな??」

ルルティエ

「そ、そうですね、御兄妹でもありますし」

無論当然そういう反応だろう

アトウイはネコネの恋愛に対する関心の無さや、仮に恋愛するにしてもその壁が高すぎることに、ハクとはなんだかんだで血の繋がりが無いこと、そして一生独身という可能性を考えると解決方がハクの妻になることが一番望ましい事を力説する

クオン

「ネコネ、さすがにハク以上の魅力って言うのは難しいんじゃないかな？恋愛しませ

ん、してもハクだけって公言してるようなものかな」

ネコネ

「で、ですが、私は兄様の、、」

ハク

（まっ、やはり抵抗あるわな、）

アトウイ

「ネコヤん、自分でもわかってるんちゃう？ 兄妹の関係が壊れるのが怖いだけやって。そうやって気持ちに蓋してるんちゃうん？」

ネコネ

「そ、、それは、、」

ノスリ

「兄妹として接していたい気持ちもあるが、女としても見てほしい。そんなところだろうな、だがそうやって我慢しているのは良くないぞネコネ。なんでもそんなに頑張る必要はないんだ、ハクならばどんなネコネでも受け入れてくれるさ」

クオン

「ちよつと驚いたけど、確かに生涯独身は捨て置けないかな。それなら私達と一緒にいるほうが良いよね」



ネコネ

「あ、姉様まで、」

ハク

「ネコネよ、こういう解決法しなくてすまないな。だが兄としてお前には女としての幸せも知ってもらいたいのだ。その相手が自分というのは困るかもしれん、他に相手ができる可能性もある、恋愛に前向きになつてくれるのであれば答えは今でなくとも、」

ネコネ

「兄様、私は、、、兄様が兄様であるならそれ以上は望んではいけない。そう思つてたですよ、でもほんとに、それが許されるなら、、、私は、そうありたい、兄様であり、夫でもある、そんな、身に余る幸せを、ほんとに、いいのですか？」

ハク

「ネコネ、そこまでだったのか、すまないな、気づいてやれなんだ」

ネコネ

「あ、兄様は鈍感ですからね。気付かなくて当然なのです。」

ハク

「母上にちゃんと説明せねばならんな、妹を嫁になど、何を言われることやら」

ネコネ

「あつ、その点は大丈夫だと思つてですよ。母様も兄様と私が間違いが仮に起こつたとしても、むしろ起こつてほしいとか言つてたですから」

ハク

「母よ、、親としてどうなのだそれは、」

ともあれネコネもハクの妻として迎え入れられた

誰が残るか話し合つた結果クオン、ネコネに決まつた

残りの3人は名残惜しそうにはしてたが仕方ない事と諦めていた

## 異界（クオン、ネコネ）

ハク

（やってしまったか、；）

妹を抱いてしまった罪悪感がハクを襲う

だがクオン、ネコネは平然と、むしろ幸せそうにしていた

ハク

（まあ、幸せそうなのは何よりなのだが、この引き返せないこの感じ、腹をくくるしかないと言うことか）

2人がハクに気づき小走りでハクの元に駆け寄る

ネコネ

「おはようございます、兄様」

クオン

「おはようハク」

ハク

「ああ、おはよう2人共。ネコネは初めてだろうがここにもやる事があってな、言っても

見回りなのだが」

ネコネ

「聞いているですよ、前はノスリさんとアトウイさんだったので少々見落としがある可能性があるので入念に調べるつもりです」

ハク

（間違っているではないが、信用ないなああの二人は、）

クオン

「ハク、その後なのだけど、ネコネと共に特訓できないかなと思ってるのだけど、どうかな？」

クオンは今のままではオーツに対して力になれないと思っていた。

ハク

「、、そんなに気負うことはないのだぞ？クオンの強さは皆も認めるところだ。連携をしつかりすれば今のままでも十分戦力になると思うが」

クオン

「あはは、ネコネに追いつかれて焦っているのはあるかもしれないかな、でもねハク、それだけじゃないの。私、まだ先があるかなって思ってるの。今ね、すごく幸せで、でもその幸せはまだ未来があまりにも不確かで、不安でもある。そう考えた時に、強くな

りたいてって思った。それで昨日の浄化戦の時にちよつと可能性が見えてきた、それを  
忘れないうちにネコネに特訓に付き合ってもらおうかなって」

ハク

「、前向きな理由であるなら特に反対する気はないな。わかった、後で例の場所に行く  
としよう。だがこの結界内での治療効果を上回る怪我でもされたら一大事だ。無理は  
するなよ」

ネコネ

「大丈夫ですよ兄様、前は実戦並みの戦いでしたが特訓でそこまで無理はしなくて  
よ」

クオン

「うん、そこは安心してほしいかな」

ハク

「了解だ、では後ほどここに集合でよいな」

そして3人は各々仕事に向かう

ハクオロ

「ふむ、さすが我が娘だ、向上心も忘れていない」

ハク

「うおっ?!?!いつの間にも!!お前は暇なのか!?!」

ハクオロ

「おいおい、父親になんと言う口の利き方だ」

ハク

「やかましい!突然現れて全部見ているようなやつを父親と呼べるか」

ハクオロ

「ふむ、まあ反抗的な息子と思えばそれも悪くない」

ハク

「…、はあ。で、何用だ?またオーツについて聞きたいわけでもなさそうだが」

ハクオロ

「なに、少し手助けをな。勾玉も10数個ともなれば大変であろう?」

ハク

「…、先代よ。まさかとは思いますが、政務から抜け出してきてないか?」

ハクオロ

「ふ、たまには息子のために手伝いと思っただけよ、それは時に政務より大切なこと、」

ハク

「我が名において異邦者であるこの者があるべき世界へ戻らせたまえ」

ハクオロ

「ま、待てハクよ!!今戻ればベナウイにつ!!」

シユン!!

ハク

「まったく、働くことの大切さを思い知れと言っただろうに」

そしていつも通り勾玉に集中するハクであった

クオン

「ん?、、、気のせいかな」

クオンはハクのいるところに別の気配を感じたが気付けばハクの気配しかないので  
気にしない事にした

クオン

「昨日のあの感覚、何度かあったけど昨日ほど明確に感じた事はなかったかな、きつと  
いける、今の強さより先へ」

クオンはタタリを浄化させている内にウィツアルネミアに頼り切っていた強さで  
はなく自身だけの強さにさらなる先がある事に確信を抱いていた。

ネコネ

「あ、姉様、見回りご苦労様、で、」

ネコネはクオンが放つ空気を感じとる、何故かその場からクオンに近づくことは危険と感じたのか。もしくは本能的に邪魔をしてはいけないと判断したのか、だがクオンはネコネに気付くといつも優しいクオンに戻っていた

クオン

「ネコネ、あはは、ごめんね。ちよつと近寄り難かったかな」

ネコネ

「い、いえ、こちらこそ邪魔をしてしまったみたいで。ごめんなさいです」

ネコネは先程のクオンを見て思ったことを聞いてみた

ネコネ

「姉様は、やっぱりすごいです。まだまだ強くなるですね」

クオン

「ネコネの姉だから、妹には負けてられないかな。と言つてもどうなるかはわからないのだけど。それでも、少しでもハクの手助けに拍車をかけられるなら、私は強くなりたい」

ネコネ

「姉様、、差し出がましいようですが、あまり気負われると」



クオン

「大丈夫だよネコネ、ちゃんと周りも見えているつもり。あの力は絶対使わないから」

ネコネ

「は、はいです！」

そして3人は仕事を終え集まることとなる

ハク

「さて二人共、お疲れ。つまらない仕事かもしれないが今後も頼む、そして早速だが、準備は良いのか？」

クオン

「うん、いつでもいけるかな」

ネコネ

「私もいつでも大丈夫なのです」

二人共気合も十分のようだ、怪我をしなければ良いのだが、そう思うハクであったが、心配していても仕方ないので二人を信じて前回二人が戦った場所へ転移した

## 特訓（クオン、ネコネ）

クオン

「さあつて!!準備万端かな!」

ネコネ

「ハイです、私もいつでもいけます」

二人を特訓のため結界外へと移動してきたのだが

ハク

「何度も言うが無理はするなよ。」

ハクは未だに心配していた、二人は呆れながらも大丈夫だと言い張り笑顔を見せる

ハク

「ふう、わかった、一応そこに座っておく、危険だと思ったら止めるからな」

ハクはその場から離れ二人の特訓を見守る

クオン

「さてネコネ、用意はいいかな?」

ネコネ

「いつでもいいのですよ姉様」

クオンは浄化戦の時にウィツアルネミテアの力を使わずに自らの限界を見極めようとしていた

しかしいつになっても限界が訪れなかった

クオンはその先を見るためにネコネを特訓相手に選んだ、彼女ならばきつと先を見せてくれると思ったから

ハク

「……これは」

クオンの動きに何やら違和感を感じるハク

いつものような直線的な動きではない、あの直線的な動きは超速で動くクオンにとってその重要度はかなり高い

それなのに今のクオンの動きはまるで流れる川のように掴み所がない、

ネコネ

「……」

ネコネはクオンの動きに少々驚いたがすぐにその動きを捉えんがためにひたすら観察を続けた

クオン

「ネコネ、来ないのかな？それならそろそろ、こちらからいくよ」

クオンがネコネに向かっていく、決して早くはない、だがあまりにも掴み所がない。

ネコネ

「、、、そこっ！」

だがさすがネコネと言うべきか観察してきた内容を瞬時に頭の中で整理しクオンの動きを見極めた、はずだったが

クオン

「やっぱり、、、そこだと思ったよね。でも残念、、、狙い通りかな」

ネコネ

「、、、なっ!?!」

ネコネの右脇腹に掌底を放つクオン

ネコネ

「、、、ぐっ!」

ネコネが距離をとる

クオン

「うん、こんな感じかな」

ハク

「なるほど、な。速くはないとも思ったがあの動きと速さを最大限に活かすことで動きを読めなくしたのか。例えば分かっていたとしても見極めるのは難しい、な」

流線的な動きを見せつつ相手の懐に近づきそこから瞬時に直線的な動きに切り替える、それまでゆつくりな動きだった分いきなり最大速度にもなると動きを読めなくても無理はなかった

しかも動きの種類が違うのだ、それこそ逆の使い方もできる。相手を翻弄させるには十分だろう

ネコネ

「なるほど、つまり、ぶつぶつ」

ネコネが何やら独り言を呟いている、対策でも考えているのだろうか

ネコネ

「姉様、もう一度お願いしてもよいですか？」

クオン

「あはは、さすがネコネかな。もう対策されちゃったかな」

ネコネ

「フフン、もう騙されませんよ姉様」

クオンが再び動き始める、今度は直線的な動きも混ぜさらに動きが読み辛くなった

ネコネ

「、、、、」

ネコネはクオンの動きを見ているようでおそらくは見えていなかった  
時折耳がピクピク動く

ザツ!!

ネコネが音のした方に構えをとる、、が

クオン

「それもお見通しかな、そんなに甘くな、い、っ!？」

ネコネの目は明らかにクオンを捉えていた

ネコネ

「ええ、わかっていました。あそこからさらに姉様は裏をかくと」

ネコネの手に魔力が集まる

ネコネ

「やあああっ!!」

ネコネの一撃がクオンを穿つ

クオン

「、、、、っ!!」

ネコネがクオンに攻撃を加えたその次の瞬間

ハク

「そこまでだ、これ以上は勘弁してもらおうぞ」

クオン

「、、、つ、つ、わかったかな」

ネコネ

「ハイです、、、」

消化不良と言う感じだがこの二人の特訓はこれでも十分なくらいだとハクは判断したらしい

ハク

「そんな顔をするな、特訓なのだからほどほどにしておけ」

二人の機嫌をなおすため今日の飯担当はハクがやると提案した、が

クオン

「それは私がやるかな、その代わりに今日はこの後ちよつと言うこと聞いてもらうかな」  
、、、理不尽ではないか？自分に落ち度はないはずだが、、、そう思ったがどうやら聞き入れられそうになかった

ネコネ

「甘んじて受けるですよ兄様。持ちろん私の言うことも聞いてもらおうです」

何故だろう、自分の意見が通らないのは。

ハクは悲しさを覚えつつもその内容自体はおおよそ察しているため一概に不満があるわけでもなかった

そうして結界内に戻ってきた3人。やはりそれなりに神経をすり減らしたのか若干の疲れが見えるクオンとネコネ

ハク

「しばらくここで休んでおけ、茶でも持つてくる」

しばらくして茶を人数分持つてきたハク

ハク

「まだ熱いから気をつけろ」

そうして茶を啜りながら話し始める

ハク

「しかしクオンがあのような動きをするとはな、単純に見惚れてしまうほど綺麗な動きだった」

クオン



「き！綺麗!?ハ、ハクそんないきなり、」

ネコネ

「兄様、相変わらず天然のタラシの才能が発揮されまくっているです」

ハク

「ん？よくわからんが、まあとりあえずクオンのあの動きは戦術の幅がかなり広がったと言うことであろう。相変わらず頼れる存在であるな」

ネコネ

「確かにです、二回目はなんとか見抜けましたけど姉様が最新の注意と今日私が見破ったことを踏まえた時、あの動きはきつと私でももう見破れないかもです」

クオン

「本来油断していたとしても滅多に見破られないはずだったんだけどね、さすがネコネって感じだったかな」

「そうやって話が盛り上がった後は夕食を食べその日の夜伽が始まるのであった」

## 作戦前日

ハクはその日の仕事を終え少々考えこんでいた

ハク

「、どうにも腑に落ちんな、なぜオーツは結界に対して攻撃してこない？見回りの仕事をクオン達に任せたのは襲撃を想定していたからだだが、一向に攻めてくる気配がない」  
そう、いくら結界とは言え場所は割れている。それなりに強固に作ってはいるがオーツが複数で一点攻撃を仕掛けてくれば恐らく防げない

ハク

「自分達は取るに足りない存在だと思われる？だがバムナー達はそれなりに警戒していた、やつら程度の認識なら信用に足らないのか、いや、しかし」

ハクは考える、しかし可能性としてあげていくとキリがなかった

その様子を少し離れて見ていたクオンとネコネ

クオン

「なんか考え込んでるみたいかな。あの人はほんとそういう所治らないんだから」

ネコネ

「兄様の悪いところもありますが、カッコいいのです」

クオン

「そ、それは確かに、顔が真剣だからかな、」

そう話しているうちに、頭を掻きながらわからんと言わんばかりにこちらに向かつてくるハク

クオン

「ああいうオジサンくさいところも何と言うか、」

ネコネ

「わかるですよ姉様、古文書に書いてあったです。あれはぎやつぶと言うらしいです」

クオン

「ぎやつぶ?」

ネコネ

「ハイです、何でも普段見せないそぶりを見せたり意外な一面を見た時の表現らしいのです。女はそういう男性にトキメクとあったのです」

クオン

「なるほど、さすがオンヴィタイカヤンかな、そんな表現すらちやんとあるなんて」

2人はどうでもいいような知識を得ていた

ハク

「どうした2人とも、なんか目がキラキラしているが？」

ハクが2人の元に着くと2人は話を逸らしはじめた

クオン

「乙女の秘密かな、いくら夫でも言えない事もあるから。許してねハク」

ハク

「ふむ、まあいいか。なんでもかんでも話せとは言わんよ。では少し自室に戻る、何か用があるなら来るといい」

そう言つてハクは自室に戻る

クオン

「秘密と言われて問い詰めない寛容さ、、なんであんなに完璧なのかな、拾った時はあんなに頼りなかったのに」

ネコネ

「姉様、拾つたつて、でもまあ確かになのです。会つたばかりの兄様は頼りなかつたですから」

2人は昔の事を思い返していた

クオン

「どんな遅しくなっただけ、やっぱり仮面をつけてからかな。」

ネコネ

「そう、ですね。ほんとに悪い事をしたと思ってるです、」

ネコネはハクにオシユトルのなりすましをさせた事を思い出し顔が曇る

クオン

「ふふ、過ぎた事かなネコネ。まだ不確かかもしれない未来だけど私達はもうハクの妻だから、きつと明るい未来にしてみせるかな。だからハクがオシユトルの真似をしていたのは無駄じゃないよネコネ」

ネコネ

「は、ハイです。私もいつまでも兄様と呼んでいてはいけませんね。」

クオン

「うーん、それはいいんじゃないかな。ネコネは兄妹の関係も望んでるんだし」

ネコネ

「そ、それはそうなのですが、我儘ではないのかと、」

クオン

「ハクはそれをちゃんと受け入れたのだから大丈夫かなきつと」

そう聞くとネコネの顔は明るくなった

クオン

「ふふ、そうそう。ネコネは笑顔が一番なんだから」

そうしてしばらくの間女子の会話が続くのだった

ハクの自室にて

ハク

「報告通り、やはり結界に異常はなかった。つまりオーツは結界に攻撃を加える意思はない、理由がわからんのがぞつとしないな、」

だがその割には皆を初めて結界内に招いた日はオーツとキステルが攻めて来ていた、だからこそ見回りを頼んだのだが

ハク

「なぜあの最初の時だけ、理由があるはずだ、キステルがわざわざ連れて来られたくらいだ。考えろ、」

ハクは思考を巡らせる、

ハク

「キステルは獣型だった、だがオーツの弟だった存在だ、それを捨て駒のように使うか？ 倒される前提で送られて来たのは明白、；、そして何より鱗を残しヤツラの情報をこちらに流れた、こつちに有利でしかない。」

あまりにも不自然だ、キステルはおそらく何も知らなかっただろう、ハクはキステルの兄がこちらに何かしらの接触を試みていると仮定しだす

ハク

「仮に味方になったとしてもタタリである以上は浄化をしなければいけない、、どういうつもりだ」

少しづつ紐解いていく、

そこにクオンの声が聞こえた

クオン

「ハク、今大丈夫？」

ハク

「クオンか、入るといい」

クオンが入ってくる

ハク

「ネコネも一緒か、どうしたのだ2人して？」

クオン

「あのねハク、さっきこれを拾ったのだけど、」

ハク

「勾玉、？なぜだ？力を送っていた時は全部あちらにあるのを確認している、2人のもでもない、、、」

ハクはそこで気付く

ハク

「、、、またか、出てこい先代」

ハクオロが姿を現わす

クオン

「お、お父様!？」

ハク

「此度は何用だ？つまらん事ならまた強制的に帰すが？」

ハクオロ

「待て待て！今回はちゃんと理由がある！まったくあの時はベナウイに殺されるとこだったぞ」

ハク



「自業自得だ、労働の有り難みを味わえと言っただろう」

ハクオロ

「ぐつ、正論すぎるぞ、」

ハク

「まあいい、それで話とは？」

ハクオロ

「実は、各地で徘徊しているタタリが少し凶暴性を増しているらしい。こちらに異変があるのではと思ってな」

ハク

「、、こちらに異変は今のところない、が。そちらで異変があったのなら恐らくはバムナー達と連動しているタタリだろう。どうやらヤツラとの決戦は次とみた」

クオン

「いよいよよかな、」

ハク

「うむ、今日は2人共ちゃんと休めよ。先代、情報感謝する」

ハクオロ

「うむ、さすがにこれ以上ここではサボれんか」

ハクは無言で帰界の術を使う

ハクオロ

「しまっ!!」

シュン!!

ハク

「クオンよ、自分が言えた義理でもないが、どうにかならんのかあの男は？」

クオン

「あ、あははは、ごめんなさい」

そして3人は英気を養うために自室に戻った

## オーツ戦の前に、

ハク

「皆集まったな、今日はおそらくオーツとの戦いになる。皆気を引き締めてくれ」

ハクは皆に現実世界でのタタリの凶暴性が増した事、そしてそれはバムナー達が絡んでいる可能性があるため今回の浄化はオーツが出てくるであろう事を伝えた

キウル

「来ない可能性もあるでしょうが、いつもより警戒しないといけませんね。」

ハク

「うむ、だが自分の読みでは今回は来ると思っている。獣型を永遠に呼び出せるわけでもない以上はな、」

そして、ハクは気配をたどり獣型がある程度いる場所を特定する。

ハク

「ここか、まるで誘っているかのような数だな、多くて4体、か。ウルウル、サラアナ、他に感じるか？」

ウルウル、サラアナ

「いない、今のところはその4体だけのようです。ただその4体はかなり強い獣型ですが」

ハク

「ああ、わかっている。皆、獣型もかなりの強敵だ。だがおそらくその後にはオーツとの戦いが控えている。余力は必ず残しておいてくれ」

一同

「おおーっ!」

ハクは皆を連れ4体の獣型にいる場所へ転移する

そして転移した場所で皆は驚く

ハク

「いや、、でかすぎないか?」

その大きさは皆が以前戦ったウィツアルネミテアよりほんの少し小さいくらいだった

しかもそれが4体

ハク

「ある意味、壮観だな」

ハクですら見たことない大きさの獣型

本来なら一体一体倒していききたいところだが、控えにオーツがいる事を考えるとあまり時間はかけたくなかった

ハク

「4体同時に対応する、倒した後は近くの個体にあたっている連中を援護。最終的に残った個体の場所へ集合だ」

#### 第1編成

ハク、ウルウル、サラアナ

#### 第2編成

クオン、キウル、ヤクトワルト、ルルティエ

#### 第3編成

ミカヅチ、ネコネ、ノスリ、オウギ

#### 第4編成

アンジユ、ムネチカ、アトウイ

ハク

「皆、出陣るぞー！」

皆それぞれ巨大獣型に向かう

ウルウル、サラアナ

「主様、なるべく早く倒す。皆さまも負けはしないでしようが苦戦する可能性があるかと」

ハク

「わかつている、2人共、さっそくだが1回目を使う」

ウルウル、サラアナ

「!!」

双子の表情が一変する

ウルウル、サラアナ

「この編成の意味はあれを見せないため？いつかはバレることかと、それこそ今日にでも」

ハク

「、、、頼んだぞ」

ウルウル、サラアナ

「、、、御心のままに」

そして、ハクと双子は巨大獣型と対峙する。

ハク

「さて、あまり時間をかけてられんなのでな。ウルウル、サラアナ、やれ」

そう言うのと双子は少し躊躇ったが意を決してハクにある術をかける

端的に言うなら強化の術だが並の者が受けたら使用後よくて寝たきりになるほど危険なものであった

ハク

「、、、いくぞう」

その姿は元のハクの姿とは思えないほど変貌しており、仮面の力も相まってアクルトウルカの力すら軽く超えていた

気付けば巨大獣型は倒されていた。

圧倒的な強さ、だが

ハク

「、、、ふう、、、ぐっ!!」

全身を駆け巡る痛みに跪くハク

ウルウル、サラアナ

「主様、少しでいいから休む。回復するまでとは言いません、だから少しでも痛みが和らぐまでお願いします」

ハク

「ああ、、、3回までだったな、使えるのは」

ウルウル、サラアナ

「それでも危険、できるならもうやめていただけると助かります。それでもと仰るのであればあと一回にしてください」

ハク

「む、、そうか」

ウルウル、サラアナ

「カツコがつかない、皆様にあんなに無理するなど言っておいて主様だけ無理するのは筋が通りません。ご自重ください」

ハク

「、、それはそうだが」

ウルウル、サラアナ

「報告する、今回の事は主様を守るためにも皆さんに報告させていただきます」  
ハクはむしろそつちの方が怖かった

クオン

「あつちはハクが向かったはず、もう倒されてる。また無理したかな、もう」

クオンが大層ご立腹と言った様子

ネコネ



「ミカツチ様、あれは」

ミカツチ

「ふん、おおかただいぶ無理をした力を使ったと見えるな」

ネコネ

「帰ったら説教です！」

そう言いネコネは巨大獣型を思いつきり殴っていた

ミカツチ

「やれやれ、女は怒らすと怖いものだ」

どうやらハクがとった行動は皆にバレバレだったようで

後で説教されるのはどちらにしろ変わらないのだった

ハク

「ん？なんか結構早めに倒されていくな？」

他の獣型がだいぶ弱ってきているのがわかる、さらに一体は倒されていた、

ウルウル、サラアナ

「バレている、どうやら詳細はともかく主様が無理をしていたと言うのがバレているようです。皆さん大層ご立腹のようで」

ハク

「…は…はは…はあ…」

もうため息をつくしかなかった

そして、巨大獣型は倒され皆集まったところで、

クオン

「ハ〜〜クウ〜〜!!」

ハク

「ヒツ?!」

クオン

「貴方一体何をしたかな!! 答えなさい!」

ハク

「いいやなに。皆の救援に向かうためだけ早く倒そうと思ってだな?」

ウルウル、サラアナ

「強化の術。主様の仮面の力も相まってかなり強化されます、しかしその負担は大きく、常人ならまあ、使用後死にます。主様なら3回までは耐えられますが、使うたびに激痛に悩まされます」

ハク

「ちよっ!! お前達!!」

ルルティエ

「ハク様？さすがのルルティエも、怒っていいですか？」

ルルティエの目が怖い、

ノスリ

「これは相応の罰が必要だな」

アトウイ

「またカツコつけて死ぬ気え？許せへんなあ、なあクラリン？」

ネコネ

「兄様、後で覚悟しておくです」

ハク

（おいおい、言ってることめちやくちや怖いんだけど、）

ミカヅチ

「まあ自業自得だ、それよりも、」

ハク

「ああ、皆、その話は帰ってからだ、どんな罰も受けよう。だが今は、、、やつらだ」

丘の上に3人の人影が見える

バムナーと2人のオーツだ。

ハク

「ここからが本番だ、皆、いくぞ」  
オーツとの戦いが始まる

## 消えない違和感

オーツ3人がハク達の前に降りてくる

バムナー

「まあ、なんだ。あまり仰々しくやる趣味はないが、決戦と言うやつだ。貴様等には悪いが死んでもらう」

いつになく口調が落ちついている。正直似合わない

バムナー

「、、ふう、お前達、名乗れ」

ケルローキ

「ケルローキです。よろしくつすよ〜」

ブラモ

「ブラモ、先日の借り返させてもらおうよ」

素直に名乗る2人のオーツ

バムナー

「バムナーだ、知ってはいるだろうが。貴様等を殺す前に名前を聞いといてやる。まさ

かこうも簡単にあの駒を退けるとは思わなかった、非常に興味があるが殺さねばならぬいのでな、名前だけでも覚えておきたい」

まるで自分達は負けないと公言しているような態度ではあるが皆それぞれ名乗ったバムナー

「さて、そつちはまあまあ的人数だな、ハクとやら、貴様にはこつちのブラモとやつてもらおう。それ以外の連中は俺とケルローキが相手だ」

かなりキステルを浄化したのが癪だったのかハクを名指しするブラモ

ケルローキ

「ブラモ、相手は一人なんすからね。さっさと終わらせてくださいよ。」

ブラモ

「わかってるよ、ペットの借りを返すだけだからね。あまり時間はかけないよ」

ハク

「、、いいだろう。だが全部が全部そちらの言う事を聞く気はない。こつちの双子は某と共に行動する」

バムナー

「、まあ好きにするといい。さて、始めるか。」

両陣営ともに戦闘準備に入る

ハクが動いた瞬間全員が一斉に動いた

ハク、ウルウル、サラアナサイド

ハク

「基本的には某がヤツとやる。お前達は援護をしつつ2回目を使う準備だ」

ウルウル、サラアナ

「主様、多様は禁物。先程の痛みが抜けていないはずです。2回目は今回は使わないほうが良いかと」

ウルウル、サラアナがハクを気遣い使用を諦めさせようとする。だが

ハク

「、お前達には分かっている。某が二度と死ぬ気はないと言う事を。それを見誤るつもりはない、3回目は諦めよう、だが2回目は使う。よいな」

ウルウル、サラアナ

「、、御心のままに」

2人は諦めたようにハクの援護を開始する

ブラモ

「別れはすんだかな？それじゃあ始めようか!!」

ブラモがハクに攻撃を仕掛ける

速い上に攻撃が重い、攻撃を受ける度に鉄扇を持つ腕ごと持つていかれるような感覚、だが、

ハク

(なんだ? やけに前回より歯ごたえがない、いや確かに強い、強いがこの程度ならあんな怪我など負っていないはず、)

ハクが刀でブラモを攻撃する、いともあっさりこれが入る

ブラモ

「がっ!! な、なんだ今のは!!?」

ハクは確信した、やはり獣型を量産していたせいで力が落ちている。だがこいつらは何故かそれを理解していない

ハク

「ウルウル、サラアナ、ここはもういい。あちらを頼む」

2人も問題ないと見たのかそれを聞き入れた

ハク

(おかしいな、普通に考えたらわかるもんだ。奴らには何か欠けているのか? その事実を認識する何かが、)

ブラモ



「余裕だね、この程度で勝ったつもりかい？僕も甘く見られたものだ、」  
ハクは少し情報を得ようと探りを入れる

ハク

「さっきの4体、あれは全部お前のペットか？」

ブラモ

「はっ？そんなわけないでしょ、僕のは一体、ケルローキ一体、バムナー二体だよ。あんなでかいの4体も呼べるやつなんてそうそういないよ」

何故か簡単に話すブラモ

ハク

（べらべらとまあ、違和感だらけではあるが、嘘ではないように見える）

ブラモ

「さあお遊びは終わりだ！次はさっきのようにはっ！」

ハク

「残念ながら次はない、」

ハクはいつのまにかブラモの前まで来ていた

そして刀でブラモを両断する

ブラモ

「……??なぜ……あんなものを……呼び……あれ……なければ」

ハク

「!!」?

ブラモ

「キ……ル……」

そうしてブラモは浄化されていった

ハク

「……仕組まれていた……のか。こいつらは……捨て駒?なら……今回の……この……まさか!!」

急いで皆の所に戻るハク

少し前、クオンサイド

バムナー

「さて、始めようか!!いくぞケルローキ!!」

ケルローキ

「りよ……か……い」

2人のオーツがクオン達に向かってくる

ムネチカ

「ハアアアッ!!」

ムネチカの障壁が2人の攻撃を受け止める

アンジユ

「ミカツチ!!行くぞ!!」

アンジユとミカツチが仕掛けた、それに続きクオンとネコネが2人を援護する  
そういつた攻防が続きネコネが気付く

ネコネ

(あ、れ、?強いは、強いですが、あの時と比べて、何か、手応えが、)

ネコネがハクと同じくオーツが弱くなっているのではと感じ始めていた、さらにクオン

(聞いていたほどではない気がする、かな。何か理由がある?)

その次の瞬間だった

轟音と共に事態は一変する

誰かが駆け寄ってくる、ハクである

ハク

「こ、これは、」

ハクはクオン達の状態を確認する

なんとか皆命に別状はない、が

バムナー

「、、、ぐふつ」

オーツの2人は致命傷を負っていた

ネコネ

「あ、兄様、」

ハク

「ネコネ、そのままでいろ。一步も動くな」

ハクはある人影を捉えていた、

ハク

「なるほど、、、そういうことか、どうやらこちらに都合よく考えすぎたようだな。」

???

「、、、最低限の仕事もできないか。まあ仕方ないな」

ハク

「まったく、そつくりじゃないか、」

かなり絶望的な状況のハク達、ハクはオーツと思われるその男を今回の最後の相手だと確信した

## 新たなオーツ

なんとか全員無事ではあったものの戦える者は限られていた

ハク

(まづいな、さて、どうするか)

???

「思ってた以上にしぶとい、さすがに力を使わせすぎたか。」

ハク

「貴様、キシタルだな」

キシタル

「、、、ほう。ということは弟からある程度情報を得たか。そこは狙い通りといったところだな、計算違いはその役立たずどもだったぐらいか」

キシタルはバムナーに目をやった

バムナー

「、な、るほど、な、どうも、違和感が抜けなかった、わけ、だ」

キシタル

「お前だけは二体用意してもらわねば操りにくかった、だがまさかここまで弱くなるとはな。思った以上の弱体ぶりよ、敵側に死者すら出せなんだ」

ハクはそこまで聞くとすべてを理解した

ハク

「ほんの少しでもお前が味方であると仮定した自分が恥ずかしいな、自分達を消すのはついでであろう？バムナー達を消すのが今回の狙いと見える」

キシタル

「まあ、こいつらはもう使えなくなってしまうてな。俺たちオーツは回数こそ減ったが未だにあの忌々しい神に度々呪いを受けている、俺を含むほとんどの者は跳ね除けているがそいつら3人は暴走間近だった。よって始末しようとして色々策を練っていた」

ハク

「そこで自分達を利用したか、弟を使って」

キシタル

「あれはもはや化け物だったよ、理性も持たない獣にすぎない。それに浄化されたのならそっちの方がやつにとつても良かったであろう」

キシタルはそう言うとバムナーの前に移動する

バムナー

「ふん、ぼ、暴走、か、我々、の存在が、すでに、狂っている、だろうに、」  
キシタル

「そう、我々はすでに狂っている。だが諦めろ、王が決めた事だ」

ハクはその言葉を聞き逃さなかった

ハク

（王、だと、34人だけで、国とも呼べる何かがあるのか？それとも単純に頂点にいるからなのか？）

バムナー

「、どつちにしろ、もはや動けん、好きにしろ」

キシタル

「今まで」苦勞だった」

そう言うときキシタルはバムナーの首を刎ねた

バムナー達3人の浄化は予想外の展開ではあるが成されたことになる

だが

キシタル

「さて、次はお前たちだが」

ハクは咄嗟に構えをとる



キシタル

「、ハク、弟から何を聞いたかは知らんが、今のお前如きが俺に勝てるか？」

ハクは分かっていた、先程までの弱体化したオーツなんかとは比べものにならない、真のオーツとも呼べる強さ。勝てる可能性は微塵もない、が

ハク

「勝つ、必ず、貴様達を解放する、それが貴様の弟に、先代に、皆に約束した事だ。ウルウル、サラアナ、頼む」

キシタル

「む、」

ウルウル、サラアナ

「御心のままに、」

ウルウル、サラアナがハクに強化の術を施す

クオン

「だめ、ハク、一人で、無理しないで、」

ハク

「ありがとうクオン、だが信じてくれ。自分は死なない、無理はするだろう、だが限界を見誤ることはしない。だから信じてくれ」

クオン

「ハ、、、ハク、」

ハクの体が禍々しく変わっていく

ハク

「オオオオオツ!!」

キシタルが警戒を強めた

キシタル

「これは、なんだ？」

ハクの変貌ぶりに驚きを隠せないでいるキシタル、クオン達もまたそんなハクを見て驚いていた、だが何故か双子までもが驚愕の表情を浮かべている

ウルウル、サラアナ

「し、知らない、、、ある程度変化するのは見てきましたが、、、こんなになるのは、」

ハク

「、、、キシタルヨ、ユクゾ」

キシタル

「おもしろい、始めようか。ハクっ!!」

二人の戦いが始まった

あまりの速さにクオン、ネコネですら圧倒されていた  
ネコネ

「これでは、何の役にも、」

クオンがネコネを抱きしめる

クオン

「目に焼き付けようネコネ、私達の無力さを、そしてもつと強くなるかな。彼に、これ以上無理をさせないためにも」

戦いは一向に決着がつかなかった。

そしてしばらくして二人の一撃が重なり弾かれるように距離を置いた

キシタル

「はあ、はあ、これは驚いた、まさかここまでやる存在がいようとはな」

ハク

「フウ、フウ、フウ、マダマダ、ダ」

キシタル

「名残惜しいが、今日はバムナー達の処理ができただけ良しとしよう、俺もこう見えて忙しい身でな、今日のところは失礼するよ」

ハク

「キサマ、ニゲルキカ!？」

キシタル

「そうだ、俺は逃げるよ。お前もその状態をさっさと解くんだな。限界が近そうだぞ？」

ハク

「、、、、ヨケイナオセワ、、ダ」

キシタル

「ふふ、なかなか楽しめたよ。次誰をこちらに向かわせるか少し考える必要がありそうだな。次からは今日のようなヌルい相手ではない、覚悟しておくんだな」

そう言い残すと煙のように消えていった

それを確認するとハクも術を解き元の姿へと戻っていった、だが

ハク

「はあ、はあ、くっ、あっ!!」

その場に倒れこむ

ハク

(退いてくれて助かったか、これ以上維持すれば危なかったしな、)

なんとか寝転んだ状態から地べたに座る事ができた

ハク

「皆無事か？」

ハクは皆の無事を確認する

意識がないやつもいたがとりあえずそいつらを担ぎ結界内へと戻ることになった

ヘトヘトではあるがこの後は妻達の説教があると感じたハクは正直気が気ではな  
かった

## 満身創痍

結界内に戻ってきた一同

歩くこともままならない連中も多く、肝心のハクでさえ戻って来た後すぐにその場で倒れた

だがやはり他の者と違い回復は早い

しばらくすると歩く程度は問題ないくらいに回復していた

だが一番深刻なのはミカヅチであった

あの不意打ちに近い攻撃から可能な限り皆を守るため瞬時に仮面を付けアクルトウルカとなり衝撃の大半を受けたからである

ハク

「ミカヅチ、礼を言う。お前がいなければ皆は、」

ミカヅチ

「、かまわん。今の俺にできることをやったまでだ、、だが」

ハク

「しばらくは無理であろうな、その傷では。ここで可能な限り癒した後元の世界でゆっ

くり休んでくれ」

ミカツチの身体は無数の石の破片が刺さっていた、それをなんとか全部取り除いた後  
包帯を巻き今に至る

誰がどう見ても戦える状態ではなかった

ミカツチ

「これからという時に、」

ハク

「そうだな、無念かもしれないが後は自分に任せてくれ」

ミカツチ

「貴様は無理をする傾向にある、あまり任せたくもないが、この身体では仕方あるまい。あまりあの女たちを悲しませるなよ」

ハク

「無理をせねばならない時が多いからな、だがクオンにも言ったがもう死ぬ気はない。限界は超えんよ、だからこそ皆を呼んだのだから」

ミカツチ

「ならばよい、互いに仮面の力なしでまたやり合うには互いに死ねんな、」

ハク

「そういうことにしとくか、では自分は皆の様子をみてくる」

そう言うのとハクはその場を後にした

ミカヅチ

「仕方ない、しばらくは飴でも売ろうかの、」

カポッ

サコンの出来上がりだ

場所は変わりハクの自室

そこにはクオン、ネコネ、ノスリ、ルルテイエ、アトウイがいた

ハク

「、、さて、これは、説教でも始まるのかな」

クオン

「そうしたいのは山々なのだけど、ね。今回は仕方ない部分もあったし、ただ確認をしておきたいかなって」

ハク

「確認？」

皆が頷く

アトウイ



「おにーさんが無理するのはもう癖みたいなもんやえ、だから治らんの知ってるんよ」  
ノスリ

「だがやはり私達はお前を失いたくない、もう二度とだ」  
ルルティエ

「あんな思いはもう、あんな悲しいのはもう嫌なのです、だから」

ネコネ

「あの時兄様が、姉様に言った事、死ぬ気はないと、あれは本当なのですか？」

ハクはなるほどといった顔をする

クオン

「それを、約束してほしいかな、もちろん意図せず死ぬ時もある、それは私達もそうかな。でも自分を犠牲にしているなんて、思わないで」

ハク

「自分はウオシスと戦ったあの時、皆を守れるなら死んでもいいと本気で思っていた。だが、皆の気持ちを考えて時、それはやはり納得できるものではなかった事に気付いた。だから約束しよう、無理はするが死ぬ気は一切ないと、必ず生きて帰ると」

それを聞いてクオン達は一斉に泣き出した

しばらくクオン達の頭を撫でたりしながら落ち着くのを待つハク

そして皆が落ち着いた後

ハク

「今回は5人とも皆の看病ふくめ元の世界でやすんでもらう」

クオン

「5人とも?」

ハク

「うむ、今回はすこしウルウル、サラアナにやってもらうことがある。結界の移動、まあ単純に言うなら引つ越しだな。ここは場所的にはもうオーツに割れている、次は強度だけではなく場所もちゃんと隠すつもりだ」

クオン

「むくく、それなら仕方ないかな」

ハク

「内装は変わらんからお前達からしたら何も変わっていないかもしれないがな」

ウルウル、サラアナ

「ようやく一緒、しばらく離れていた分主様成分が不足しています。効率よく摂取をしないといけません」

ハク

「仕事はちやんとしろよ」

そしてハクはキウルの元へ向かった

キウル

「あ、兄上。怪我はもうよろしいので？」

ハク

「ああ、キウルも一番軽かったとはいえ怪我をしたのは腕であろう？ 問題ないのか？」

キウル

「はい、まだ多少は痛みますが弓を使うのに問題はなさそうです。ヤクトワルトさんも同様のようで」

ハク

「それはよかった、それよりなんだ、驚いたであろう、自分の姿に」

キウル

「ああ、あれですか、まあ確かに驚きはしましたがアクルトウルカを見慣れてしまう  
と、つて感じでした。兄上が兄上である事には変わりはないでしょうし」

ハク

「そうか、そう言ってもらえると助かる。しかしなんだ、ネコネならいざ知らず、キウルよ、自分はオシユトルではないのだぞ？ ずっと兄上と呼んでいいのか？」

キウル

「最初はハクさんに戻そうと思つてましたけど、やっぱり兄上ですよ。2人共、僕の尊敬する兄上です」

三年経つても変わらないものもある、ハクはそれがたまらなく嬉しかった

ハク

「そうか、ありがとなキウル」

ミカツチが参戦できなくなつたのは確かに痛手ではあつた、だが皆は嘆くことはなく至つて前向きであつた

ハク

「引つ越した後はしばらく特訓が必要かもしれないな、あの状態を維持し続けなければ今後厳しくなるはず。」

ハクもまたさらに成長せんがために密かにやる気を出していた、そう、引つ越しはもちろんやるがウルウル、サラアナをこつちに残らせたのは特訓が理由でもあつたからである

そうしてウルウル、サラアナ以外の面子は元の世界に戻つていった

## 引つ越しと療養

ハク

「さて、まだ節々が痛むが、始めるか」

皆を見送った後少し休んだ後ハクは結界の場所を移動するために手頃な場所を探し始めていた

ハク

「ウルウル、サラアナ、ここらはどうだ？」

3人は結界の外へ出てしばらくしてある場所にたどり着いた

ウルウル、サラアナ

「隠れ家としては十分、ですが広さが少々足りないように感じます。私達と主様の愛の巣にするには問題ないかと」

ハク

「ふむ、ならまた一から探すか」

ハクは広さのことだけ聞くと後はスルーしていた

ウルウル、サラアナ

「これは新しい趣向？主様の冷たい態度が私達の下半身を刺激しています。」

ハク

「何をしている？早く次の場所を探しにいくぞ」

ウルウル、サラアナ

「これもまた主様の愛、5人の妻を抱き成長した主様なのです、私達にもいつかその愛を」

ハク

「はあ、早くしろ。その事はお前達がクオン達に掛け合え。こうなった以上許しが出るなら拒みはせん。だが今は仕事がある、そつちに専念してくれ」

ウルウル、サラアナ

「御心のままに」

そうしてしばらく結界を展開できそうな場所を探すハク達

そして

ハク

「ふむ、ここなら」

ウルウル、サラアナ

「結界を展開してくださいと言わんばかりの好条件が揃っています、罨かと思えるほど

に」

ハク

「そこだな、あまりにも適し過ぎている。だが、あれを使えば」

ウルウル、サラアナ

「可能、この場所と別の場所を入れ替える主様の術を使えばさほど難しくはないかと。」

そう、ハクは二つの場所を入れ替える術を持つていた。

まず、前回の結界と別の場所を入れ替える。そして今いる場所と移動させた結界をさらに入れ替える。

こうすれば前回の結界の場所、そしてこの場所から離れた場所に結界を展開できる

問題は結界を展開できる条件の揃った場所を探すことにあったため見つければ後は簡単な作業だった

ハクは結界を二箇所設置することに重きを置いていた

前回の場所に結界がなく設置しやすいこの場所に前回の結界を置けば例えこの場が罠であっても問題ない、むしろこちらが罠を仕掛けていることになる

ハク

「こんな単純な罠に引つかかる可能性は低いが何もしないよりはマシだろう」

そうして作業を終えたハクは新しく設置した結界へ転移した

ハク

「ふう、内装は前と一緒だから、自分はちよつと自室に戻り休むことにする。お前達も明日まで休むといい」

ウルウル、サラアナ

「添い寝、主様成分を補給するため添い寝させていただけると助かります」

ハク

「、好きにしろ、添い寝だけだから。それ以上は許さんぞ」

双子の表情が少し緩んだ、なんだかんだでこの双子も純粹なんだなとハクは思った  
クオン達サイド

クオン

「大丈夫かなムネチカ？」

ムネチカ

「かたじけないクオン殿、だいぶ楽になった」

ムネチカはあの不意打ちでアンジュを庇っていたためミカツチほどではないがそれなりに重傷をおっていた

クオン

「それにしてもムネチカって意外と女らしい体つきかな、良い人とかいないのかな？」



ムネチカ

「む、小生は聖上に全てを捧げているゆえそのような事は考えた事もなかったな。だが  
フミルイル殿を見た時は世の理不尽さを一瞬嘆いたりもしたが」

クオン

「ああ、あの娘は特別だから。でもムネチカも女ならちゃんと考えた方がいいかな、アン  
ジユも心配するだろうし」

ムネチカ

「しかし小生を迎えてくれる男性など、それに弱い男性に魅力も感じぬし、」

クオンの悪巧みが始まる

クオン

「ねえムネチカ？ムネチカもどう？」

ムネチカ

「ん？どう、とは？」

クオン

「だからムネチカも、ごによごによ」

ムネチカ

「なっ、、、いやしかし!!さすがにそれは聖上に悪いと思うのだが」

クオン

「でもムネチカがそうなればアンジュとも家族になると思うのだけど？」

ムネチカ

「確かに、、そうなれば小生は聖上の、、それに確かにハク殿であればなんの不満も、先の帝の弟君でもあるし、」

クオン

「ね、ハクには私から説明しておくから」

ムネチカ

「う、うむ、小生が、聖上の、ハク殿の、、ぶつぶつ」

クオンの企みは見事成された

場所は変わりルルテイエの部屋

ルルテイエ

「えつと、、お姉様？何故ここに？」

シス

「ルルテイエがオシュトル様、ではありませんね、ハク様の危機にこちらに向かったのを聞いて急いで来たのよ、でもいざ来てみれば誰もいないものだからルルテイエの部屋で待たせてもらったってわけ♪」

何処から聞いたのか、ほんと謎ではあったが  
ルルテイエ

「お姉様、お話をすることが、実はルルテイエは」

ルルテイエはクオンの提案により数いるハクの妻の一人になった事を話す

シス

「そ、そんなことが、」

シスの顔を伺おうとするルルテイエだが次の瞬間

シス

「ルルー!!お願い!!お姉ちゃんを、お姉ちゃんも仲間に入れて!!一番でなくてもいいから!!ね?ね!」

ルルテイエもシスの気持ちは知っていた、だからこうなる事は分かっていたし、仕向けた面もあった

ルルテイエ

「はい♪ハク様に話しておきますのでお姉様も一緒に精一杯ご奉仕してあげてください」

そうやってハクの妻がまた一気に増える事になるのであった

異界

ハク

「!!?、なんだ、何か、悪寒がしたが、」

ハクがこの事実を知るのとはそう遠い話ではなかった、というか次の招集の時であった

## 作戦会議

引越してから2週間が過ぎた

それまで療養していた者達も回復し今か今かとハクからの招集を待っていた

だがミカツチだけは回復までかなりの時間を要していたため自身の勾玉をシスに渡しひたすら寝たきりであった

はずだが

やはりサコンとなり街で飴細工売りをしていた

アンジュ

「まったく、ミカツチにも困ったものじゃ、安静にしておけと言うておいたのに」

ムネチカ

「まあ息抜き程度ならよろしいでしょう。しばらく戦える身体ではない以上何かしていないと気がすまない性分でありましょうから」

アンジュ

「下手に落ち込まれるよりかはマシと言う事かの。しかしムネチカよ、お主まで余のハクを、裏切られた気分じゃ、」

ムネチカ

「申し訳ありません、小生も最初はどうかと思つたのですが聖上の叔母になれると思うと、その、断りきれなかつたと申しますか、」

アンジュ

「ふむ、それはそれで悪くないの。ハクはおじちゃんと呼んでいたがムネチカはおばちゃんと言うよりかお姉ちゃんと呼んだほうがよいかの？くつくつく」

ムネチカ

「身に余る光栄！如何様にも呼んでくださればよろしいかと！」

アンジュ

「ああ、固い固い、もっとこう家族らしい触れ合いの方が好みじゃぞ余は」

しばらくは進展しそうにない2人

アンジュ

「じゃがまあ、そうか、家族が増えるのは良いことじゃな。うむ」

そして次の瞬間勾玉が光る

アンジュ

「ふむ、やっとか」

そして皆新しい結界を張つた異界へと転移する

ハク

「久しぶりだな、皆十分休めた、か、シス殿？」

ハクはシスがいることに驚いた

ハク

「なぜシス殿がここに？見たところミカツチがいないようだが、まさか」

シス

「ハク様、ミカツチ様はしばらく戦える状態ではないため勾玉をミカツチ様より託されました。ミカツチ様には遠く及びませんがどうかこのシスも戦いに参加させてくださいませ」

ハク

「そうであったか。いや戦力が増えるならばありがたい、シス殿であれば実力も申し分ないだろう」

ハクはルルティエに目をやる、ルルティエはただただニコニコしている。

「どうやらこつちもまた話がついているようだ、」

「気をとりなおし話を続けるハク」

ハク

「待たせておいて何だが今回出撃はない、もはや獣型は言うほど多くはないのでな、残り

31人のオーツのみを標的とする。もちろん一斉に叩くことはできん、確実に1人ずつ減らしていく」

皆それには同意していた

クオン

「でもどうするつもりかな？ 相手もバカじゃないしなかなか単独行動はしないと思うし」

ハク

「無論策は考えるが、おそらくバムナー達同様数人で行動はするだろう。だがそうであつても数を減らす事が大前提だ、数人で動くなら数を減らせばだいぶ状況が楽になるはずだからな」

ネコネ

「了解なのですよ、必ず兄様の力になるです」

ハク

「そして、前回キシタルと戦った時に気づいた。今のままではおそらく負けるだろうと」

一同

「!!?」

ハク



「少し時間がかかるかもしれないが、更なる特訓が必要と判断した、自分にもな。招集は今までと変わらず続けるがしばらくは戦いに行かず各々鍛錬に励んでもらいたい」

皆前回の戦いを見ている以上納得するしかなかった（シス以外）

ハク

「本日はこれだけだ、皆ご苦勞であつた。」

そう言うのと皆各々帰つていった

そう、5人の妻、シス、ムネチカを除いて

ハク

「結局誰かは残るつもりなんだろう？双子には先に帰らせたが今回は誰が、、、ん？」

なぜムネチカが？ハクは混乱していた

クオン

「あ、ハク今回はシスさんとムネチカが残るから」

ハク

「クオンはんや、これはどういうことかの？」

思わずジジイのような口調になるハク

クオン

「まあ言った通りかな、それじゃ2人共、頑張つてね」

そう言うとかオン達も帰っていった。ムネチカ、シスを除いて

ハク

「シス殿はまあ、聞いていたが、ムネチカ？何か弱みでも握られているのか？」

ムネチカ

「しよ、小生も、女ゆえ、な。きつかけは確かにクオン殿から持ちかけられたからだが、ちや、ちゃんと小生の意思でここにいる、ハク殿、小生では、だめか？」

ハク

「い、いやもちろんダメではない、ムネチカさえよければ自分も問題はない。だが意外だったのな」

ムネチカ

「と、とりあえず、今日は、よろしく願います、」

ハク

「うむ、、そしてシス殿」

シス

「はい♪ハク様、シスはとうとう貴方様と結ばれるのですね、この時をどれほど待っていたか」

ハク

「そ、そうか、だがよいのか？自分はオシユトルではないのだが？オシユトルの名を語り貴女を欺いた張本人だぞ？」

シス

「その経緯はもう聞き及んでおります。誰が貴方様を責められましょう、それに、あの時手を差し伸べてくれたのは間違いなく貴方様なのですから」

ものすごくウツトリしている

ハク

「そ、そうか。正直貴女たち2人が同時に残るのは想定していなかったのな。かなり驚いているのだ」

ムネチカ

「そ、そうであろうな、だが決意は変わらぬ。ハク殿、其方の愛を小生達にも分けてはくれまいか」

シス

「事情は聞いております。こんなに妻が増えてはさぞかし大変でしょう。今晚は必ずしていただきますが、以降はハク様の体調を第一に考えます、ですからどうか安心なさってください」

ハクは予想以上の良妻っぷりに脱帽していた

ハク

「ありがとう2人共、こんな節操のない自分でよければ今後ともよろしく頼む」

ハクはどうにも結婚と言うものがわからなくなっていた。

だが自分を想ってくれている者を無下にもできず、何なら揃いも揃って美人ばかりである。断れるはずもない、クオンが提案したあの時からこうなる事は決まっていたのだ

ハク

「こうなったら全てを受け入れる気でいらないといかん。まったく、死ねない理由がどんどん増えていくな、」

そうして3人は寝室へと向かった

## シスとムネチカ（異界）

シスとムネチカが残ってから1日後

ハク

「2人共よく眠れたか？」

ハクは以前アトウイに自分から求めすぎていた部分もある事を指摘されなるべく抑えて事を成していた、が

シス

「ハク様？一つよろしいですか？」

ハク

「む？いかががしたシス殿」

シス

「色々大変な事もわかります、オーツにおいても、我々妻においても。ですが愛し合う時に我慢をされるのはいかなものかと」

見抜かれていたようだ

ハク

「む、だがやはり自分としても貴女達の事を考えるとどうしてもだな」

ムネチカ

「言わんとしている事は分かる、だがそれでは小生達の立場もない。色欲に溺れるとは言っていない、だが数多くいるとは言え夫婦ならば、わかるであろう」

ムネチカが顔を真っ赤にしながら正論を説いていた

シス

「そういうことですわ、真剣勝負に手を抜かれている以上に傷つくんですのよ」

ハク

「そういうものか、ならば謝らなければなるまい、初夜ならば尚更であったか。すまなかつた」

シス

「分かっていただければ、ですが今夜は本気を出してくださいな。昨日はハク様の体調を第一に考えerと言いましたがさすがに昨日のあれでは私はもちろんムネチカ様も満足はできていないでしょうから」

ムネチカ

「わ、悪かったわけではないが、な。」

フオローのつもりなのだろう

ハク

「いや、確かに自分の落ち度であった。次からはもう昨日の事はないよう誓おう」

そう言つて3人は特訓に入る

ハク

「いつもなら結界内の見回りを頼むのだがもはやその必要はなくなつたのでな、実戦形式の特訓をしたいと思う。2人共、準備はいいか？」

ムネチカ

「ふふ、オシユトル殿を名乗つていたあの時はのらりくらりと躲されたが自ら提案してくれるとはありがたい。それでは小生からよろしいかシス殿？」

シス

「ええ、この中では私が1番弱いでしょうからどれほど高い壁なのか観察させてもらいますわ」

そしてハクとムネチカによる実戦形式の特訓が始まつた  
しばらくして

ムネチカ

「はあ、はあ、さ、さすがと言うべきか、まるで勝ちの糸口が見えないとはな、」

ハク

「ふう、だがさすがはムネチカ、守備に関しては負けているな。立てるか？」

ハクがムネチカに手を差し伸べる

ムネチカ

（あつ、）

少し照れくさそうにするムネチカ

ハク

「どうした？どこか痛めたか？」

ムネチカ

「い、いや!!問題ない!!」

声が裏返っていた

シス

「ふふ、かわいらしいですねムネチカ様。さて、次は私ですね、さすがにあそこまでは無理ですが。このシス、全力でやらせていただきます」

シスの目の色が変わる

ムネチカ

「ほう、これは」

ハク



「ふむ、なるほど」

そうしてムネチカに続きシスの特訓が始まる

ムネチカ同様しばらく経った後

シス

「きやうううん!!」

ハクの攻撃によりシスが奇怪な声を上げ倒れる

ハク

「す、すまないシス殿!! 大事ないか!？」

シス

「これですわ、あの時ハク様が私に与えた一撃、あの頃とまったく一緒の、」

ハク

「シ、シス殿?」

シス

「ハッ!? あ、あの、私、貴方様に受けた一撃が忘れられず、今また同じ攻撃を受けて、」

その、達してしまい、」

ハクとムネチカが知らない世界なのか戸惑いを隠せないでいたが

ハク

「ま、まあなんだ。本日の特訓はここまでとしよう。この結界はある程度までなら治療してくれるのでな、自分も少し治療がてら風呂にでも入ってくる」

そう言つてハクはその場をあとにした

シス

「ムネチカ様、聞かれました？」

ムネチカ

「む？どうされたシス殿、聞いたとは、何をだ？」

シス

「ハク様の言葉です」

ムネチカ

「治療のために風呂に入る、と、風呂、に」

ムネチカの顔がまたしても真っ赤になる

シス

「旦那様のご奉仕も妻の役目、私達もハク様と一緒に入りましょうムネチカ様」

ムネチカ

「い、いやしかし今夜の事もある、あまり昼間からそういうのは」

シス

「そう堅いこと言わずほらほら、いきますわよ」

そう言ううと風呂の前で全裸になりハクが入浴中にもかかわらず入っていく2人

ハク

「なっ!?こ、こら2人共何を!!」

シス

「ふふふ、お背中をお流ししようと思ひまして」

ムネチカ

「妻として、と、当然の事を小生はしているだけだ」

ハク

(これは、昨日の自分の責任なんだろうな。女心はほんと難しいものだ)

とりあえず可能な限り接触は避け2人の奉仕を受けるハク

ふにゆん、もにゆん

だがどうしても当たるのだ、いろいろと

ハク

「あ、ありがとう2人共、自分はこれで上がるとする。2人はゆっくりするとよい」

そう言い残し風呂からでるハク

ムネチカ

「あ、あれでよかったのか？」

シス

「少し物足りませんが仕方ないでしょう、ああいう殿方だからこそ惹かれるのですから。ですがこれで今夜は大丈夫でしょう、我慢にも限界はあるでしょうし」

その場で最後までいかないのはシスには分かっていた、ハクはそういう男性だ、行為にたいして暴走する類の男性ではないのを分かっていた。だがだからこそ我慢もできず、その我慢の限界を超えさせるのが目的だった

ムネチカ

「だが目論見が外れてこの場で始まったらどうするつもりだったのだ？可能性が無いわけではなかったろう、何よりかなり恥ずかしいのだが」

シス

「恥ずかしさはなれてきますわ、そしてその可能性に関して私は無いと断言できますが、仮にこの場で始まったとしてもそれはそれで我慢の限界を超えているので良いと思いますよ」

ムネチカ

「そ、そういうものか、奥が深いな」

シスの目論見通りその晩のハクの激しさは凄かったらしくシスとムネチカはハクの

愛をしつかりと感じたのであった

## シスとムネチカ（2）

初夜がいまいちだったため実質2回目の本番だったシスとムネチカの夜を終えた直後

ハク

「はあ、はあ、これで如何か？自分としては大変満足ではあるが」

シス

「こんなに、素晴らしい経験は初めてでしたわ、ハク様、シスは幸せ者です」

シスはそう言つてハクの腕にしがみつく

もちろん全裸である

ハク

「シ、シス殿、事を成したとは言えその格好でくると当たるのだが、」

ハクは意識を腕から離そうとするが

シスが耳元で囁く

シス

「当てるんですのよ」

なんとか理性を保つハク

ハク

「ム、ムネチカ？お主までなにを、」

何故かムネチカも反対の腕にしがみつく

ムネチカ

「す、すまぬ、我儘なのはわかるが、こうしてきたいのだ」

もちろん全裸なので直に当たっているわけだが

ハク

「やれやれ、お前達、あと一回付き合ってもらおうぞ」

そうして予定していないもう一回が始まった

そうしてしばらくして着替えを終えて特訓のために中央に来た3人

シス

「ムネチカ様、すごい乱れっぷりでしたわね。私も負けじと張り切ってしまいましたの

よ」

ムネチカ

「あんな世界があるとは知らなくてな、無論ハク殿だからではあるのだが。皆が惹かれるのが納得できるな、あれは、反則だ」

シス

「ですわね、本来なら他の女がいると殺してやりたくなるものです。ですが、あれは無理ですわ、一人で繋ぎとめるには少々無理がありますわ、クオン様の提案は結果的にですが正解とも言えます」

ハク

「2人共何をしている？そろそろ始めるぞ」

2人が気を引き締め直す

ハク

「今日は2人同時にかかってきてもらう、せつかくだ2人の連携を新しく考えるのもよいのではないか？」

2人の相性がかなり良いのではないかと考えたハク

2人の連携がうまくいけばミカツチの抜けた穴は十分に埋まるはず

ムネチカ

「ふむ、確かにシス殿は指揮にも優れ攻撃も達人と言えるほど。防御を中心とした小生の力の特性を良く理解してくれるかもしれぬ」

シス

「ふふ、少々買いかぶり過ぎかもしれませんが、私もムネチカ様となら良い連携ができる



かもしれません、ハク様、本気でいきますわよ」

2人が構えをとる

ハク

「これは、もしかすると予想以上かもしれんな」

2人の気迫と構えから少し冷や汗がでるハク

しばらくして

ハク

「ぐぬっ、!!」

ハクが膝をつく

ムネチカ

「はあ、はあ、や、やったか」

シス

「で、ですがこれでも、やっとな膝をつかせる程度ですか、魅力はもちろん、力もこれほどとか、もう本当に反則ですわね、」

なんとかハクに一矢報いることができた2人

ハクが若干よろめきながらも立ち上がる

ハク

「見事だな、予想を軽く超えてくるとは恐れ入った。どうだ感覚としては？」

ムネチカ

「ふう、改善の余地はあるだろうが即興にしてはかなり高い域にいるであろうな。シス殿はどう思う？」

シス

「そうですね、私の力不足がやはり不安材料ではあります。ある程度ムネチカ様に攻撃も任せていますから隙ができていいのかと、ですがお二人の仰る通り即興にしては上出来どころかかって感じですね」

ハク

「ふむ、しかしシス殿。自分から見てもそこまで力不足でもない気もする、ただどこか一線を引いている感じがする」

ハクが違和感を指摘する

シス

「あら、バレていますのね。確かにもう1段階上の動きはできません。ただ、少々攻撃に特化しすぎているのでムネチカ様の防御を考慮してもあまり得策ではないのです。あと

あの動きをしてしまうと翌日動けなくなるので、」

ハク

「そうであったか。あまり無理はしてほしくはない、自分が言うのは説得力に欠けるがな。」

皆何かしら切り札があるのだとハクは感心していた

ムネチカ

「そうだな、其方のあの姿を見た時はさすがに無理をしすぎていると思ったものだ」

シス

「皆いつかどこかで無理する時はあるでしょう、私も必要とあれば先ほど言った動きもしますから。皆死なない事が大事ですわ」

何故だろう、すごく常識的な事を言われると違和感を感じる。そう思ったハクだが口には出さないでいた

ハク

「とりあえずお疲れ様だ2人共、自分はまだやる事があるのでこれで失礼する」

そう言うとう勾玉に力を送るためその場を離れるハク

シス

「はあ、やっぱりすごいですわねハク様は、ルルから色々聞いてたけど本当に聞いてた

話以上のお方でしたし」

ムネチカ

「そうだな、小生は本当に意識したのは最近だが、異性を意識するようにしていればかなり前に惚れていただろうな。それほどの男と言うことか」

シス

「ふふ、最初は聖上の叔母となるためだけでしたものねムネチカ様は。まあ本人の魅力は言わずもがなですが、やはりあれは、癖になりそうですわね。自重するようにクオン様から言われたのは納得ですわ」

ムネチカ

「であるな、皆も今我慢しているのだから」

シス

「基本的に現界されるまでは二人を相手にしてくださいませでしょう。ムネチカ様は次誰と一緒にいいとかありますか？」

ムネチカ

「む、そうであるな、少し迎えたい方がいる。世の理不尽さを体現したような方がな。女として勝負するには申し分ないであろうからな」

何故か武人氣質がここで出るムネチカ、勘違いなのは言うまでもないが

シス

「ふふ、そうですね。私はムネチカ様との夜も大変良かったですわ、でもあえて選ぶのならやっぱり私の可愛い妹ですわね、ルルと一緒にご奉仕するなんて夢のようです」

ムネチカ

「ふ、そうか。小生も初めての時に一緒だったのがシス殿でよかった。感謝する、またいつか一緒にいいか？」

シス

「それはもちろん、戦いでも連携の相性が良いみたいです。あの乱れたムネチカ様はとても美しかったですから、また見てみたいですわ」

ムネチカ

「む、そう言われると恥ずかしいものだな、だが悪い気はしないか。」

シス

「ええ、それにまだ今夜が無いとは限りませんから、楽しみにしておきましょう。もちろんここからはハク様の体調第一ですが」

ムネチカ

「そうだな、あれば僥倖とでも思っておくでしょう」

ハクは何か吹っ切れたのかその夜もまた2人の元に行くのだった

## 特訓の段取り

昼間にムネチカとシスとの特訓を終えた後クオン達を呼んだハク

シス

「あつという間の数日間でしたわね、寂しくなりますが次を楽しみにしてますわハク様」

ハク

「ああ、次はさらに腕を上げていることを期待しよう、シス殿はまだまだ伸びしろはあるからな。ムネチカよ、頼めるか？」

ムネチカ

「任されよ、シス殿との連携、必ず物にしてみせよう」

そうして転移してきた皆の元に向かう3人

ハク

「さて、まだ特訓期間に入って間もないゆえいきなり成果をどうこうは問わない。今回は呼んだのは個々の特訓より連携による特訓を重きに置きたいと思つてな。先日ムネチカとシス殿による連携を相手にしたが即興とは思えぬほどの強さでな、相性次第ではかなりのものになると踏んでいる」

クオン

「連携かあ、そういえばネコネはその強さの特性上結構周りに合わせていつていたかな、本人の強さもさることながらって感じかな」

ネコネ

「元々術による支援が主でしたから、体術になってもそこは癖なのだと思います」

ハク

「うむ、だからこそネコネの成長は人一倍早かったのだろう。1人での強さはもちろんミカツチの言う通り天才とも言えるだろうがここ最近の成長ぶりはそれだけでは納得できないほどであったからな。将たる器であろう、あのオシユトルでさえ凌駕しかねん」

ネコネ

「あ、兄様、持ち上げすぎなのです」

ハクはネコネね頭をポンポンと優しく撫でる

ネコネの顔がかなりだらしなくなっているのは皆気にしないようにした

ハク

「とまあ連携の重要さは皆わかってはいるはず、そこで各自相性が良い悪いはともかく帰ったらいろいろ試してもらいたい、今後相手にするオーツの事を考えるなら備えすぎ

と言うこともあるまい」

皆はそれに同意する

アンジユ

「ふむ、それならば早速取り掛からねばな。今回は誰が残るか分からぬがそれ以外の者よ、帰るぞ。ハクよ、次に来る時は少し相手をしてもらうぞ」

ハク

「了解だ、楽しみにしている」

そして皆は帰っていった

残ったのは、クオンとアトウイ

ハク

「お前達2人か、早速だが特訓に入らせてもらうぞ。2人同時にだ、よいな」

クオン

「夫婦とは思えない台詞かな、まあ仕方ないのだけど」

アトウイ

「そうけ？おにーさんとなら子作りでも特訓でもウチはもう興奮を抑えきれへんえ。ああキュンキュンするなあ、このへんが」

ハク



「ふふ、頼もしい限りだ。だがお前達2人を相手にこちらも手加減はできん。あの双子に作ってもらったこの札、使わせてもらおうぞ」

それはあの強化の術を封印してある札。もちろん直接ではない分効果はかなり薄い。それでも

ハク

「ミ、フウ、サテ、ハジメルゾ」

前回ほどではないがハクの姿が変わる

クオン

「本当に貴方は、すこし痛い目を見てもらうかな」

アトウイ

「アハハ、そうやなあ、本気出してくれるんは嬉しいけど、アンマリアマクミタライカ  
ンエ」

2人の気迫がハクを襲う

3人の殺し合いと言っても過言ではない壮絶な特訓が始まった

その特訓は20分ほどで決着がついた

倒れているのは、ハクだった

力を使い果たしたハクは元の姿に戻っていた

ハク

「いや、見事、ま、まさか負けるとは思っていなかった」

ハクはそう言うとき上がり血を拭った

クオン

「ちよつと危なかつたかな。でもハク、特訓とは言え無茶しすぎかな。こつちも手加減できないのだから万が一という事もあるんだから」

アトウイ

「そうやなあ、しかも簡易版の術に簡単に負けてあげるほどウチらは弱くないえ」

ハク

「ふむ、まあこれがどれほどなのか分からなかつたのでな。実用できる段階ではなかつたようだ、負担はさして変わらず、だが力は落ちていると言ったところだな。次からは使用しないさ」

クオン

「考えた結果なのだけどアトウイと上手く連携できればネコネと合わせてかなり実用的になるんじゃないかな。」

ハクはネコネ、クオン、アトウイが連携しようとしているのを聞いてかなり期待できるのではないかと思つた

ハク

「なるほど、確かに各々役割が違うがゆえ、か」

アトウイ

「そうやなあ、ウチは前しか進まんしネコやんやクオンはんがいてくれたら安心するしなあ」

アトウイは自分の強みがまた弱点であることも知っていた、下手に直せばたちまち弱くなってしまうだろう事も

ハク

「悪くはない、ならばそっちの連携は3人に任せるとしよう。さて、今日はここまでだ。自分は早速勾玉に力を送ることにする。この結界はもう見回りの必要がないからな、自由にして構わない」

ハクがその場を後にする

クオン

「ほんと、いつも無茶ばかりかな、これを言うのももう何回目かわからないし」

アトウイ

「そうやなあ、それがおにーさんの魅力つてのもまた皮肉やえ」

本当に何回も同じ話題になる、がそれでも話題に出してしまう、2人は笑いながら同

じようにハクの事ばかり話し合っていた

その日はハクも疲れているだろうと2人は気をつかうつもりだったのだが、我慢できずに添い寝だけでもとハクの寢室に向かうとハクはもう我慢しなくてもいいと2人に言い3人の夜が始まった

2人は今までにないハクの熱い愛情にこれ以上ない幸せを感じていた

それと同時に必ずハクを現界させると強く思い特訓にも一層身が入るのであった

## 両者の思惑

ハク

「まさか呼び出されるとはな、キシタル。戦いにきたわけではなさそうではあるが」

少し前

ハクは罨を張っていた結界にかかった存在を感じ取るとキシタルがそこにいることを知り驚いていた、逆に何かあるのではと出向くかどうか悩ましいところにキシタル本人から念話が届いた。

キシタル

「聞こえているなハク。貴様一人で来い、話をしようではないか。なに、こちらも一人だ。安心するといい」

ハクはキシタル一人でも充分危険なんだがとも思ったが、話を聞けるなら聞いておいた方が後々助かるかもしれない。それにここでびびっているようでは最初からこんな危険なこともししていない、ハクはキシタルの呼びかけに応じる事にした

クオン

「油断はしないでね、アトウイとちゃんと待つてるから。必ず帰ってきて」

アトウイ

「おにーさん、いつてらっしやいやえ。チュツ」

クオン

「あ、アトウイ！ずるいかなっ!!私も!!」

そうして2人の口付けを受けキシタルの元へ転移したハク

そこには戦うそぶりも見せずハクが来るのをひたすら座って待っていたキシタルがいた

キシタル

「きたか」

そして今に至る

キシタル

「弟からいくらか話は聞いていよう、そして前回の戦いの時貴様は面白い事を言っていたな、都合よく考えすぎていたとか」

ハク

「そのことか、いろいろ腑に落ちない点があったのでな。なぜキステラを向かわせたのか。獣になったとは言え肉親であろう？浄化が救いの道と思つたにせよそう簡単に送り出すとは思えなかつたのでな、其方から何かしら伝えたい事があつたのでは、もしくは

「はこちらに味方する存在なのではと思っていた」

キシタル

「、なるほど。結論から言うとその通りだ、俺は貴様にオーツを滅ぼしてもらうために動いている」

ハク

「!？」

キシタル

「だが監視の目はかなり厳しいのでな、俺の裏切りが今バレるのはマズイのだ。疑われてるわけではない、仕事をちゃんとこなしているかの監視だ」

ハク

「あの場は戦うしかなかったと言うことか、だがなぜだ？裏切る理由を聞きたい」

キシタル

「そんな大した理由はない、我々は元人間だ。命あるものだ。いつかは死なねばならない、だがこの体は生半可な事では壊れぬ。最初は永遠に生きられる喜びもあった、だがそれが苦痛になってきたのだ、他の連中はかなり狂っているぶん永遠に喜びの中にいるようだがな」

ハク

「理由としては充分ではあるが、オーツの誰かに殺されればすむ話ではないか？ 現実世界とは違いお前達は致命傷を負えるだろう」

オーツ

「できんだよ、我々の総大将の意向でな。同士を殺してはならない、この言葉の強制力によつてな。前回のバムナー達は総大将の意向により同士から外されたゆえに殺せただけよ」

ハク

「総大将、か。やはりお前が一番強いわけではないのだな。」

キシタル

「俺は一応それなりに上の方の立場ではあるがな、番号付けするなら8番つてとこよ。まあ、上の7人は別格ではあるが。総大将はさらに底が見えん、」

ハク

「まったく、ふざけた強さだな、これでも自分は神なんだがな、」

キシタル

「くくく、俺たちがいなければそれで充分とは思うがな。さて、具体的な話に入るが要は俺は味方ではあるが今裏切りがバレるわけにはいかん、よつて度々お前達と敵対行動をとるだろう、だがもちろん殺しはしない。前回は本来ならもう少し手加減するつもりで



はあつたがいきなり総大将がバムナーをちゃんと始末できるか見たいと言いだしてな、手を抜けないな。すまないな」

ハク

「なるほど、しかしまだ完全には信用はせんぞ。この事は皆にはしばらく黙っておく。味方だと意識してしまえば変に意識してしまうだろうしな。その味方によって殺された場合は諦めてくれ」

キシタル

「もちろんだ、どっちにしろ俺も死ぬつもりだからな。さて、今後は度々ここを使わせてもらう。監視の目が届かないのでなここなら、そろそろ戻らねば疑われかねるので失礼するよ、次からはもう少し我々の内部情報を報告する。それではな」

キシタルはそうハクに伝えると結界から去っていった

ハク

「、、疑ってしまうのはもう癖だな。信用したいところではあるが、どうしたもんかね」

場所は変わりキシタル視点

キシタル

（なんとか協力してくれると助かるが、どっちにしろ今のままでは俺より上の連中には

勝てんだろうな。やつらの修行とやら、どこまで伸びるかにかかっているか)

???

「どこ行ってたんじゃいワレ、エライ遅かったのう?」

キシタル

「敵対勢力を探していた、が、なかなか見つからないものだ」

???

「ワレに手傷を負わせたやつらか、ちよつと戦つてみたいのう」

オーツの1人であろうか

とてつもなくデカイ

キシタル

「見つけたのなら好きにしろ。誰もお前を止めはせんよ。すこし休む」

軽くあしらいキシタルはその場を後にした

## ハクの本気

???

「ガツハツハ、なかなかやるのう!! 楽しくなってきたわい!!」

ハク

「この、バケモノめっ!!」

アトウイ

「あちやあ、こりやさすがに入り込めへんなあ、」

クオン

「私達はまだまだ無力かな、でも」

時は遡りハクがキシタルと話した後クオン達の元に戻った後わずか3時間ほど後の事であった

キシタルと話していた場所、つまり罫用の結界に新たなオーツが攻撃を仕掛けているのだった

あまり長くは持たないと判断したハクはその場に向かう事にした、今回はクオン、ア

トウイ共に留守番をするつもりはなくハクも致し方なしと言わんばかりに2人を連れ向かう事にした

転移する前にキシタルから念話が届く

キシタル

「すまないな、今回の連れが運悪くそちらの結界を見つけたらしい。俺は遅れる旨を伝えたいゆえ相手はそいつ一人だが気をつける。俺より弱いが考えなしの猪突猛進する性格ゆえ単純な力は俺より上だ。名をガシヤグラ、本気で挑め。様子見などしようものなら瞬殺されるぞ」

ハク

「まったたく、手綱くらい握っておけ。」

愚痴をこぼしながらもガシヤグラのいる場へ転移するハク

結界はまだ無事ではあるがやはり長くはもたないらしくハクは結界の外へ出る

ガシヤグラと思われるオーツが結界を攻撃、というかただ殴っていたがハクに気付くと結界への攻撃がとまる

ハク

（マジかこいつ、結界をただ殴るだけでここまでダメージを受けたのか、なんつうゴリラだよ）

ハク

「貴様、ガシヤグラだな」

ガシヤグラ

「ワレ、ワシの名前知つとるんか。なるほどのう、なかなか情報通や聞いとつたがほんまらしいのう」

ハク

（なかなか、訛りが、関西弁みたいだが）

ガシヤグラ

「まあええわ、オーツがここに来た。何を意味するかは分かっとうな。ワシとワレの殺し合いや、覚悟はええか？」

ハク

「話す暇もないか、問答無用という事だな」

ガシヤグラ

「ガツハツハ、そういうこつちや。ほなら始めるか」

ハク

「クオン、アトウイ、離れている。こいつは複数でかかればいいと言うものではないようだ。某が1人でやる、よいな」

クオン、アトウイは悔しかったに違いないが相手が悪すぎるのを悟りその場を離れた  
ハク

「こつちの札を使うしかないか」

以前クオン達と特訓用に使った札は白色だったがハクが手にしているのは黒い札  
だった

双子から万が一自分達がない時にオーツと戦う場合があるかもしれないと説得し  
て作らせた物だった

効果はもちろんキシタルと戦った時同様の効果だ

ハク

「前回と違い万全の状態だからな、ガシヤグラよ覚悟するがよい」

ハクが黒い札を使いキシタルと戦った時のように姿を変える

ガシヤグラ

「なかなかオモロイ姿になったのう。こけおどしやない事を祈るでえ。」

ハク

「ふむ、今までの中で一番安定しているか。ゆくぞガシヤグラ!!」

ガシヤグラとハクの戦いが始まった

そして話は冒頭に戻る

ガシヤグラ

「あのキシタルに手傷を負わせた言うんはホンマの話やったかワレ!! オモロイにもほどがあるのう!!」

ハク

（まだ、いけるか。だがあまり時間もかけられんしな。どうしたものか）

ガシヤグラ

「ワシやあのう、ワレのその強さの秘密やらそんなもんはどくうでもええんじや。その強さがある事実だけでええ、ホンマこんな楽しいのは久しぶりじやのう」

ハク

「同胞には楽しめるやつはおらぬのか？ 聞くところによるとかなりの強者揃いと聞いたが」

ガシヤグラ

「楽しそうなもんはおるで、でもあかんねんなあ、ワシらは同胞と喧嘩でけへん。ワシらのお上は同胞と喧嘩したらあかん言いよるからのう。お上がそう言うてもうたらワシらは逆らえんのじや、何があつても」

ハク

（キシタルの言っていた言葉の強制力か、やはりやつと言っていた事は正しいみたいだ

な)

ガシヤグラ

「だから敵がこない強いのは久しぶりで、なんやここで決着つけるのはもったいない気がしてきたわ。今日はこのへんにしとくかのう」

ハク

(なるほど、気分屋だな)

キシタル

「まったく、ガシヤグラよ俺が来るまで待てるのか貴様は」

キシタルがそこに現れる、今は敵として接する必要があるのでさつき会ったことは互いに触れない

ハク

「キシタルか、さすがに2対1はキツイな」

キシタル

「くつくつく、確かにこの状況、貴様からすれば絶望的だな。さあどうする?どこまで足掻く?」

ガシヤグラ

「ちよつと待てやワレ、横から入ってきて好き勝手言うなや。こいつはワシの獲物や、ワ



レ如きにくれてやるかいな!!」

キシタル

「ガシヤグラよ、俺たちは敵対勢力を殲滅するために来ているんだ。わがままは、」

ガシヤグラ

「こいつと決着つけんのはまた今度や、今で終わりにするのはもったいないしろう。報告にはワシが向かう、それで文句ないやろ」

キシタル

「、いいだろう。ハクよ命拾いしたな、次もこのガシヤグラが相手になるだろうが精々頑張るといい。ガシヤグラ、行こうか」

ガシヤグラ

「なんやワシがワレの子分みたいな言い方やのうキシタル、まあええわ。ハク言うたな、楽しかったでえ、次は遠慮なく殺したるさかい覚悟しとけや」

そうして2人はその場を後にする

ハクも強化の術を解き元の姿に戻っていった

クオンとアトウイがハクに駆け寄る

クオン

「ハク、一つ聞かせて、キシタルと何があったのかな?」

アトウイ

「そうやなあ、どうもきつきの事がなかったみたいなやりとりに見えたえ」

この2人には隠せないと判断したハクはキシタルと話した内容について語った

クオン

「確かに、味方であるのは心強いけどこれを知ってしまうと相手にキシタルの裏切りが  
バレる可能性が高まるかな。隠し事されたのは少し腹立たしいけど」

アトウイ

「そうやなあ、確かに知ってしまうとやり辛いえ。他の皆にはまだ敵として認識しても  
ろたほうがええかもなあ」

2人も納得(?) してくれたようだ

ハク

「では戻るか、さすがに疲れたな」

3人は結界に戻りハクはそのまま自室に戻り休んだ

クオン、アトウイは動けなくなるまで特訓に励んでいたそうだ

## キシタル

キシタルはガシヤグラと共にオーツの拠点へと戻っていた

ガシヤグラ

「ほならワシは報告にいくさかい失礼するで、例の話、忘れるなやキシタル」

キシタル

「了解だ」

キシタルは例の結界の場所を他の連中に知られたくなかったため今回の任務は収獲なしにする方向でガシヤグラを説得していた、ガシヤグラからしてもハクを他の者にとられたくないためこの提案は非常にありがたいものだった

ガシヤグラ

「ワレはお上に忠実なやつや思ってたが、案外話がわかるやつちやのう」

キシタル

「次は必ず仕留めてもらうぞ、できないならば、分かつているな」

あくまでハク達を敵として降るわまなければいけない

キシタル

「報告は貴様が行うがくれぐれもヘマをしてくれるなよ、俺が行かなければならなくなるのは勘弁してもらおうぞ」

ガシヤグラ

「わかっとなるわい、しつこいのう」

そうして別行動をとる2人だった

???

「あれー、キシタルじゃん。戻ってきたんだ、回復してから巡回とか相変わらず真面目だね」

女のオーツらしく見た目は少女のように若い

キシタル

「チーか、お前達7人はあのお方の守護役だろう、こんなところで何をしている?」

チー

「今回は収穫なしなのか聞きたくてさ、前聞いた時、ハクだっけ?ちよつと気になってさ、ママもなんだかあれから落ち着かないみたいだし」

キシタル

「そういえば貴様も身内の獣がいたな、俺のはやつにやられたゆえもういないが」

チー

「そうだったね、まあこんな姿だからねえ。家族じゃなかったらさつきと吸収してるところだよ。なぜかパパはいなかったからあの災害を回避できたってことかなあ」

キシタル

「さあな、今回は収穫は無しだ。気になるなら次の巡回にでもくるか？」

このチーはキシタルより強い7人のうちの1人

そんなやつを連れていけば今のハク達ならば手も足も出ないだろうが、キシタルはチー達7人は総大将の守護があるため離れられない事を知っていた

チー

「守護任務がなければね、喜んでついて行くけどね。ただそのハクって人、キシタルと同じくらい強いんでしょ？下にいる連中全員やられたら会えるんじゃない？下の連中にやられるくらいのもやつなら興味もないし。ね？ママ」

チーが獣型を撫でている

キシタル

「意地悪な誘いだったか、だがさすがにお前達7人のところまでは来れまい。」

チー

「そうかな？バムナー達もいなくなったから何かしら予兆がある気がするんだよね。まあいつか、じゃあ私はカレーでも食べてくるよ。材料は毎回あの人から出してもらえ

るから助かってるんだ〜」

キシタル

「あの者も本来は戦闘要員だから返してもらえると助かるのだが？」

チー

「だーめ、カレーがなくなるのは困るの。他の守護の皆も助かってるんだから諦めなさい」

キシタル

「ふう、仕方あるまい。それでは次の巡回のため連れていく面子を編成しなければいけないので失礼する」

チー

「うんまたねー」

キシタルがその場を離れる

???

「どうだ？」

チー

「うん、特に怪しいところはないかな。まあ何を企んでも問題ないんじゃない？」  
???

「そうだな、まあ違和感を感じただけだからな。何もなければいい」

キシタルは自室に戻った後大量に汗をかいていた

キシタル

「はあ、はあ、あの気配、やつがいたか。危ないとこだった。だが、舐めるなよ、この程度でボロを出してたまるか」

問題はガシヤグラの方、キシタルはそれを気にしていた

だが後にガシヤグラから聞いた話では特に何も聞かれなかったそうだ

キシタル

「、、何も聞かれなかった、か。少し慎重になる必要があるな。泳がされている可能性が高い、」

編成にはガシヤグラを入れる必要がある、前回の戦いは想定外だったが仮にハクがガシヤグラを倒せばハクはさらに強くなる。

キシタル

「弟の鱗はやつが持っているのだろうか、ガシヤグラのも足せば下位オーツ程度ならば相手になるまい。ハクよ、ガシヤグラとの決戦、必ず制してもらおうぞ」

場所は変わりハクサイド

ハク

「黒札はあと2枚か、あれから1週間になるが2人共、短期間にもかかわらずだいぶ強く  
なっていないか？」

クオン

「もう、、だめ、かな、しばらく、、動けないかも、」

アトウイ

「、、おにーさん、うち、無理」

2人共この1週間かなり気合が入っていたのか想像を絶するほどの特訓を経た結果、  
強くはなったが今は一歩も動けないと言った感じだった

ハク

「今日は休め、明日は皆に招集をかける。向こうでもあまり無理はするなよ」  
そう言うのと2人を抱え部屋に戻した

クオン

「ハク、ありがとう、」

アトウイ

「すぴー、すぴー」

ハク

「こちらこそ特訓に付き合ってもらったんだ、ありがとうな」



クオン

「必ず、力になってみせるから、必ず、すう、すう」

ハク

「おやすみ、2人共」

ハクは2人を起こさないよう部屋を出た

ハク

「いい加減出禁にするぞ先代、」

ハクオロ

「そう邪険にするな、今回はちゃんと非番だ」

ハク

「そう言う問題でもないんだが、まあいい、オーツについて話せばいいのだろう」

ハクは新しく得た情報を話してハクオロを強制帰還させたのだった

## 生者のため

死者の国

そこにはオシユトルを始め死んだ者達が勢揃いしていた

ライコウ

ヴライ

ウオシス

シチーリヤ

シヤスリカ

ラヴェイエ

リヴェルニ

マロロ

さらには先の帝、ホノカ

無論死者はさらにいるがここにいてる11人にはある目的があつた

ハクを助ける事である

帝

「さて、集まったの」

一同

「ハッ!!」

帝

「そう畏まらんでもよい、余はもう其方らと同胞であるからの」

ライコウ

「いえ、例えそうであっても我等の忠誠心は変わりませぬ。どうかご理解いただきたく」

帝

「まあよい、その忠誠心ありがたく受け取るとしよう。してライコウよ、例の件、何か掴めたかの？」

ライコウ

「ハッ、お察しの通りでございました。オーツとやらの妨害を受けているゆえの制限、そう見て間違いないかと」

帝

「やはりか、オシユトルよ、其方の進言、確かであったか」

オシユトルはハクからあの場に死者が行けるのは一回きりと言われて疑問に思っていた、しかも理由がわからないときた。オシユトルは何か裏があるのでと帝に相談を

持ちかけていた

帝

「あの場は生者と死者の境界が曖昧にもかかわらず我等死者が向かうにはかなり条件が厳しかったからのう、調べておいて正解じゃった、ライコウよ、場所の特定を頼む。ウオシスも頼めるかの？」

そうしてライコウ、ウオシスはオーツの場所特定に向かう

帝

「オシユトル、ヴライよ、其方らはやつらの場所がわかり次第向かってもらう、よいな」

オシユトル、ヴライ

「御意」

その場は解散となった

オシユトル

「やつと、助けに向かえるぜアンちゃん、ネコネ」

帝

「まったく余の弟でありながら世話がやけるのう。しかも何人嫁にする気じゃあやつは。羨ましい」

そう言いながらオシユトルに近づくと帝とホノカ

ホノカ

「我が君、あなた様も昔はかなり側室を抱えていたではありませんか。このホノカ、忘れてはいませんよ」

帝

「ほつ、そうじやったかの。よく覚えておらんのう。それはそうとオシユトルよ、其方はよいのか？妹をあやつの嫁になど」

オシユトル

「ふふ、それもあの男の魅力なのでしよう。某は反対どころか賛成でございます。母上も喜ぶかと」

帝

「まああやつは嫁を何人にしようが真面目ではあるからの。ちゃんと全員を平等に愛する事じやろう」

オシユトル

「ええ、それよりハクが貴方の弟君である事を知った時は驚きを隠せませんでした。何かある男とは思っていましたが」

帝

「まあ驚くのは無理もなからう、数百年ぶりに見つかったと聞いた時は余も信じられな

んだ。」

オシユトル

「冷凍睡眠とか言うやつでしたか？我々には信じられない技術ですが」

帝

「過去の傲慢な技術じゃよ。それゆえにオンヴィタイカヤンは滅んだ。さて、それはさておき今回の作戦が成功すればいいよあやつらと共闘する事ができる、お主は今生の別れをしてしまったゆえ気まずいかもしれんがの」

オシユトル

「まあ少しは気まずいですが、それよりもハクや妹を助けてやれる、そう思うと嬉しい気持ちの方が勝ちますな。」

帝

「ふむ、ではなんとしても今回のオーツ討伐戦、勝ってもらおうぞ。お主とヴライであれば勝てると思っておる」

オシユトル

「必ずや勝利してみせましょう、なあヴライよ」

ヴライが近づいてくる

ヴライ

「言われるまでもない、聖上、必ずや勝利を持ち帰ります。」

そうして誓う2人

しばらくすると、

ライコウ

「此度のオーツ、我々の妨害をしているのは2人だ。場所の特定は済ませてある。オシュトル、ヴライ、かなりの強敵だが必ず倒せ。敗北は許されぬゆえ俺の指示には従つてもらうぞ」

ヴライはあからさまに必要なと言いたげであったが作戦の重要性は理解しているため渋々納得していた

そうしてオシュトル、ヴライはオーツのいる場へ向かいオーツとの戦いが始まった

かなり苦戦を強いられているオシュトルとヴライ、どちらが勝つかわからないほど戦いは苛烈なものであった

勝敗を分けたのはライコウの作戦だった。

咄嗟にオシュトルとヴライは戦う相手を変え狼狽えるオーツに致命的な攻撃を加えたのだ

ヴライ

「ふん、中々に楽しめたぞ。本来なら心ゆくまで戦いたかったがこれもまた戦よ。」

オシユトル

「はあ、はあ、これがオーツか。アンちゃんよ、とんでもねえ連中を相手にしてんな。」  
なんとかオーツを倒す事に成功した2人

ライコウ

「これで厄介な妨害も消えるであろう、後はハクとやらがこの事に気付けるかどうかだな。」

そう、あくまで呼ばなければ行く事はできない

だがその懸念は杞憂に終わった

ハクサイド

ハク

「これは、、どういう事だ、」

クオン

「どうかしたかなハク？」

ハク

「いや、死者の呼び出し、その条件がかなり緩和されたようだ。」

アトウイ

「ん？どういことえ？」



ハク

「以前オシユトルを呼び出した時、二度と呼べないと言った事を覚えてるか？それが緩和された事により可能になっている、なぜだ、」

クオン

「何かしら妨害を受けていたとか？それを死者側が解決したとかなら理屈は通るけどどうかな？」

ハク

「可能性としては充分ありえるな。ちようど招集をかけるところだ、可能なら呼んでみるか、」

## 死者と生者

ハク

「さて、集まったか」

ハクは皆を集め特訓の経過を聞いていた

アンジユ

「さてハクよ、約束通り特訓の成果見てもらおうかの」

ワクワクを隠せないアンジユであったが

ハク

「ああ、すまない。今回は少し皆に報告しておきたい事がある、場合によつてはこの件だけで今回は終わるだろうからその件は次回にしてもらえると助かる」

アンジユが少し不機嫌になる、が

ハクからの報告を聞くと先の件はすでに頭になかった

ネコネ

「そ、それではまた兄様、に？」

ネコネはあからさまに動揺している。

ハク

「うむ、あれだけ最後の別れっぽくしといてなんだが、おそらく可能だ。気付いたのはつい先程でな、皆を集めた後に呼ぶ事にしていた。」

オウギ

「なるほど、ですがいきなり緩和されたと言うのが気になりますね」

ハク

「そうだな、そこらへんも含めオシユトルに聞いてみようではないか。では、始めるぞ」  
ハクが何か呪文のようなものを唱え始める、ウルウル、サラアナが何か手伝っているようだ

ヤクトワルト

「しかしまあなんだ。どんどん現実離れしてきたじゃない。そこに居合わせている自分も自分だが」

キウル

「そうですね、ですが今回は良い現実離れですね。また兄上に会えるのですから」

そう話していると

ハク

「よし、来るぞ、ん？いやまて！呼んだのはオシユトルだけだぞ！なんだこの人数は

!？」

そしてそこに現れた人数は総勢11人、皆知っている面子であった

アンジュ

「あ、あ、」

ムネチカ

「まさかつ！」

アンジュ

「父上、なのですね、」

帝

「ほっ、アンジュ、大きくなったのう。見てみよホノカ、あのアンジュがこんなにも」

ホノカ

「ええ、ええ、本当に、立派になりました」

アンジュ

「ホノカも、ああ、っ」

アンジュが2人に駆け寄る

アンジュ

「父上!!父上!!」

帝

「アンジュよ、父は謝らねばならんな。其方には秘密にしてきた事が多すぎた。じゃが余は、」

アンジュ

「よいのです、よいのです。事情はもうわかっております。アンジュは、幸せ者です。」

帝

「そうか、わかってもらえるのか。ありがとうアンジュ」

アンジュ

「はい、そしてホノカ。いや母上、アンジュは貴女の娘である事も誇りに思っています。余の母上でいてくれて、ありがとう」

ホノカ

「、っ！」

ホノカは何も言わずアンジュを抱きしめた

そして

アンジュ

「、ウオシス、」

ウオシス

「私の事は気にしないでくれ、存分に親子の再会を堪能するといい」

アンジユ

「何を言うか、兄上。余はもう其方を兄として受け入れているのだぞ？」

ウオシス

「なつ、!?!しかし私は、」

アンジユ

「なぐにを過去の事でいじいじしとるのじゃ、ほれ叔父ちゃんもおるぞ？」

そう言いながらハクを引っ張るアンジユ

ハク

「叔父ちゃん言うな、なんならウオシスとはそこまで歳は離れていない」

ウオシス

「ハク、さん」

ハク

「もう反省したのであろう？顔を見ればわかる、ならば何も言わんよ」

ウオシスは涙を流しながらハクとアンジユに感謝していた

ハク

「さて、」

ライコウ

「ふん、まさか貴様に負けていたとはな。死者の国でオシユトルが先にいたのは驚きであつた。俺の負けは貴様の正体に気付けずに行ったからかもしれないな、いや、それもまた、言い訳か。なあヴライよ」

ヴライ

「ハクと言つたか、貴様もまた我が宿敵よ。死す時がくれはまた戦おうぞ。それまでは協力してやる。」

ハク

「やれやれ、味方になればこんなにも心強いとはな。ライコウ、ヴライ、頼りにしている」

ハクはその場を離れオシユトルとマロの元に向かう

ハク

「さて、また会えるとはな。オシユトル」

オシユトル

「そうだな、まああれからアンちゃんに言われた事が気になつてな、こつちでもいろいろやつてたんだぜ？」

オシユトルはこの場に来れるようになった経緯を話す

ハク

「オーツの妨害、そうだったのか。2人倒したと言ったか？ならば残りは29人。よく倒せたな、いやお前とヴライならば当然か」

オシユトル

「かなり強かったがな。ライコウの策がなければどうなっていたか」

ネコネ

「兄様、兄様はこれからも会えるですか？」

オシユトル

「ああ、だがネコネ、忘れちゃいけない。俺は死者だ、この戦いが終わればそこが本当のお別れの時だ」

ネコネ

「はい、わかってるです。その後は私が死んでから会いに行くですよ。おばあちゃんの姿で」

オシユトル

「はは、そいつはいい。アンちゃんよ、可愛い妹を嫁にしてるんだ、ちゃんと幸せにしてやってくれよ？」

ハク

「やれやれ、そこらへんもすでに分かっているのか。任せておけ」



マロロ

「ハク殿はモテモテでおじやるなあ、さすがはマロの心の友でおじや」

ハク

「マロも随分久しぶりだ、まったく自分を庇ってぽっくり逝きやがって。だがまあ、礼を言えてなかったからな。ありがとう。あの時は助かったよ」

マロロ

「マロは随分罪を重ねたでおじやるからなあ。生きていたとしても一生牢獄の中だったかもしれないからおじやるし、友のため死ねたのなら本望でおじやるよ。」

ハク

「そうか、自分が死んだらまた一緒に飲みに行くぞ。今度こそ奢ってもらおうからな」

マロロ

「まだまだ先の話でおじや、ハク殿にはまだまだ生きて欲しいでおじやるよ」

ハク

「もちろんだ、嫁達を泣かせるわけにもいかんからな。」

皆それぞれ再会を喜んでいた

ハク

「ライコウよ、すまんミカツチは、」

ライコウ

「わかっている。あの愚弟にしては頑張ったほうだ、責めるつもりはない。だがまあ一度は連れてこい、少しくらいは話すこともある」

ハク

「ああ、次はそうしよう。」

ライコウ

「ハクよ、貴様は戦において偶然にも助けられたが俺に勝った男だ。聞こう、勝算はあるか？俺にはまだ勝ち口が見えん」

ハク

「どうだろうな。未知数な部分が未だ多すぎる、だがお前達が来てくれた。だからこそ言おう、必ず勝つと」

ライコウ

「そうやって貴様は勝ち進んで来たと言うことか、いいだろう、答えにはなっていないが納得してやる。そして聖上のためだけではなく俺の意思で貴様に味方しよう」

ハク

「ああ、感謝する」

そして皆の再会の熱がようやく冷めたところで今後について語るのだった

# ハク対オシユトル

ハク

「さて、皆各々再会の挨拶はすませたか？自分もまさかオシユトル以外にここまでの面子が来るとは予想外だった」

帝

「ほっほっ、お前が不甲斐ないゆえに出しやばらせてもらったまでよ」

オシユトル

「ま、この戦いが終わるまでだがな。俺たちはすでに死者ゆえさらに死ぬとなるともう魂すら残らねえからな、そこんとこ、頼むぜアンちゃん」

ハク

「ああ、わかっている。とりわけ死者達は士気を高めるのにもすでにじゆうぶん過ぎるほど助けてもらっている。基本的な戦いは我々生者に任せてもらおう、だがオシユトル、ヴライには戦いに参戦してもらいたい。お前達の武力が加わるとだいたいぶ助かる、だが危ないと思えば下がらせる。よいな？」

ヴライ

「ふん、魂砕けようとも我は構わぬがな。戦の中で果てるなら本望よ」

ハク

「ああ、お前はそういう類の誇り高き武人なのは理解している。伊達にお前と戦つてきたわけではないからな。だがこの戦では果ててくれるな。自分がいつかそちらに赴く時、お前に再び挑むつもりだ、オシュトルとしてではなく、ハクとしてな」

ヴライ

「ほう、吠えたな。よかろう、此度の戦は貴様に従つてやろう。その言葉、違えるでないぞ」

ライコウ

（なるほど、うまいな。此度の戦、いくら帝の命とはいえヴライを心から動かすほどのものではなかった。それをあそこまで容易く乗せてくるか、くくく、なるほど、俺が負けるのも納得できよう）

シチーリヤ

「ライコウ様、嬉しそうですぞございますね」

ライコウ

「シチーリヤよ、机上でどれだけ考えてもハクのように人心を掴むことはできません。人心を掴むには己が戦いに赴く必要があつたのだ、それは采配師であれ将であれ、な。俺に

は無かったものだ。死してからそれを目の当たりにするとはな、勝てぬわけよ」

シチーリヤ

「ライコウ様、」

そしてハクは一息つく

ハク

「まあ戦が始まるのはもう少し先だ、今は皆さらなる強さを求めて特訓中であるからな。準備が出来次第また集まってもらおう。まあ少々本番以外に小競り合いが発生する可能性もあるがな」

オシユトル

「なあアンちゃん？特訓と言うなら、一度俺とどうだい？」

ハク

「、、構わんが、お前相手となるとあまり手加減してやれんぞ」

オシユトル

「言うねえ、確かに今のアンちゃんは少し反則気味の強さだろうが簡単には負けてやらねーぜ？」

そうして2人は場所を移した

もちろん他の皆も一緒に

ネコネ

「ああ、兄様達が、」

ネコネがあたふたしている、2人の兄が特訓とは言え戦うのが心配でならないのだから、

クオン

「ネコネ、大丈夫かな。特訓なわけだから2人共無茶はしないだろうし」

ネコネ

「そ、それはそうなのですが、で、でも兄様は強すぎるのです、今の兄様では兄様に、あ、あれ？」

クオン

「ふふ、ややこしくなっちゃうね。こんな時は妻の立場を使って名前を呼んであげるのもいいんじゃないかな？」

ネコネ

「ハク、さん、」

昔は普通に呼んでいたはずなのに今は無性に恥ずかしく感じるネコネ

クオン

「ふふ、徐々に慣れていけばいいかな。あつ、そろそろだよ」

ハクとオシユトルが構える、ハクはウルウル、サラアナにより例の強化を受けていたオシユトル

「まったく、すげえ威圧感だな、これは、某も本気にならざるをえまい」

ハク

「それでいい、卑怯と思うかもしれないがこれが今自分達が直面している壁だ。いくぞ、」  
そして2人の戦いが始まった

やはりハクがかなり押ししている展開になる、だがオシユトルもかろうじてついて行っている。

オシユトル

「ぐっ、やはりこのままでは押し切られるか!!」

ハク

「気付いていないとでも思うか?あるのだろうか?アレが」

オシユトル

「ふっ、やはり気付いていたか」

そう言うや否やオシユトルは懐からある物を取り出した、仮面である

ハク

「やはり、兄貴に作ってもらったか。おそらく問題点は改善されているのだろうか」

ネコネ

「あ、どうして、」

帝

「死者ではあるが我々には更なる死がある。魂の消滅とも言える最後の死が。だが心配せずともよい、あの仮面は力を使っても命を摩耗させる機能はない。アクルトウル力にはなれぬがな、ムネチカのような使い方ならば充分できる代物じゃよ」

オシユトル

「さて、これで」

カチャ

ハク

「懐かしいな、オシユトルとして生きていた頃を思い出す」

オシユトル

「ふ、だいぶ重荷を背負わせてしまったな。ライコウから、そしてウオシスから聞いている。だが、」

ハク

「ああ、今は置いとくとしよう。ゆくぞ、」

そして再び始まる2人の戦い



帝

「しかし、これでも届くまい、今のあやつには」

ライコウ

「この世界だからこそ、か、だが此度の戦では有効、ということか」

ハク

「はあ、はあ、勝つには勝ったが、」

ハクの姿が元に戻る

オシユトル

「見事、完敗、だな」

ハク

「神相手にどこまで食い下がる気だよ、マジで危なかったじゃないか」

オシユトル

「ふう、いやなに、強さに驕りがあるのではと思つてな、杞憂でよかつた」

ハク

「当たり前だ、本来ならお前やミカツチ、ヴライ相手に勝てるわけないんだからな」

マロロ

「しかしあのハク殿がここまで、マロは感激でおじゃ〜!!」

ハク

「さて、戻るとするか。今後の方針を決めなきゃならんしな」

## ハクとオシユトルとネコネ

一同は結界に戻りオシユトルを除く死者は先に帰っていた、生者もまたネコネ、ルルティエ以外はすでに帰っていた

ルルティエ

「では私は少し外しますね、失礼します」

ルルティエが気をきかせその場を後にする

ハク

「この3人でゆっくり話し合った事は言うほどなかったな。オシユトルとは飲んだり任務だったりで、ネコネとはオシユトルとして活動していた時にだったりで個人個人とはだいぶ接してきたが」

オシユトル

「そうだったな、しかしまあ力が必要かと思つて仮面を渡したが、俺として生きるとはな。迷惑かけちゃったか、すまねえな」

ライコウやウオシスからの話を聞いたオシユトルはハクがそこまでしていた事に驚き少々悔いていた

オシュトル

「必然的にハク個人は死んだ事にしなければならぬ、そりゃクオンの嬢ちゃんもそうなるか、」

ネコネ

「兄様が死んだ後ハクさんが必死で考えてたですよ、そこで自分は今からオシュトルになる、ハクが死んだ事にする。辛いだろぅが付き合ってくれって、私も同じ考えでしたが、姉様や皆を裏切る事になると思うと、言い出せなかつたです」

ハク

「お前自身どう思ってるかは知らんが右近衛大将の地位はなんとしてもあの戦では必要だったからな。ハクとして指揮なんぞしてればまあ勝てなかつただろうな」

オシュトル

「む、それも、そうか。しかしそれでもアクルトウルカになる回数が多かつたと聞いた。先の帝から聞いたぜ、本来なら俺達ですら3割しか力を引き出せないのにオンヴィタイカヤンのアンちゃんなら10割、力の全てを引きだせるそうじゃねえか、そんな事すりゃ俺達より早く限界が来ちゃうのも当然だ」

ネコネ

「そ、そうだったのですか？あ、兄様！どうして言わなかつたのですか!？」

ネコネが怒りだした

ハク

「これでも必要だと思つた時に使つてたんだがな」

ネコネ

「オムチャツコでのミカツチ様との戦いは避けられたと思うです。しかも終盤は何やら楽しんでおいでのようでしたが？」

ネコネは忘れてないと言わんばかりにハクに詰め寄る

ハク

「あー、そんな事もあつたかな、」

オシユトル

「はっはっは、アンちゃんも武人だったのかねえ。だが確かに避けられるなら避けるべきだったかもしれねえな。俺でもアクルトウルカから戻つた時のあの感覚は慣れたもんじゃなかつた。押し付けといてあれだがな」

ネコネ

「私の責任もそれはありますけど、それでも兄様達が離れて行くのは悲しかったのです、」

ハクとオシユトルがやってしまったと言わんばかりの顔をする

オシユトル

「あー、ネコネ、少し提案があるんだが？」

ネコネ

「なんなのです兄様？」

オシユトル

「兄の座はアンちゃんに譲つちまつたからな、妻になつたとは言え中々呼びづらいだろう？俺もこの戦が終わるまでしかいれねえ、アンちゃん呼び方が統一されず変なクセがついてもあれだろう？だから今後俺の事は名前で呼んじやくれねーか？」

ハク

「おいおい、本来ならそれは自分が、」

オシユトル

「いや、すでに死者である以上俺が背負うべきもんだ」

ネコネ

「、、わかりましたですよ。ただしお二人がごつちやにならないためなのでオにーさまと呼ばせていただくです」

ハクとオシユトルはそう来たかといったような顔をして笑い出す

オシユトル

「そりやいいな、ああ、そうしてくれ。ほんと、自慢の妹だよ」

ネコネ

「そこであの、兄様とオにーさまに相談があるのですが、」

ハク、オシユトル

「ん？」

ネコネ

「ごんな、大変な時にわがままなのはわかってます、ですが、これを逃すと二度と叶わないのです、だから、母様と、4人で、食事がしたいのです」

ハク

「なるほど、確かにこの機会を逃すと二度と叶わない、か」

ハクは兄が帰る前に言われていた事を思い出す

帝

「ハクよ、お前は現界すればその力は失われよう。戦の事は最優先かもしれない。だがその力が戦以外で役に立てるなら今のうちにやっておく事じゃ。余は其方に、アンジュに再び会えた。そういう限られた再会の機会、可能な限りやってみるのもお主の役目じゃよ」

確かにそうだ、本来の役目はそっちのはずだからな

ハク

「ふむ、」

オシュトル

「アンちゃん、どうだい？」

ハク

「問題はないだろう、ミカツチとライコウを会わせる約束もしている。ネコネ、エンナカ  
ムイまで向かうのは手間がかかるが？」

ネコネ

「も、問題ないのです!!それじゃ兄様!？」

ハク

「ああ、任せたぞ、だがそうになるとネコネは今回は戻る事になるな」

ネコネ

「ルルティエ様が残っているならシス様に声をかけとくですよ、私は戻ったら聖上に事  
情を説明してエンナカムイに向かうです。あ、でも勾玉は誰かのを拝借しなければな  
らないですね、」

ハク

「ふむ、とりあえずシノノンのを借りたらどうだ？次回はさほど戦に関するものにな



いつもりだしな、特に誰のを借りても問題はないだろうが」

大まかな段取りを決めネコネは戻っていった

オシユトル

「母上、か、ずいぶん会っていないな、」

ハク

「そうだな、さて、そろそろお開きにするか。次は4人で、だな」

オシユトル

「ああ、それじゃまたな」

オシユトルもまた満足そうに戻っていった

遠くから見ていたルルティエが寄ってくる

ルルティエ

「ネコネ様まで帰られたようですが何があったのでしょうか？」

ハクは事の経緯を説明した

ルルティエ

「そうですか、それは楽しみですですね。と言う事はお姉様が来られるのですね」

ハク

「ああ、そのはずだ。早速呼びかけが来たな、転移させるとするか」

ハクが呼びかけに応じてその者を転移させた、のだが

フミルイル

「うふふ、御機嫌ようハク様、ルルティエ様」

ルルティエ

「フミルイル様？お姉様ではなかったのですか？」

ハク

「い、いや自分にも訳がわからないのだが、」

フミルイル

「何やらネコネさんがいろいろ探し回っていたようなのですが誰も見つからなかったそう、私も皆さん同様妻にしてもらおうと思つてネコネさんに話したら喜んで承諾してくれたので♪」

ハク

（待て待て待て待て待て待て、1番予想外の展開で思考が定まらない!!要はあれか?これを受け入れるのか自分は!?)

ルルティエ

「そうでしたか、それならばこれからよろしくお願いしますねフミルイル様」

ハク

(ルルテイエ順応早すぎ!!自分がおかしいのか!?今度クオンに話を聞くしかないが、おそらく拒否権はないのだろうな、しかしこの2人とは、)

いきなりのファミイル登場で慌てるハク

しかしなす術などあるわけもないので早々に諦めまた1人妻を増やす事に

ハク

(はは、、ハーレムとはよく言ったもんだな、)

## 休日と旅

ハク

「やれやれ、すごかったな、あの2人は、」

フミルイルすらも妻に迎えこれに双子も加えれば10人になる、まさかの二桁、ハクは少し恐怖すら覚えていた

ハク

「現界しても大変そうだな、ほんと、のんびんだらりとしたものだ、月見酒でもできれば言うことなしたが」

そんな暇すらあるのだろうかと心配になる

フミルイル

「ハク様、おはようございます。昨夜はありがとうございますね、これでクーちゃんと同じです」

他の者とは少し目的が違うようにも思えるフミルイル

ハク

「しかしフミルイル殿、クオンと同じがいいと言うのは分からなくてもないが夫まで同じ

とはズレてはいないか？」

ありえん話ではあるがこういう関係は本来喧嘩しないための妥協案みたいなもの  
はず、つまりハクの取り合いを避けるためなのだが、フミルイルはそうではない気がし  
ていた

フミルイル

「そうですか？くーちゃんの選んだ殿方なら間違いはないですから、それに、私もちゃん  
とハク様を見てきましたよ。だから全部が全部くーちゃんだからってわけでもありま  
せん。くーちゃんを助けるために死地から帰ってきたあの姿は、誰でもときめいちゃ  
いますから♪」

ハク

「む、確かに、少しカッコをつけすぎたか、あれは」

そう話をしているとルルティエが合流してきた

ルルティエ

「おはようございますハク様、フミルイル様。お茶をお持ちしました、どうぞ」

ハク

「ああ、ありがとうルルティエ。朝からすまないな」

ルルティエ

「いえ、巡回がない以上私に出来る事は多くはないので」

相変わらずそういうところはルルティエらしいとハクは笑みをこぼす

ハク

「ふう、こうやって茶をすすりながらゆつくるする日も悪くはないな。まあ、この後にまだ勾玉の仕事があるが」

フミルイル

「その事ですがハク様、その仕事、私に任せてはいただけませんか？」

ハク

「フミルイル殿が？いや、しかし、」

ハクは瞬時に気付く

ハク

「なるほど、其方なら、できるのか」

フミルイル

「はい♪」

ハク

「しかし自分ならいざ知らず人があれをやると相当疲れるであろう、あまり無理は、」

フミルイル

「そう仰るだろうと思いい今回はルルティエ様に手伝ってもらおうと思ってます」  
ルルティエ

「私ができますか？何かできることがあるのでしょうか？」

ファミルイルはルルティエに手伝って欲しい内容を話す

ルルティエ

「それならばやれそうです、どうかよろしくお願いします」

ファミルイル

「というわけでハク様、よろしいでしょうか？」

ハク

「そうだな、そこまで言うなら頼もう、しかしそうになると自分は暇になるな、どうしたも  
のか」

ファミルイル

「ハク様は少し働きすぎかと思われ、戦では先陣を切り、指揮もなさり、特訓もかな  
り過酷なもの、それが終われば勾玉に私達妻の相手、少しくらい休んでも問題ないかと  
思いますよ」

ハク

「しかしだな、」

ルルテイエ

「ハク様、どうか久しぶりにゆっくりなさってください、どうか」  
ルルテイエが必死に休ませようとしてくる

ハク

「そうか、わかった。其方らがくれた休日と言うことだな。ありがたく休ませていただく」

2人はそれを聞くと満足した顔で仕事をしにいった

ハク

「静かなものだ、いっぶりだろうな、こんなゆっくりできるのは」

ハクは1人になり酒を取り出していた

ハク

「月見酒とはいかんが静かに1人で飲むのも悪くはないな」

ハクには少し気になる事があった

ハク

(兄貴とホノカさんが来てくれた、頼もしい限りだが、なんだこの違和感は、)もちろん2人が来てくれた事は嬉しい、ただ会えるだけでもだ。

だが違和感が抜けない、何かを見落としているような、



ハク

(やめよう、せつかくあの2人がくれた時間だ、楽しまなければな)

いつかは辿り着かなければならない違和感の正体だが、どうしてもそれは今ではない、そんな気がしたハクであつた

變わつて現実世界

ネコネ

「まあよく追いついて来ましたですね、姉様、アトウイさん、ノスリさん」

ネコネは早々にエンナカムイに向かつていたがしばらくするとクオン、アトウイ、ノスリが追いついてきていた

クオン

「あはは、久しぶりにあのお風呂に入りたいたいかなうって、後皆同じ気持ちなのかな、エンナカムイはオシユトルとして生きたハクとの思い出がたくさんあるから」

アトウイ

「そっやなあ、後はまあいつ呼び出されるかわからんならネコヤんも特訓相手がいるえ。だから、な？」

ノスリ

「そういうことだ、私達はもう家族だからな。一緒にいたいのだ」

ネコネ

「ありがたいのですよ皆さん、それであの、次は家族で過ごすのが目的ですので残るのは、私と母様にしてほしいのです、よろしいですか？」

クオン

「もちろん、存分に楽しんでくるといいかな。それにしてもファミイル、やっぱりハク  
の事、」

アトウイ

「まあ仕方ないえ、クオンはんは見れなかつたかもやけどなあ？クオンはんを助けるために現れたおにーさんのあの背中、あれはもう女である以上は抗えへんくらいやったんよ」

ノスリ、ネコネ

「うんうん」

クオン

「そ、そんなにかツコよかつたの!?!うう、私の知らないハクが皆知ってるなんて、」

ネコネ

「まあそれはともかく皆さん、兄様が現界された時の兄様の住まいは考えてあるですか？」

三人は考えてなかったと言った顔をしている  
ネコネ

「単純に考えて、今から向かうエンナカムイ、姉様が正妻ですからトウスクルもそうですね、後は聖上の叔父であることから帝都もです」

クオン

「あまり行き来させすぎるとも良くないかな、一応トウスクルにも住まいは用意させるけど一番落ちつくのはやっぱりエンナカムイじゃないかな、ネコネのお母様も喜ぶだろうし、トウスクルや帝都だとまた余計な仕事させられるだろうから」

アトウイ

「そうやなあ、帝都ならありがたいけどやっぱエンナカムイが一番やろうなあ。こんなと八柱の立場が邪魔になるなあ、勝手に辞めるなんてできんしなあ」

クオン

「アトウイってほんとに大人になったかな、昔ならすぐ辞めてたはずなのに」

アトウイ

「うーん、そうやなあ。おにーさんが塩になった時な、ほんとクオンはんみたいにしてあげが嫌になる気分やったんよ。ウチは何の力もなれんかったって、今までそんな気持ちになったことなくて、それでおにーさんが戻ってきて、ノスリはんとしばらく旅して、ク

オンはんからおにーさんがマシロ様としてタタリを浄化してるって聞いた」

ノスリ

「そうだったな、それでただ旅をして探すだけでは無理だと思って帝都に戻ったんだっ  
たな」

アトウイ

「八柱としてさらに力をつけて、将としても成長せなおにーさんと釣り合わんえ？だから必死で勉強もして力もつけたんよ、気づいたら気持ちの変化言うんかな？知り合いか？死ぬのが何より怖くなってな、皆守りたくなってきたと言うか、とと様は別に死んでも気にならんけど」

ノスリ

「そこは気にならんのか、哀れなりソヤンケクル殿」

ネコネ

「聞き及んでいるですよ、今やアトウイさんは八柱将としてもはや仮面をつけたムネチ  
カ様にも引けを取らないと、八柱最強とも言われてるです」

アトウイ

「あはは、恥ずかしいなあ、全部おにーさんのためにしてることやしなあ」

クオン

「皆ハクの事本気で好きだから頑張れるんだよね、あつ、、そろそろ見えてくるかな」

4人の目にはまだ遠いがエンナカムイの城門が見えてきた

クオン

「とりあえず着いたらお風呂にするかな、もう汗がべっちより、」

## 真実

ハク

「もはや強制的に帰すのも面倒になったな、昨日に続きフィルムが仕事を請け負って  
もらってはいいるが、」

毎度の事ながらハクオロがサボりに来ていた

ハクオロ

「私が提案した事とは言えバナウイの持ってくる仕事量は其方が考えているよりかなり  
多いのだよ、片付いたと思つたら倍の書簡を運んでくる、たまにはオボロにもやつても  
らわんとな」

ハク

「やれやれ、アンタの記憶は仮面を通して流れてきたが慕ってくれている弟分もかわい  
そうなものだ」

そんな他愛ない話をしていた時だった

ハク

「これは、」

キシタルがまた結界内に入ってきた事を察知する

ハク

「すまんな先代、少し情報を仕入れてくる。」

ハクはキシタルと秘密裏に相手の情報を仕入れている事を話す

ハクオロ

「よければ私も連れていってほくれないか？少しそのキシタルとやらと話してみたい」

会う時は1人だけと約束している事を話すが聞き入れてもらえずハクは念話によりキシタルに確認をとる

キシタル

「その男、もしかやアイスマンか？」

ハク

「!?、、、そうだが、」

キシタル

「いいだろう、連れてこい」

ハクはハクオロに会話の内容を伝えた

ハクオロ

「私を知っているか、研究員絡みかもしれないな」

行ってみないことには始まらない、2人はキシタルの元へ転移する

キシタル

「来たか、お前がハクオロ、素顔を見るのは初めてだな。仮面を付けていた頃しか知らないが、なるほど」

ハクオロ

「キシタル、と言ったか。人型とは言え姿形は人間とは少し違うのだなオーツとやらは」

お互いの顔を認識する

キシタル

「人の頃のままのオーツも存在するよ、俺は違うが。にしても、まさか再び話すことになるとはな。」

ハクオロ

「先程からの口調、やはり面識があるのか？悪いがその姿では検討もつかない。名前も聞き覚えがない」

キシタル

「くつくつく、それもそうだろう。姿形はもちろんオーツになった事で人の時より凶暴性が増しているからな、あの時の俺だとは想像もつかないだろう」



ハク

「もつたいぶるな、いい加減教えて欲しいもんだ。先代の記憶なら自分も知っているかな、話にはついていけない」

キシタル

「そうか、その仮面はほんとに多機能だな。そういった面での研究はしなかったから驚きだ。あまり人の頃の名は思い出したくもないが、俺の本来の名は、ミズシマと言う」

ハクオロ

「なっ!?!」

ハク

「ミズシマだど!?!先代が実験されていた頃の、!?!」

2人は驚きを隠せないでいた、なぜならハクオロを逃した際に死んでいてもおかしくないと思っていたからだ

キシタル

「処刑はされずにすんだのだがな、犯罪者は犯罪者だったので牢の中で暮らしていたよ、人類が液化化した時俺はすぐにわかったよ、アイスマンは捕らえられ、彼の逆鱗に触れたのだと、な」

ハクオロ

「そして、あなたも、ですか」

キシタル

「自分で言うのもあれだがな、強靱な意志とでも言うか、かの大神の呪いを食いつぶしてやったわ。だがそのせいか性格は見ての通りよ、弟は耐えきれずオーツにはなれなかつたがな」

ハク

「キステラ、か」

キシタル

「せつかくだったからな、名前も新しくつけてやった」

ハク

「しかしまあ、偶然なのか？これは」

キシタル

「どうだろうな、そこまでは俺にもわからん、。しかしそうだな、アイスマンがいるなら、話さねばならんか、」

キシタルは少し間を置き、静かに口を開く

キシタル

「我らが総大将、だが、オーツでは、ない」

ハク、ハクオロ

!!?

キシタル

「オーツとは元人間が呪いを受け、耐えた者だ。現存するのは俺を含む29人だな。内7人は総大将の守護をしている最強のオーツだ、だが総大将はこの29人に含まれない」

ハク

「つまり総大将は人間では、ない?、まさか」

キシタル

「そう、亜人だ。今現実世界で人として暮らしている存在と同じ、な」

ハクオロ

「だがそれならば、その者は倒さなくてもタタリの浄化には関係ないはず、タタリは人の成れの果てなのだから」

キシタル

「それがそうでもない、あの方は一度死んだ身だ。それをアイスマン、君があの時蘇らせたのだ。人の願いを歪んだ形で叶えた時に、彼女を生き返らせる事を、そして蘇った彼女は亜人である事を悔い、人になりたいと願った。人になった彼女の末路が、今の我ら

の総大将だ」

ハクオロ

「ま、まさか、」

キシタル

「そう、3510号、ミコト、それが総大将の名だ」

ハク

「なるほど、他のオーツとは経緯が違いすぎる、そしてその強靱な意志もおそらく桁違い、か」

ハクオロ

「本当に、私の過去は罪だらけだな、」

それを聞いたハクはハクオロの頭に手刀を入れる

ハクオロ

「ぐつ、!!お、親に向かって何をする!?!」

ハク

「アンタの罪も何もかも自分が継いだだろうが、背負うのは自分の仕事だ、アンタはもう現実世界で書簡に追われていればいいんだよ」

ハクオロ

「ハク、、、すまない。どうか、彼女を、頼む」

ハク

「それでいい、必ずなんとかしてやる。それが終われば今度は星に押し付けてやるんだからな」

キシタル

「くつくつくつ、不思議と説得力があるな貴様は。どこまで力になるかわからんが力が必要になった時に俺を殺せばいい。俺の力を使えるようになるからな」

ハクオロ

「ミズシマさん、、、」

キシタル

「キシタルだ、その名はもう捨てた。君がハクオロであるように、そいつがハクであるように、な」

ハク

「さて、少し長くなったな。あまりしんみりとするのもあれだからな。今日はもう解散だ。」

キシタル

「そうだな、近いうちにガシヤグラが邪魔すると思うが今度はちゃんと倒せ。ガシヤグ

ラの能力は単純に力を増幅させるものだからな、単純かつ便利だ。いいな、必ず倒せ」  
そう言うときシタルは去っていった

ハク達も結界に戻りハクオオロは現実世界に戻った

ハク

「キシタルは信用しても良いと言う事か。だが奴らを倒すのはあくまで自分達だ。特訓は続けなければな」

## ハク V S ヴライ

ヴライ

「ハクよ、特訓に付き合えい。汝が力この身で確かめさせてもらおうぞっ」

いきなりヴライからの呼び出し、嫌な予感は的中した

ハク

「お前、特訓と称して本気で殺るつもりだろ、」

ヴライ

「特訓とはさらに強くなるために行うものよ、そこに手を抜くなどありえぬ。死んだのならそこまで言ったと言うこと、それだけだ」

うん、これっぽっちも分からんと言ったような顔をするハク。

しかし特訓は必要であるため渋々であったがこれを受ける

オシユトル

「ヴライも仮面を授かっているからな、気を抜くと殺られるぜアンちゃん。俺も見届け人として注意して見ておくれ、基本的には自分でなんとかするこった」

またあの兄貴は、と言いながらヴライ、オシユトル、そしてルルティエ、ファミルイル

も一緒に特訓用の場所へと転移する

ここ数日心置きなく休めたおかげか体が軽い

ハク

「やはり休みも必要ということか、これならば」

ハクは自力で強化の術を使うことに成功する

ハク

「ふむ、こんなものか」

双子から受けたのはあくまでも双子の力が流れ込んでくるためそれを受け入れるには体に負荷がかかる、だが自分で使える場合は別だった

今までは双子ありきで事にあたっていたため考えたこともなかったが札に頼ってばかりではいざという時に対応できないため自身で使えるようにならねばと考えていた

休んでる間に術の使用だけはできるようにしておいたのだ

ヴライ

「その姿、良いぞ、ならば我も手加減などしてはおれぬ!!」

ヴライは仮面を装着する、完全に特訓の域を超える殺気

発する気が視認できアクルトウルカの形を成していた

ハク



「これはまた、ヴライ、先に言っておく。殺してしまっても知らんぞ」  
ヴライ

「ぬははははは!!ぬかしたな!!行くぞっ!!」

二人の殺し合いとも言える特訓が始まった

オシユトル

「……、さすがヴライか。しかし」

ヴライはハクの攻撃を受けつつも御構い無しに攻撃を仕掛ける、がハクの攻撃は決して軽いものではない、徐々にヴライの動きが鈍くなる

ヴライ

「ぬうつ、さすがは帝の弟だけはある、だがっ!!」

アクルトウルカの形をしているヴライの気がヴライの体を覆い始めた

そこにはハク同様のままで姿形を変えたヴライがいた

ハク

「これは、」

オシユトル

「アンちゃんよ、アクルトウルカになれないだけで力自体は使えば可能な事だ。むしろ本来ならその使い方が理想だったそうだが、あの方曰くな」

ハク

「なるほど、ならばその力、超えさせてもらう！」

ヴライ

「やってみるがいい!!やれるのならばな!!」

激しい戦いが繰り広げられる

ルルティエはもちろんファミイルまでも心配で倒れそうになった

オシユトル

「気丈に振舞われよ、お主達の信じたあの男ならばこんな特訓などで死にはしない」

オシユトル

(さすがヴライだが、ハクめ、未恐ろしいやつよ。すでにヴライの動きを掴んでいる。

この距離で見ているから気付けるが、おそらくヴライはまだ気づいていない)

ハクはヴライの攻撃をひたすら躲し時折反撃に出る

ヴライ

「どうした!!その程度の攻撃では永遠にこの身を倒す事は叶わぬぞ!!」

ハク

「そうだな、だが次で終わりだ」

ハクはヴライの攻撃を避けながらも地面に書いた術式を発動する、さらに手には血で

書いた術式も同時に発動

鎖で動きを封じられたヴライ、そして手に発動した術式によりハクの腕はさらに禍々しく変化、強烈な一撃がヴライに入った

ヴライを繋いでいた鎖はかなり強烈な拘束力を持っていた、がハクの一撃に鎖が耐えきれず鎖は千切れヴライは吹っ飛んでいった

ヴライは氣を失い姿が戻っていた

ハクも元の姿に戻る

オシユトル

「大丈夫かい？アンちゃん、ヴライはまあ、氣絶だけみたいだな」

ハク

「ああ、まったく、一歩間違えば危なかったな」

そう言うや否やルルティエとフミルイルが駆け寄りハクに抱きつく

オシユトル

「すまねえな、邪魔しちまって。俺はヴライを担いであの世に戻る。次は家族皆でなアンちゃん」

ハク

「ああ、またな」

そう言いオシユトルとヴライは戻っていった

結界内に戻ったところでハクが膝をつく

ハク

「ぐっ、あ、、」

ルルティエ、フミルイル

「ハク様!」

ハク

「も、問題ない。心配をかけてすまないな、」

フミルイル

「今すぐお布団を用意しますね、ルルティエ様、その間ハク様を頼みます」

ルルティエ

「はい、ゆっくりとそちらに向かいますね。さっハク様」

ハクはルルティエの肩に捕まりゆっくりと自室に向かう

ハク

「すまないな、迷惑をかける、うぐっ!」

体に走る激痛でルルティエを巻き込み倒れる

ルルティエ

「ハ、ハク様!!大丈夫ですか!?!すみません!支えてあげなくて!!あつ、」  
ハクがルルティエの胸の下敷きになっている

ハク

「ふお、ふおんはいはい(も、もんだいない)」

ハクがルルティエの胸の中で口を動かしてしま

ルルティエ

「ひゃああん!ハク様!喋らなくていいので!」

そんなこんなでなんとかハクの自室までたどり着いた

ルルティエは顔を真っ赤にしていた

フミルイル

「さつ、どうぞごゆつくりなさってくださいね」

ルルティエ

「で、では私は少し疲れを癒す料理でも作ってきますね」

やる事はやつてもああいふ突発的なものはやはり慣れていないようで

ハク

「やれやれ、」

そう言いながら横になるハク

なぜかフミルイルが「では」と言つてハクの側にいき添い寝状態に

ハク

「フミルイル？休ませてもらえるのでは？」

フミルイル

「はい♪男女の営みはこれ以上ない癒しですから、ハク様は今宵動かないでくださいね  
そう言うのと瞬く間に全裸になり、全裸にされた

後に料理を持ってきたルルティエが先程の照れはなんだつたのかと言わんばかりに

参加した

ハク

(しかしこの二人はなんてけしからんものを、、、)

疲れを癒そうにも男として抗えるものでもない

ハク

(自分にはもつたない連中でもあるのだがな、、、だからこそ幸せにしてやらねば、、、)

事がすみ二人の寝顔を見ると自分は決して死んではならない、そう思った

## キシタルの思惑

キシタルはハク討伐のための編成を考えていた

キシタル

(ガシヤグラはとりあえず確定か、死者の国を受け持っていた2人がやられた以上あちらの戦力はさらに上がった。何よりあの2人を倒すだけの戦力があちらにあった以上こつちも怪しまれずにそれなりの人数を連れていける。となると)

そこに来客用のベルになる

キシタル

「誰だ？」

表に出て素性を確認する

ガシヤグラ

「キシタル、ワレいつになつたら行くんじや。あれから1週間は経つとるで」

キシタル

「お前は待つと言う事を知らんのか、まあいい、ちょうど今編成をまとめているところ

だ。もちろんお前もいれている」

キシタルはガシヤグラを招き入れ誰を連れて行くか話した

キシタル

「お前と今話した2人は決定だ、あと1人を少し悩んでいてな」

そう言うや否やガシヤグラは

ガシヤグラ

「まだ増やすんかいな」

どうにも人数が多いのは不満なようである

キシタル

「立場上だが俺は今回は戦わん、そしてあちらにはおそらく死者の国からの援軍があるだろう。つまりこちらもそれなりに人数を用意する、これはお前とハクを戦わせるための編成にしているんだ、わかるな」

ガシヤグラ

「戦ならある程度は我慢せえつちゆうことか。しゃあないのう、ほならヴレイはどや。戦力的にはあれくらいでええんとちやうか?」

キシタルは少し考える

キシタル



「ヴレイか、なるほど、いいだろう、ならば今回俺は非戦闘員ゆえお前含むこの4人で行く。いいか？俺は今回報告する義務があるため貴様等がやられても手助けなどはない、つまり貴様等が負けそうになっても見捨てるつもりだ。ゆえに勝つしか道はない、いいな？」

ガシヤグラ

「ふん、えらい甘くみてくれとるのう。安心せえ、ちやつかり殺してきてやるわ。やけどワシはハクしか興味がないからのう、今回ハクを殺した後は帰らせてもらうで」

キシタル

「好きにするといい、敵の大將を仕留めればもはや残りの連中もここに存在すらできんからな」

ガシヤグラ

「なら決まりやな、出立はいつや？」

キシタル

「守護者にこの編成を伝え召集がかかるまで3日ほどだな」

ガシヤグラ

「まだかかるとかいな、」

落胆するガシヤグラ

キシタル

「用が済んだのなら出て行け。俺はまだ忙しいんだ」

そう言い放つと、ガシヤグラはへいへいと言いながら帰っていった

キシタル

「ヴレイ、か。さて、果たしてこの編成が通るかどうか。怪しまれてはいるだろうからな、気は抜けんか」

そして編成されたメンバーを伝えに守護者の待つ部屋へと行く

チー

「キシタルじゃん、お疲れ様々。編成終わった？」

キシタル

「最近よく会うな。編成の許可をいつも出してるのはクダルテだろう、なぜ君が？」

チー

「クテちゃんは今日はミコトちゃんのお話相手だよ、ミコトちゃんからのご指名だからね。だから今日はチーがやってるんだ。じゃ早速伝えてくれる？」

キシタルは4人の面子を伝えた

チー

「ふーん、まあガシヤグラがいれば問題ないかな。ヴレイくんはちよつと意外だけど

まあ許容範囲つてやつかな。で、キシタルは報告専門と」

キシタル

「どうだ？だめならまた考え直すか」

チー

「まつ、いいんじゃないかな」

あつさりと許可が下りた

キシタル

「そうか、それならば召集の方は頼む」

チー

「うん、任せてー。あとキシタル、今はチーしかいないから言うけど、ちよつと怪しまれてるよ？何かするならもう少し慎重にね」

キシタル

「、、、何のことかよくわからんが、まあ了解だ」

気が気ではないがなんとか冷静を保つ

チー

「ふふ、そつか。ならいいんだ、じゃあまた近いうちにね。あつ。カレー食べる？」

キシタル

「遠慮しておくよ、じゃあな」

部屋を後にするキシタル

チー

「やっぱ優秀だねキシタル、ちゃんと冷静に対処して。褒めてあげたいくらいだよ、ねーママ？」

獣型のタタリがすり寄ってくる

チー

「ハク、、かあ。なんだろうね、すごく懐かしい感じ。アハハ、仕方ないなあ、キシタルの思惑、手伝っちゃおうかな。守護者以外のオーツ全滅しちゃうけどいいよね、もう何百年も無駄に生きてるような連中だし」

優しいかと思えばその行動原理はやはり欲求に忠実なのか中々に意味不明な過程

チー

「あくあ、こっちはこっちで楽しいけどやっぱリクテちゃん羨ましいなあ、ミコトちゃんとお話せる機会なかなかないし、まさかのご指名だもんなく」

ぶつくさ言いながらチーもその場を後にした

場所は変わりハク陣営

ハク

「さて、そろそろ召集するか。少し離れたところに反応があるな。エンナカムイか、反応は、5つだど？なぜだ、ネコネと母上、っそうかクオン達だなきつと。やれやれ、仕方ないな」

ルルティエ

「ふふふ、エンナカムイは思い出深い場所ですから」

フミルイル

「そうですねえ、ハク様と初めて会ったのもエンナカムイの領内でしたし。私にとつてもすごく大切な場所ですねえ」

ハク

「まあ特に問題はないがな、ムネチカにもミカヅチに勾玉を渡すように言つてあるし、そろそろ始めるか」

ルルティエ、フミルイル

「はい♪」

ハク

「今回は本当に助かったよ2人とも、ありがとう」

2人は顔を赤らめながら笑顔で頷いた

ハク

「今回は再会が主な召集だ、堅苦しい戦の話もないしな。楽しむとするか」  
そうして再会のための召集がおこなわれた

## 家族

ハク

「さて、始めるか」

ハクはまず生者を呼び出す

トリコリ

「ここは、？ネコネ？」

トリコリ、ネコネとオシユトルの母でありハクにとつても母同様の存在である

ネコネ

「母様？見えてるですか？」

ハク

「ここでは死者との境界が曖昧だからな。怪我はともかく目などの病気であればなんとかできる、それでも見える程度だがな」

トリコリ

「そうですか、それではあなたがハクですね？」

目が不自由でハクの姿はほとんど見えてなかった彼女だが

その声でハクが存在を確信していた

トリコリ

「母を置いて一度は逝った事は後でたつぷり聞かせていただきます。ですがまずは、」

トリコリはハクを抱きしめる

トリコリ

「ネコネを守り、オシユトルの意思を継ぎ最後まで国のため戦ってくれて感謝します。

そして、生きていてくれてありがとう。本当に、ありがとう」

ネコネ

「母様、、」

ハク

「ご心配をおかけしました事、大変申し訳なく思います母上、、」

ハクは涙をこらえながらそう伝えた後

ハク

「それではやつも呼び出します」

ちなみにネコネは大号泣、クオンも泣いている

トリコリ



「そうですね、信じられない事ですが本当なのですね、オシユトル、」  
ハク

「はい、それではしばしお待ちを。ミカツチよ、其方も心の準備はよいか？」  
ミカツチ

「うむ、まさかこのような事になるとはな」

ハクが死者を呼び出す

その場に現れたのは、オシユトルとライコウ

トリコリ

「ああ、本当に、オシユトルなのですね」

オシユトル

「母上、お久しゅうございます。親より前に世を去った事、誠に申し訳なく思っております」

トリコリ

「ええ、ですが貴方はお役目を最後まで果たしたとハクから聞いております、それはもう立派な武士の姿であつたと。誇りなさいオシユトル、そして私も貴方を誇りに思います」

そう言うとオシユトルを抱きしめる

ライコウ

「ふん、無様な姿と笑ってやりたい所だが、経緯を知っている以上そうも言えんな」

ミカツチ

「笑ってくれても構わんがな。兄者はこれからやつと？」

ライコウ

「中々に面白い男よ、俺自身はハクがいる以上そこまでやる事はないがな」

兄弟の会話かどうかは怪しいがそれなりに会話が長く続いているようだ

ハクはしばらくその場を離れクオンと一緒にいた

クオン

「家族っていいね、ハクもそう思わない？」

ハク

「だな、ミカツチもなんだかんだで会話してるしな」

クオン

「本来なら叶わない事なんだね、これも」

ハク

「そう、だな。自分達だけこんな経験ができる、本来ならそんなにズルイ事はない。だ

がまあ、この戦いの褒美と考えればまあ、良いんじゃないか？」  
クオン

「そうかな？まあ私はまたハクに会えただけでも幸せなのだけど」  
そう言うのとハクにもたれかかる

ハク

「ああ、だからこそ勝たねばな」

アトウイ

「ああ、クオンはん抜け駆けはズルイえ〜」

アトウイ、ノスリ、ルルティエ、フミルイルが2人の元に

クオン

「わ、私は正妻だからこれくらい許されるかな！」

アトウイ

「あかんよ、こんな時だけ正妻の立場使うのは〜。皆に不満が募るえ〜、な？」

クオン

「ぐぬぬぬ、仕方ないかな、じゃあハク、今回は私達は帰るね」

ハク

「ああ、すまないな。自分もオシユトル達のとこに戻るとするよ」

ふと周りを見るとミカヅチの姿がない

ハク

「もうよかつたのか？」

ハクはライコウに話しかける

ライコウ

「別れはすませた、俺たちはそれでじゅうぶんだ。後はお前達家族の時間だ、ではな」

そう言うときライコウも消えていった

ハク

「やれやれ、あつさりしているもんだ。だがまああの2人はそれでいいのかもしれない」

そう言いながらハクは家族の元に戻る

ネコネ

「あつ、兄様何処に行っていたですか。せつかく家族が揃ったのです、早くこっちに来るですよ」

ハク

「ああ、すまないな。少しくオン達と話していた」

トリコリ

「さて、ハク？いろいろ報告があるのでしよう？」

ハク

「そうですね、事後報告になった事をお許しください。此度の件でこのハク、ネコネを含め数人の妻を迎える事になりました。本来であるならば事前に挨拶をしなければいけなかったのですが自分の状況がそれを許さずこのような形での報告になったことを大変申し訳なく思っております」

トリコリ

「ふふ、そうかしこまらないでくださいな。貴方がネコネを妻に迎えたということは真正銘私の息子になったということ。喜ばしいことでしょう？」

オシユトル

「お、よく考えたらアンちゃんは俺の義弟ってことか。そりやいい」

トリコリ

「ふふ、オシユトルのその口調も懐かしいですね。貴方が武士である道を歩んでからは他人行儀な口調になって母は少し寂しかったのですよ？なんなら昔のように「お母さん」と呼んでくれても」

オシユトル

「あ、あー、それはちよつと照れくさいですな。某もそれなりに大人でありますから」

ネコネ

「おにー様も肩の力を抜いてくださいです、家族揃って楽しく過ごすですから」

そんななどこの家族でもあるような楽しい時間を過ごす事になった4人

二度と訪れないであろう機会だ

だからこそ大切にしなければならぬ機会

ハク

「家族とはこんなにも楽しく、安らぐものなんだな、久しく忘れていたよ」

四人は一緒に食事をし、いつ終わるかわからないくらいに語り合った

オシユトル

「さて、とりあえず一度戻る事にするか。アンちゃん明日も頼めるかい？」

ハク

「ああ、すまないな。緩和されたとは言えずつとと言うわけにはいかんからな」

オシユトル

「なに、数日間はネコネも母上もいるのだからまた明日来ればいいだけよ」

トリコリ

「しかし良いのですか？大変な時なのでしょう？」

トリコリは現状を理解している、だからこそ気まずいのだろう

ハク

「確かに大変な時ではありません、が、こういう機会を作るのも大事だと思っています。ですからあまり気に病む必要はありません、この数日間が四人で暮らせる最後なのですから母上もどうか楽しんでください」

ハクの説得に涙するトリコリ

トリコリ

「わかりました、ではお言葉に甘えさせてもらいます。」

そしてオシユトルを見送った後ネコネが甘えてきた

トリコリ

「ふふ、まさか娘のこんな幸せそうな顔を見る事ができるなんて、ネコネよかったわね、ステキな旦那様で」

ネコネ

「えへへ、はいです」

トリコリ

「ハク、妻がたくさんいるのはわかりますが、どうかネコネを頼みます」

ハク

「はい、必ず幸せにしてみせますので安心してください母上」

真つ赤になるネコネ

ハク

「さて、少し勾玉に力を送る。ネコネと母上は先に休んでいてくれ」  
その場はそこで解散となった



## 思い出

オシユトルは夢を見ていた

死者でありながら寝ていたのである

再び母に会えたからか、ハクを交えたとは言え家族でまた食事ができたからかはわからない

死者の国に戻ったオシユトルは無性に眠く、戻るや否やその場で眠りにつく

オシユトル

「ここは、俺の家かい、懐かしいなあ。夢と認識できるつても変だが」

そこに2人の幼子がやってくる

オシユトルとネコネである

オシユトル（子供）

「ネコネ、父上の死は辛いかな？」

ネコネ（子供）

「えぐつ、えぐつ、はいです、」

オシユトル（子供）

「そうだな、俺も辛いよ、悲しいよ、でも父上はもういないんだ、だからおにーちゃんが今日からネコネを守ってやる！だから泣くな！」

我ながらとんだ理屈だ、だが、必死だったのだろう

ネコネや母上を悲しませないように

オシユトル（子供）

「父上にはなれん！だがこれからはおにーちゃんを兄様と呼んでくれ！なんとなくそれっぽいだろ？」

何がそれっぽいのか、ほんとの頃の俺はわけがわからん

ネコネ（子供）

「あに、さま？あに、さま、あにさま！」

オシユトル（子供）

「そうだ兄様だ！」

微笑ましいといはこの事を言うのだろうな、確かにネコネに兄様と呼ぶように言ったのは俺だったか

それなりに位の高い家とは言え田舎者だ、言葉遣いなどこの頃は気にもしていなかったな、

景色が歪む、

オシユトル

「ここは、そうか、やつとの稽古場か」

ミカヅチ

「ゆくぞオシユトル！勝ち越せたまま終われると思うなよ!!」

ああ、そうか、勝つては負け、引き分け、勝敗は結局つかなかった、これはその最後の勝負だった

オシユトル

「来るがいいミカヅチ、ここでどちらが上か証明してみせる！」

結局この時は負けた、その前までは一勝勝ち越していたからな、決着はつかないままとなった

オシユトル

「夢と言うより、死ぬ間際に見る走馬灯のようだな、すでに死んではいるが」

???

「其方は満足できたのか？これほどまでにやり残した事がありながら、その死を受け入れたのか？」

オシユトル

「!?、誰だ？」

???

「其方自身であり、其方の力であつた者」

オシユトルは仮面を触る

オシユトル

「まさか!?!アクルトウルカ、なのか?」

アクルトウルカ(オシユトル)

「其方の意思と仮面の力で得た自我、それが私。オシユトル、再度問おう。其方はあれでよかつたのか?」

オシユトル

「、、未練はある。だがそれは死者ならば当然のこと、受け入れなければならぬ」

アクルトウルカ(オシユトル)

「、、最後だ、見るといい」

オシユトル

「頼んだぜ、アンちゃん」

オシユトル

!!!

オシユトルが最後の時を迎えた瞬間である

ネコネ

「ああ、あああああ!! 兄様っ!! 兄様ああ!! 嫌! 嫌ああああっ!!」

オシユトル

「、、、っ! ネコネっ、、」

アクルトウルカ (オシユトル)

「私には其方の感情も少しだが混じっている、だからハクがアクルトウルカになる時、姿は其方と寸分違わぬようにした、皆はまだオシユトルを必要としていたゆえ、」

オシユトルは悲しむネコネを見ながらアクルトウルカの話聞いていた

アクルトウルカ (オシユトル)

「ネコネに少しでも元氣を取り戻してもらいたかった、これは私が望んだ事、結果ハクはネコネの兄として申し分ない存在となった」

オシユトル

「ああ、だからこそ俺はアンちゃんに感謝している。あのヴライとの戦い、あれはもう避けられない戦いだっただ、生きるために全力で戦ったがやつが強さは本物だ、だがそれでもアンちゃんとネコネは守れた、アクルトウルカよ、俺はな、それで、それだけで生きていて良かったと思えたんだ」

アクルトウルカ (オシユトル)

「あの瞬間、ネコネの邪魔があったのにか？」

オシユトル

「俺たちは兄妹だ、あのネコネの行動は当然の事。悪いとするならそれに対応できなかった俺自身だ。そして政務ばかりで己を強くする事を後回しにした、全て俺が負うべき責任だ」

アクルトウルカはそれを聞いて安心したのか姿をみせる、それは綺麗な白い龍のような存在、アクルトウルカの力とオシユトルの意思で創造され形を成した者

アクルトウルカ（オシユトル）

「やはり其方は其方であったか、清く正しく生きてきたからこそ私が生まれ、其方の力となれた、オシユトルよ、新しい仮面の力に私の全てを委ねましょう、存分に使うと良いでしょう」

そしてアクルトウルカはオシユトルの付けている仮面の中に入るように消えていった

最後にアクルトウルカはハクとネコネの別れをオシユトルに見せる

ハク

「終わったのだ、全てが、某のオシユトルとしての役目も、だからもう、偽らなくていい、某を兄と、」

オシユトル

(アンちゃん、)

ネコネ

「違うのです!!」

オシユトル

(、、、)

ネコネ

「兄様は、兄様なのです!!私の、大好きな兄様なのです!」

ハク

「そうか、そうだな、お前も某の大切な、妹だ」

オシユトル

「もういい、じゆうぶんだ、」

そこで視界が暗くなり、気づけば死者の国にいた

そこはオシユトルが1人になるための個室

オシユトル

「自分の部屋にいたのか、」

仮面から全身に力を流しているかのような感覚

今までより遥かに強くなったと実感できる

オシユトル

「これが、アクルトウルカの意思を取り込んだ力か、」

オシユトルは夢の中の事を思い出す

特に最後のハクとネコネの別れの瞬間を、

オシユトル

「話には聞いていたが、実際に見ると、俺はとんでもねえ事をしてしまったんだな。俺の生き方に文句はねえが、アンちゃんにまで強要してしまったからな。謝ったところで気にもしてない事を謝られても困るとか言い出しそうだ、心の内にでも閉まっておくか」

罪滅ぼしとか言うと思つたオシユトル

黙つてこの戦に全身全霊で挑む事を改めて、さらに強い意思で誓うのだった



# オーツ襲来

家族との時間を過ごしていたハク達

だが、

ハク

「、、、来たか」

ガシヤグラを含む4人のオーツが偽結界へ攻撃を仕掛けていた

ネコネ

「こんな時に、、ですか」

ネコネは家族との時間を邪魔されたせいかその表情は鬼のようであった

ハク

「オシユトル、、」

オシユトル

「アンちゃん、気持ちちはわかるぜ。まあ頑張ろうや、ヴライは呼べるだろうがそっちはどうだい？」

勾玉の力を確認するハク

ハク

「2人、が限界だな」

オシユトル

「となると、クオンの姉ちゃんは確定として後1人をどうするかってところかい」

ハク

「ああ、今回はキウルに頼むか。弓の腕だけならノスリより劣るかもしれないがオシユトルと息の合った連携が取れそうなのはキウルと見ている」

オシユトル

「おう！任せられたぜ」

ハクは急ぎクオンとキウルを呼び出す

クオン

「2人だけ？なにかあったのかな、それもかなり深刻な」

キウル

「そうですね、もしやとは思いますが、」

2人ともすでに察しはついているようだった

ハク

「すまん、オーツだ。気配の数は4つ、だが勾玉の力で呼び出せるのは2人が限界で

な、クオンはその強さと薬師として、キウルはオシユトルと連携してもらうために呼んだ。後はヴライを呼ぶ」

クオン

「4人に対してこちらは6人、オシユトルとキウル、ネコネと私で組む感じかな？ヴライは1人じゃないと嫌がるだろうし、ハクはまあ今更かな」

呆れているようで信頼しているのだろうか

ハク

「ああ、すまないな。さて、」

ハクは続いてヴライを呼び出す

ヴライ

「ふん、とうとう本番か。待ちくたびれたぞ、ハク」

ハク

「ああ、相手は4人。そのうちの1人を任せたい」

ヴライ

「よかろう、楽しめる相手ならよいがな」

ハク、ネコネ、オシユトルは母の元へ向かう

ハク

「せっかく一緒に過ごせる時間を申し訳ありません母上」

トリコリ

「謝る必要はないわ、ただ、無事に帰ってきてください。それだけが母の望み」

ハク

「必ずや全員無事で帰ってきます」

トリコリ

「ふふ、なら美味しいものでも作って待っています」

ネコネ

「母様、行ってくるです」

オシユトル

「行ってまいります母上」

そして6人はオーツのいる場に転移する

ガシヤグラ

「おおう、遅かったのう！危うくこの結界壊してまうとこやったでえ」

ハク

「まったく、間の悪い連中だな」

ガシヤグラ

「ホンマはワシー人で来たかったんやが、お許しが出んかったみたいでの。3人ほど連れてきとるんや。ほれ、自己紹介せえお前ら」

ボーンズ

「ボーンズだ、短い付き合いだがよろしく頼む」

アイコ

「アイコです、あまり痛くはしないので大人しく殺されてくれませんか？」

ヴレイ

「ヴレイ、、」

ハクは3人の自己紹介が終わるや否やクオン達に指示を出す

ハク

「クオン、ネコネ、女のオーツ、アイコを頼む」

クオン

「了解かな。ネコネ、全力でいくよ。」

ネコネ

「ハイです姉様！」

ハク

「オシユトル、キウルはボーンズと言うやつを頼む」

オシユトル

「了解だ、キウル！援護を！」

キウル

「はい！」

最後にハクはヴレイと言うオーツを見る

ハク

（ヴライー人ではキツイか、まあそんなこと言った日にはこつちが殺されかねんしな）

ヴライ

「なら私の相手は、あのヴレイと言うやつか。くくく、楽しめそうだ」

ハク

「ヴライよ、わかっているとと思うが勝つための戦だ、他のオーツが倒され次第そちらに援護がある事は受け入れてくれよ」

ヴライ

「それもまた戦よ、わかっておるわ」

そこからへんはちゃんと理解しているようで安心するハク

皆指定された相手に向かう、そしてハクはもちろん

ハク

「さて、待たせたなガシヤグラ。お前は某と戦いたいのだろうか？」

口調がオシユトルを演じていた時のようになる

ガシヤグラ

「はっはー！分かつとるやないか！安心したわ！今日はキツチリ殺したるさかい覚悟せえやあ!!」

ハク

「某をあの時と同じと思うな、そしてガシヤグラ、其方が前のままだとするなら結果は見えているぞ」

ガシヤグラ

「ほう、ほなら出し惜しみは無しやなあ!」

ガシヤグラの見た目がどんどん変わっていく、変質するオーツを初めて見るハク

ガシヤグラ

「ワシダケノチカラデノウ、コウナツタラモウトマランデデ!!」

ハク

「暴走、とも言えなくはないか。いいだろう」

ハクは強化の術を自身にかける

母と、妹と、義理の兄と過ごし、その温もりを感じ生きる事への執念が生まれたハク

その見た目は今までの禍々しいものではなくなっていた

ハク

「もう迷うことはない、必ず生きて現界する！ガシヤグラよ、其方の屍、超えさせてもらう！」

そして、戦いの場から少し離れたところにある見晴らしの良い丘、そこには事の経緯を見守るキシタルがいた。

キシタル

「短時間でよくもまあ、あそこまで強くなれるもんだ。見た感じだとヴレイ以外のところはなんとか勝てそうだな。ハクよ、ヴレイは手強いぞ。早めに助けに行かなければあのヴレイと言う男が死ぬであろうな。さて、最初に決着がつくのは何処かな」

決して参戦せずその場から動かないキシタル

ただただ事の顛末を見ていたのだった



## アイコと言うオーツ

クオンとネコネは女のオーツであるアイコと相對していた

アイコ、彼女はただただ平凡な女性であつた

いじめられていた過去もなくその日を楽しく過ごしていた彼女、それはオーツとなつてからも変わることはなかつた。だが、

日に日にウィツアルネミテアの呪いを受けていく内に少しずつ凶暴性は増していた。しかし暴走することはなく凶暴性を増していく事を自覚し、その事さえも楽しむようになる。

アイコ

「私はね、なんでも楽しめる性格なの。自身の変化も、貴女達を殺すこともね。でも死ぬのは痛いでしょう？ 痛いのは私も嫌、だから痛くはしないからさつさと殺されて欲しいの、いいでしょう？」

その言葉一つ一つは理解できるが、繋げると支離滅裂なものである

それを聞いたクオンは

クオン

「ごめんなさい、貴女にも色々あるかもしれない。でも私達にはハクが必要な。あの人を、愛しているの。だから、ハクとの未来を掴むためにも負けられないかな」

ネコネ

「姉様、必ず勝つですよ。援護をお願いします！」

ネコネが仕掛ける

同時にクオンも反対側からアイコを狙う

アイコ

「悲しいわね、こうなると痛くするしかないじゃない。恨まないでね、貴女達が悪いんだから」

アイコの手から鎖のような物が出る

2人は素早くそれに反応して距離をとる

アイコ

「あら、勘が良いのね。今ので決まるはずだったのに」

鎖がアイコのまわりをウネウネと動く

クオン

（これは、なかなか近づけないかな。速さでどうにかとか言う問題でもなさそう）

ネコネの方を見る

何やら合図を送っているようだ

クオン

(了解かな)

クオンがアイコの注意を引きつける

アイコ

「貴女、何か嫌な感じ。絶対殺さなきゃって本能で感じてる、」

クオンの中のウイツアルネミテアに反応しているのか

クオン

「ハアツ!!」

クオンが鎖に向かって攻撃を放つ、鎖はその一撃で全体に衝撃が行き渡り一瞬だが鎖の動きがとまる

アイコ

「ふふ、そこをあつちのお嬢さんが狙ってくるのかしら？ 甘いわね、最初の死体はあのお嬢さんに決まりね！」

アイコはネコネが突進してくると思えばネコネが攻めるであろう場所に攻撃を仕掛けた

だが

アイコ

「えっ、？」

そこにネコネはいない

アイコ

「どうして？あの隙からしか攻撃はできないはず、失敗？怖気付いた？」

ネコネ

「私の素早さを舐めないでほしいのです。直線の道なら開いた瞬間にここまで来るのは容易なのです」

そう言うやいなやネコネはアイコを切り刻んでいた

アイコ

「あああああああつ!!」

アイコの悲鳴が響き渡る

そしてその場から上へ飛び体制を整えようとする

アイコ

「くっ、ゆ、油断したわ、でもトドメをさせなかつたのはまずかつたわね、貴女達はもう私には近づけない！」

アイコが再び鎖で防御壁を展開しようとするが

ネコネ

「大人しくこつちで切り刻まれてればよかったです。そつちは私の攻撃より痛いのですよ」

アイコ

「、、えっ?」

上に飛んで安心しきっていたアイコ、そのさらに上にはクオンがいた  
クオン

「もう負けられない、必ず勝つと決めたの。」

アイコ

「あ、、ああつ、、」

クオン

「舞い散れ!命の花!!」

クオンの一撃がアイコをとらえ真下に叩きつけられる  
アイコ

「痛、、い、、あはは、、負けたのかな、、私」

クオン

「辛かったよね、今まで。もういいの、もう解放されていいんだよ」

その言葉を聞いた途端アイコの身体が徐々に消えていく

アイコ

「そっか、もういいのね。長かったなあ、」

アイコは最後の時を迎えると知り2人を近くに呼んだ

アイコ

「会ったばかりですぐお別れだけど、私の本当の名前、覚えててくれるかな？」

アイコが2人に本当の名前を告げる

クオン

「忘れないよ、ずっと」

ネコネ

「私も、忘れません。ずっと、ずっと」

アイコ

「ありがとう、ありがとう」

そう言つてアイコは消えていった

クオン

「なんでだろう、憎めないものだね、彼女とは、友達になりたかつたかな。会つて戦つて、最後にちよつと話しただけなのに、」

ネコネ

「なんでも楽しめる性格つて言つてましたから、すごく明るい人だったのかもです。私ももつと知りたかったです、名前だけでしたが、大切にしたいと思つたのです」

そして2人は他のオーツがいる場に向かう

それを見ていたキシタル

キシタル

「ふむ、アイコが逝つたか。あの鎖は強いが多人数相手には不向きではあつたからな。結果は当然といつたところか、それでもあの時より強くなくては倒せなかつたとは思ふが」

過去にキシタル1人で不意打ちとは言えハク陣営を壊滅寸前まで追い詰めたキシタル、それがすでに遠い過去のように思えた

キシタル

「向かつた先は、やはりヴレイのところか。よく見ている、となると次に決着がつくのはボーンズかガシヤグラか。だがあのガシヤグラの姿、あいつ、あんな切り札を持つていたとはな、あの状態なら俺より強いかもしれん。だがその程度の壁は超えてもらわねばならん、この先を進むためにはな」

そこに1人の影が現れる

チー

「アイコちゃん逝っちゃったかあ。アハ、ガシヤグラすごい見た目だね」

キシタル

「チーっ!?何故ここに!」

さすがに驚きを隠せないキシタル

チー

「やつぱりキシタル裏切ってたんだね、ほんと他の連中に怪しまれてながらも気づかれ  
てないのは私が嘘ついて騙してあげてるからなんだから感謝してよね」

キシタル

「、、なるほどな。道理で事が上手く運んでいるわけだ、貴様、何が望みだ?」

チー

「私はハクって人に興味があるだけだよ。彼と会うために下のオーツ全員犠牲にしても  
いいと思ってるからね。だからキシタル、貴方と私は今から共犯者だよ。肝心のハクつ  
て人はあれかな、まあ今はいいや。下のオーツ全員を始末した後彼と私を引き合わせ  
て、いい?」

ものすごい圧を感じるキシタル

キシタル



「、いいだろう。俺も大半のオーツを貴様らに気兼ねなく始末できるなら願ってもない事だ」

チー

「ふふん、こうしよーせーりつだね。じゃああの戦いも気になるけど帰るね。今後の編成は私を通してね、上手くやってあげるから。さ、ママ、帰ってカレー食べようね」

チーは獣のタタリに乗り去っていった

キシタル

「、俺も慢心が過ぎたか。だが、思わぬ好機ではある、存分に利用させてもらうさ」

## オシユトル対ボーンズ

オシユトルはキウルと共にオーツであるボーンズと戦っていた

オシユトル

(強い、、が、おそらくヴライの方が危ないな。ならば、)

オシユトルはボーンズと距離をとりキウルの近くにまで下がる

オシユトル

「キウルよ、ここは某に任せよ。其方はヴライの援護に向かってくれ。あのヴレイと言  
うやつ、想像以上だ。見た感じクオン殿とネコネも向かっているようだ。頼む」

それを聞き領くキウル

キウル

「わかりました、兄上、必ず勝ってください！」

そう言うのとすぐさまヴライの援護に向かうキウル

ボーンズ

「、、まあヴレイは強いからな。致し方ないが、舐められたものだな俺も」

オシユトル

「ふつ、そう言うな。某もまだまだ本気ではない、お主を倒すための強さくらいは持つて  
いるつもりだ」

ボーンズがそれを聞き今まで抜かなかつた剣を抜く

ボーンズ

「いいだろう、ならば見せてもらおうか。その強さつてやつをー！」

オシユトルもまた剣を抜く

オシユトル

「仮面よ、力を使うぞー！」

アクルトウルカの意思がその声に応える

オシユトルの仮面が少し変形する

その変化は微々たるものに見えるが強さは格段に上がる

オシユトル

「ハクに背負わせてしまった業、家族を置いて先に逝ってしまった罪。ボーンズよ、其方を倒すことで少しでも償えると信じて、このオシユトル、全身全霊で其方を倒す！」

ボーンズ

「お前の都合など知らん、大人しく斬られる！」

2人の斬撃が飛び交う

徐々にオシユトルが押され始める、斬撃の数がわずかながらボーンズの方が上だったようだ

オシユトル

「くっ、!!」

一旦距離をとるオシユトル

ボーンズ

「どうした？大口叩いた割にはその程度か？ならば拍子抜けにもほどがあるな」

それを聞きオシユトルは笑う

オシユトル

「ははは、やっぱ堅苦しいのは性に合わねーな。もうちよい自由にやるとするか」

そう言うと髪をぐしやぐしやとした後どこから顎用のつけひげまで取り出した

オシユトル

「これでよしつと、あー仮面は外せねーから仕方ねーか」

そう、ウコンである。オシユトルの強さはヤマトの中でも一二を争う強さではあるがウコンとしての強さはまた別モノであった。基本に忠実な型ではなく自由に振る舞える太刀筋はオシユトルの時より数段上の強さになっていた。さらに、

ウコン

「仮面、もう一段階上へいくぜ」

初めての力の解放だったのかアクルトウルカ自身が力を抑えていた、それに気づいたウコンが遠慮はいらないと言わんばかりにアクルトウルカを後押しする

ボーンズ

「ふん、気持ち次第でどうにかなるほど俺は甘くないぞ?」

ウコン

「そうかい?俺は大事だと思ってるぜ、こういう切り替えは、な」

なつと言った瞬間ボーンズの右頬に傷がつき血を流していた

ボーンズ

(な、なんだ、なぜ傷が、それなりに距離は離れている。間合いの外にいるはずなのに何故!?)

ウコン

「間合いだけボーンズ、そこもな」

ウコンの背後にアクルトウルカの姿がボンヤリとではあるが見えてきた

ウコン

「さあ仕切り直しといこうか!」

再び2人の斬撃が飛び交う、が

もはやオシユトルの斬撃は別モノであった

数すらもボーンズを超え、一太刀が強くボーンズの斬撃を全てかき消していた

ボーンズ

「はあっ、はあっ、まだだ!!」

ボーンズの剣に何かがまとわりついていく

骨のようだ

ボーンズ

「お前達は知らんだろうがボーンという言葉は骨を意味する！俺はその骨を増殖するこ  
とができる、剣に纏わせれば貴様の斬撃に負けることはない！さらに！」

体中から骨を出し鎧のように纏わせる

ボーンズ

「これで貴様の攻撃は効かん！終わりにしてやるぞ！」

ウコンはそれを聞き呆れたように口を開く

ウコン

「長々と説明ごころうさん、だがその程度で得意げになられても困るぜ。。。ハアアツ!!」  
ウコンの渾身の一撃が放たれる

ボーンズ

「ば、ばかな、こんな」

ボーンズを纏っていた骨が見事に剥がされる

ウコン

「、、鎧だけしか壊せなかったか。なかなか硬いじゃねーの」

ウコンはすかさず間合いをつめる、そして

ボーンズ

「ふ、ふふ、見事だった。恐るべき強さだな、しかし、こうも簡単にやられるか、オーツも、もはや、終わりがもしれんな」

ウコン

「いいんじゃないか、限りあるから楽しいんだろ命は。俺も短いながらも楽しんで生きてきたつもりだぜ？お前は充分長く生きたんだけ、正々堂々と負けた今思い残すこともないだろう？剣に生きたのならな」

ウコンはボーンズの剣を見て続けた

ウコン

「良い剣だ、ちゃんと磨かれている。だからこそわかるんだよ」

ボーンズ

「ふふ、良かったら持っていけ。確かに妙な満足感だ、オシユトル、いやウコンか？

どっちでもいいが、お前と戦えて、よかつ、、、」

言い切る前にボーンズは浄化された、剣だけを残して

ウコン

「ふう、俺の方こそ、偉大なるオンヴィタイカヤンの剣士と戦えてよかつたぜ。さて、」  
一息つくわけにもいかない、ウコンはすぐさまヴライ達の気配を探る

ウコン

「なんとか持ちこたえているみてえだな。アンちゃんの方は心配するだけ無駄か、よし！いくか！」

場所が変わりキシタルのいる丘

キシタル

「あのオシユトルというやつ、めちやくちや強いな。ボーンズはかなり強い部類のオーツだったんだが。残るはガシヤグラとヴレイか、ガシヤグラが思いの外強いな、おそらくハクは救援には迎えないか。あのオシユトルとクオンと言うやつ次第になってきたな」

相変わらず見てるだけで何もしようとはしないキシタル、数少ない休憩時間を満喫しているといったところか



## キシタル

「やりやすくはなつたが、オーツはまだまだいるからな、面倒な事だ」  
愚痴をこぼしつつも戦いを見るその表情はどこか楽しげでもあつた

## 共闘

ガシヤグラはギリギリ理性を保ちながらハクとの決戦を楽しんでいた  
ガシヤグラ

「ホンマタノシマセテクレルノウ!!」

ハクはガシヤグラの強さを見極めようと一歩引いた戦い方をしていた  
ハク

（やつは気付いてるはず、このままではヤツに勝ち目はない、だが、どこか余裕がある。  
何故だ？まだ何かあるのか、理性を失いつつあるあの状態から一体何が、）

場所は変わりヴレイと戦っているヴライ達

ウコン

「強えな、だがさすがに5人相手では分が悪そうだな」

ヴレイ

「、、、そうだな。そろそろ頃合いかもしれん」

ヴライ

「くたばれい!!」

間髪入れずにヴライが攻撃を仕掛ける  
だがヴレイはこれをいとも簡単に躲す

ヴレイ

「殺気がダダ漏れだな、少し下がってろ」

ヴレイは一気に間合いを詰めヴライを攻撃、吹き飛ばす

ヴライ

「ぐっ、ぬうう!!」

だがヴレイの左右にネコネとクオン、そして背後からはキウルの矢が飛んでくる

ヴレイ

「ちっ!!ちよこざいな!」

キウルの矢を避けるもネコネとクオンの攻撃を左右から受けてしまう

互いの攻撃の衝撃は行き場を失い真上に吹き飛ばすヴレイ、そこにはウコンが攻撃態勢をとっていた

ウコン

「でやああっ!!」

強烈な攻撃を立て続けに受けるヴレイ

ヴレイ

「ふう、さすがにキツイな、」

すでに満身創痍のはずなのに焦りが見えない、5人は違和感を感じながらも攻撃を続ける、が

ヴレイ

「わかった、すぐ向かう」

そう言うのと地面を殴り5人の視界を奪う

ウコン

「くそっ！皆無事か!？」

ウコンは仲間の安否を確認する、皆は特に何か攻撃を受けたわけでもなくただただ視界を一瞬奪われただけのようだ

そしてヴレイの姿はそこにはなかった

ウコン

「どういうこった、そこらへんに隠れて隙を狙うって感じでもない、」

そこでクオンが気付く

クオン

「まさか、ハクっ!!」

一目散にハクのいる場へ向かうクオン、皆も気付き急いで向かう

そしてハクとガシヤグラの元にヴレイが現れる  
ヴレイ

「待たせたなガシヤグラ、準備はいいか？」

ガシヤグラ

「オオ、マツトツタデ。ハジメモカ」

ハクは嫌な予感がした、何をする気かわからなかったが何もさせてはいけないと判断し止めに入ろうとするがすでに遅かった

ガシヤグラとヴレイが一つになっていく、

遠くから見ていたキシタルも驚きを隠せないでいた

キシタル

「そうか、そういうことかつ、！ガシヤグラのやつ、このためにヴレイを組み込ませたのか、不自然に俺のアジトまで足を運んでまでっ!!」

ハク

「これは、さすがに予想外が過ぎるな、」

???

「待たせた、俺の名はそうだな、ガレイということにしとくか」

ハク

(マズイな、今のままでは、)

そこにクオン、そして皆が合流する、が

ガレイ

「とりあえず雑魚には用はないな」

ハク

(マズイっ!!)

ハクはガレイが皆に手をくだす前に皆のいる所に手をかざす

クオン

「ハク、まさかっ！待っ!!」

言い切る前にハクは皆を元の結界に戻した、そして次の瞬間皆のいたところに爆発が起きた

ガレイ

「間一髪だったな、さすがは俺の見込んだ男」

ハク

「貴様、」

ガレイ

「くはは、さあ始めようか!!楽しい楽しい戦いをなあ!!」

ハクが構えたその瞬間、ガレイの側面からガレイに強烈な一撃が入る

ガレイ

「ぐっ!!なんだ!」

キシタルである、己が特性である気配を消す能力で近づき攻撃を仕掛けていた

ガレイ

「貴様、なんのつもりだ、まさか裏切るのか?」

キシタル

「裏切りはむしろ貴様ではないのか?ミコトからの命令だ、その状態はもはやオーツとは認めない、侵略者と共闘してでも消すように、だと」

ハク

「キシタル、」

キシタル

「心配せずとも事実だ、上から命令された以上は心置きなくやれる。ハク、足を引っ張るなよ」

ガレイはそれを聞き大声で笑う

ガレイ

「まあいいだろう!!もはや俺に勝てる者なぞいない!守護者であろうとミコトであろう

とな!! 貴様等を殺した後はあいつらを皆殺しにしてくれ!!」

キシタル

「ハク、集中しろ。おそらく二人掛かりでも勝ち目は薄い」

ハク

「だろうな、だがやるしかないだろ?」

キシタル

「そういうことだ。いくぞ!!」

そしてハクによって結界内に戻されたクオン達

クオン

「ハクっ!! ハクっ!!」

クオンが結界の壁をどんと叩く

ウコン

「抜かったぜ、一気に仕留めておくべきだった。くそ、このままじゃアンちゃんか、」

ネコネ

「兄様、兄様、どうか無事で、」

皆が悔しがる中ある人物が近寄る、ハクオロである

ハクオロ



「状況を説明してくれないか？」

クオン

「お父様、ハクが、ハクが、」

言葉を発するのも難しいクオンに変わりウコンが事の経緯を説明する

ハクオロ

「なるほど、相変わらず無茶をする息子だ。わかった、私が行こう」

クオン

「お父様、」

ハクオロ

「あの結界なら一度行ったことがある、私だけならばあの場まで行ける、だからクオン、心配するな。父に任せておけ」

クオン

「うん、うん、お願い、あの人を助けてっ、」

ハクオロ

「ああ、それでは行ってくる」

そして場所は再びハク達の場合へ

ハク

「くそ、強すぎる、キシタル、無事か？」

キシタル

「ぐっ、なんとかな」

二人共なんとか食らいついてはいるがガレイはあまりに強く活路を見出せないでいた

ガレイ

「どうした？その程度で終わっては楽しめないではないか、もつとだ、もつと熱くさせろ！！」

ハクオロ

「ならばこういふのはどうだ？」

ハクオロの術が上から降り注ぐ

ハク

「先代!?なぜここに！」

キシタル

「ハクオロ、また会うことになるとはな」

ハクオロはすかさずハク達の元へ駆け寄りクオンからもらった薬をハクに渡す

ハクオロ

「まったく、娘をあまり泣かさないでくれ。顔ぐしゃぐしゃになってたぞ？」

ハク

「ぐっ、すまない」

ハクオロ

「その言葉、ちゃんと娘達にも言わないとな。生きて帰るぞ」

ガレイが立ち上がる

ガレイ

「中々、良い攻撃だったぞ、貴様が誰かは知らんがわざわざ殺されにくるとは物好きなのやっだ！」

ハクオロ

「さて、指揮と援護は任せてもらおうか、頼んだぞ二人共」

キシタル

「ふっ、中々不思議な感覚だ、だが何故だろうな、もはや負ける気がせん！」

ハク

「だな、いくぞキシタル！先代！」

ガレイとの決戦が始まった

## 決着

ハク、キシタル、そしてハクオロの共闘

ガレイはたかが1人増えたところだと思つていたが3人による連携は徐々にガレイを追い詰めていた

ハクオロ

「下がれ！2人とも！」

攻撃を仕掛けようとした2人だったがハクオロの声にすかさず反応しハクオロのいる場まで下がる

ガレイ

「ちっ、またかつ、」

ガレイの拳が空を切りハクとキシタルのいた地面に亀裂が走る

ハク

「近くにいるとあの突然来る拳は見づらいな、隙ができたようにしか見えなかった」

キシタル

「誘い込まれていたと言うことだな、元がガシヤグラとは思えない戦い方よ。ヴレイの

影響かもしれんが、」

2人は肝を冷やしたかのように話す

ハクオロ

「遠くからでも中々見づらいものだがな、しかし、想像以上に強い、どうしたものか」  
悠長に考える時間はもちろんガレイが許すわけもなく3人に向かつて来る

ハク

「キシタル、少し引きつけとく。これも使え」

ハクは懐にある鱗を取り出しキシタルに渡す

キシタル

「弟の、そうか、わかった」

そう言うときキシタルはすぐさま能力を使い姿を消す、厳密に言うなら認識できないだけ  
けでその場にはいるのだが

ハク

「先代、少し前線に出てもらおうぞ」

ハクオロ

「やれやれ、父親使いの荒い息子だ」

2人がガレイに向かつていく

キシタル

「俺一人では認識しようど注意していれば見抜かれてしまうが、さらにこれを使えば」  
存在はさらに薄れもはやその場にいたことさえ忘れさられてしまうまでになつてい  
た

キシタル

「渾身の二撃を叩き込まねばならない、覚悟するがいいガレイ」

ガレイはハクとハクオロを相手にしながら違和感を感じていた

ガレイ

（なんだ、？何かおかしい、さつきと、何が違う？戦っていたのは、2人だったか？）

ガレイの動きに気付くキシタル

キシタル

（やはり、どんなに存在を薄くしても違和感はあるか。無かったに等しいまで存在を稀薄にすれば記憶にまで影響を及ぼす。だがその事実まではなくならない、違和感を覚えて当然、だが）

違和感にとらわれている隙にハクの一撃が入る

ガレイ

「かつ、はっ!!貴様！」

ハクオロ

「隙を見せたな、本当の隙を！」

ハクオロが鉄扇による一撃を放つ、この鉄扇は新しく作つたものだった、ハクに持たせたものとは同じに作られている

ガレイ

「貴様ら！何をした!?何故こうも、!!」

ガレイは一瞬冷静さを欠いていたがすぐに落ち着きを取り戻す

ガレイ

「、、、まあいい、どのみち貴様ら2人を殺せば終わることよ。少し痛かったがまあ焦るほどの攻撃でもなかった。余計な事は考える必要ないな」

キシタル

（そうだ、それでいい。一切の違和感を感じなくなれば必ず機会が訪れる、頼んだぞ2人とも）

ハクが深いため息を吐く

ハク

「はああああ、まったくとく、この後もクオン達にどやされると思うと億劫になるな、」

ハクオロ

「それ以前に負けなければ元も子もないがな、私もお前を助けると約束してしまったし。」

2人が他愛ない世間話をしていると

ガレイ

「話は終わりか？なら続けるぞ！」

ガレイが2人に襲いかかる、が

ガレイ

「がっ、!!ぐっ、あー！」

ガレイが2人に襲いかかる速度はあまりにも速かった、だがその速さが命取りになつた

ガレイの腹にキシタルの拳がめり込んでいた

ガレイ

「キ、キシタル！貴様！」

キシタル

「俺1人の力をいくら引き出したところで大した傷は負わんだろうガレイよ。ならば貴様の速度を利用するまで、だが貴様は俺がいなくなつた事への違和感を感じていたな、ゆえに一步引いた戦い方ではトドメをさすことはできない。根気よく待ったかいは、あつたようだ」



ガレイ

「ま、まだまだああああ!!」

ガレイは腕を薙ぎ払う、キシタルはこれをくらってしまった

キシタル

「ぐあつっ!!」

吹き飛ばされるキシタル

ハクとハクオロは一瞬キシタルの身を案じたが彼のくれた機会を逃してはならないと一気に勝負を決めにいった

ハク

「先代、ここで決めるぞ!」

ハクオロ

「はああああ!!」

2人による鉄扇の連携攻撃

ガレイ

「ぐ、おおっ!ここまでして、ここまでして負けるのか!認めへん、ワシはこんな結果が欲しゆうて戦ったんやない!!ワシは!なんのために融合までしたと思っっている!勝つためだ!勝つために!」

ガシヤグラとヴレイの人格が表に出始めている、が体は融合してしまっている。人格は離れようとしているが体はすでに1つになっているため無理に人格を剥がすと体が真つ二つになるのは必定、もはやどうにもならない。

ハク

「おそらくこれは、浄化しても救われないかもしれないな。」

ハクオロ

「そうだな、おそらく禁忌とされていたのだろうこの融合とやらは。オーツの長、ミコトが見限るわけだな」

キシタル

「そ、その通りだ、俺も知らなかったくらいだからな、おそらく未来永劫、死した後も罰を受けるほどのものだろうな」

キシタルがフラフラになりながら2人と合流する

キシタル

「だが、自業自得だと思って、トドメをさしてやれ」

ハク

「少し気が進まないが、まあ了解だ」

ガレイはもはや言葉も発せないくらい醜い塊と化していた

ハクはトドメをさし、戦いはハク達の勝利となった  
キシタル

「ふう、少し予想外の事が起きたが、まあ無事に終われたか」  
ハク

「無事かどうか怪しいものだがな。とりあえず今日はさつさと帰ることにする、クオン達も心配しているだろうしな」

キシタル

「了解だ、それではな」

キシタルはその場を後にした

ハクオロ

「私達も戻るか、いや〜これは娘に感謝されちゃうな〜」

ハク

「親バカもほどほどにしとけ」

2人はそう言うのと一瞬で結界内に戻る

そこには泣き顔でぐしゃぐしゃになった顔のクオンとネコネ、安堵した顔のウコン、キウル、そして特に顔の変化がないヴライがいた

ハク

(ああ、これはやってしまったな。これもまた、自業自得か)

クオンとネコネがハクに抱きつく

クオン

「ハクっ!!よかった!よかった無事で!えぐっ、えぐっ、」

ネコネ

「心配じだです、兄様、兄様ああ」

ハクは2人の頭を撫でる

ハク

「すまなかつた、咄嗟の判断でああするしかなかったとは言え心配をかけた、」

ウコン

「アンちゃん、無事でなによりだ。後、すまなかつたな、ヴレイを仕留めきれなかつたせ

いで、」

ハク

「自分の方こそ、ガシャグラをさつきと倒せてればよかつたのにできなかつたからな。

お互い様だ」

遠くからヴライが様子を見ていた、そしてそのあとは何も言わずに帰っていった

ハク

(何も言わないと怖いんだが、)

クオンとネコネが離れてくれない

トリコリ

「心配をかけたのですから甘んじて受けなさい、よいですね？母からは以上です、後で皆で仲良く食事しましょう」

母はそれだけ言うともた料理に取り掛かりにいった

ハク

(決意したにもかかわらずここまで心配かけたのもまた事実、まだまだだな、)

クオン

「ハク、、ハク、、」

ハク

「ああ、自分はここにいます。ほんとにすまなかつた」

クオン

「ううん、助けてくれてありがとう、」

クオンとネコネの頭を撫でながらふと顔を上げるとニヤニヤ顔のウコンと羨ましそ  
うに見るキウルの姿があつた

ハク

（気まずい、実に気まずい、あーキウルよ、そんなに泣かないでくれ、自分が無事で泣いてるんじゃないよなあれ。明らかに再々失恋みたいな泣き顔だ、許せよ）

その日はギリギリまでクオンとキウルにいてもらい食事をしながら過ごした

クオン

「ハク、、またすぐに呼んでね、お願い、かな」

ハク

「心配するな、必ずまた呼ぶ。約束だ」

ネコネ

「姉様、よかつたら私が今回、」

クオン

「ううん、家族との最後の時間を奪いたくないの。ハクも約束してくれたし、いっぱい楽しんでねネコネ」

ネコネ

「は、はいです！ありがとうございますのです姉様！」

そうしてクオンとキウルは帰っていった

ウコン

「じゃあ俺もそろそろ時間のようだ、また明日だなアンちゃん」

ハク

「ああ、兄貴によろしくな。あとついでにマロも」

ウコン

「はっはっは、ついでと知っちゃあ泣いちゃうぜあいつは」

冗談を交えながら他愛のない話を少ししてウコンも帰っていく

トリコリとネコネも疲れたのかすぐに寝室に行き眠りにつく

ハク

「……、危ない戦いだっただ、な」

ハクはガレイとの戦いを思い返していた

おそらく守護者はさらに強い、そう考えると寝ることができなかった、

## 別れ

勾玉の力もたまりハク達4人の家族が過ごせるのもこの日が最後となる

ハク

「そんなに長くはなかったが、どうだったネコネ？」

ハクはネコネの事が心配でならなかった

ネコネ

「はいです、寂しい気もちろんありますが、本来なら叶う事がなかった願いなのです。本当に、楽しかったのです」

少し涙を浮かべながらも笑顔を見せるネコネ

トリコリ

「本当にありがとうハク、そしてオシユトルも」

トリコリは2人を抱きしめ礼を言う

トリコリ

「オシユトル、あなたは私達を天国から見守っていてください。そしていつか私がそこらに行った時、また会いましょう」



オシユトル

「楽しみに、しております。どうかその日が来るまでハクとネコネ、3人で幸せに、それがこのオシユトルの願いです」

トリコリ

「ええ、約束しましょう。そしてハク、聞きましたね？必ず戻って来てください。息子として、ネコネの夫として」

ハク

「厳しい戦いになるでしょう、ですが必ず戻ります。ご安心を」

トリコリ

「ふふ、ありがとう。それでは最後の食事の準備をしてきます。オシユトル、少し手伝ってくださいな」

トリコリはネコネとハクを2人きりにする

オシユトル

「兄ちゃん、ネコネを頼んだぜ。ああは言ったがやはり割り切れるもんじゃねえからな」  
そう言うとうと母と共にその場を離れる

ハク

「ネコネ、まだ時間はある。少し歩くか」

ネコネ

「は、はいです！すみません、気を使わせてもらって、わかつてはいるのですが、」

ハク

「別れは悲しいものだ、気にするな、母上もオシユトルも、そして自分も名残惜しい気持ちはある。だが前を向かねばな、そら、歩くぞ」

少し歩くとハクは腰を下ろす、そこはハクの許可がなければ誰であれ入ることができない場所。青白く光る花がどこまでも続いていそうな幻想的な場所

ネコネ

「……、は？」

ネコネはいきなり景色が変わったのを驚きつつもその幻想的な光景に心奪われていた

ハク

「自分は普段ここで過ごしていた、オーツ絡みでお前たちを呼ぶためにあの場所を設けていたからな。クオンが初めて来た場所はここだった」

そう、クオンが初めて勾玉を使いハクと再会した場所である

ネコネ

「綺麗なのです、すごく」

ハク

「ネコネ、母上の料理は美味しいな。オシユトルはなんだかんでウコンの性格が似合う。本当に、楽しかったな」

ネコネ

「はいです、本当に楽しかったのです。兄様、私、」

泣きそうになるネコネを抱きしめ頭を撫でる、ネコネはたまらず大泣きし始めた

ハク

「思いつきり泣くといい、自分以外誰も見ていない。強がる必要なんかどこにもない、そして笑って2人のとこに戻ろう。最後の食事だ、楽しまないとな」

わんわん泣くネコネ、ハクはその後泣き止むまで何も言わずネコネの頭を撫でていた  
しばらくすると

ネコネ

「、ハーーー!!よく泣いたです！兄様、ありがとうございます。いっぱい泣いたらなんか楽になったのです」

泣きはらしたからか目のまわりは赤くなっていたがその笑顔は先程よりもとても元氣に見えた、満面の笑顔、やはりネコネにはその顔が似合う、ハクはネコネのその顔を見てもう大丈夫だと安心した

ネコネ

「えへへ、それに姉様以外まだ誰にもここに来てないなら妻として招待されたのは私が最初なのです♪ありがとうなのですよ兄様」

花畑の中をぐるぐるとまわり楽しそうに踊るネコネ、花の光が宙を舞いその姿はとても美しかった

ネコネ

「兄様、全てが終わった後最後にまたここに連れて来てください。その時は姉様達と一緒に、」

ハク

「ああ、わかった。絶対勝たねばならんな」

ネコネの泣きはらした目の赤みが消えた後、2人は母とオシユトルのいる結界内へと戻っていった

オシユトル

「、、おう兄ちゃん、ネコネ！もうすぐできるぜ、母上が座って待つてくれってよ」

ハク

「そうか、じゃあ遠慮なく待たせてもらうか」

ハクとネコネがオシユトルの元へ行き近くの椅子に腰を下ろす

オシユトル

「ネコネ、もう大丈夫みてーだな」

オシユトルもネコネの顔を見て安心していた

ネコネ

「はいです、兄様がいつぱい頭を撫でてくれましたから。おにーさまにも心配をかけました、ネコネはもう大丈夫なのです」

やるねえと言いたげな顔でハクの方を見るオシユトル

ハク

（顔がゲスいぞ義兄様よ、）

そこにトリコリが様々な料理を運んできた

トリコリ

「最後は今まで以上に豪勢にしましたよ。体の調子がよいから張り切ってしまいました、それでは3人とも」

4人は最後の食事を前にして手を合わせる

「いただきます」

4人での最後の食卓、そこには悲しみはなく笑顔と笑い声で満たされていた。

そして

母が元の世界に戻る時間になった

トリコリ

「ハク、オシユトル、ありがとう。こんなに幸せな時を過ごせたのはいつぶりかしら、それほどまでに充実した時でした」

母もまたわずかに涙を浮かべているがその顔はやはり先ほどのネコネ同様満面の笑顔であつた

ギリギリまで時間を使い家族4人と共にいたが

ハク

「そろそろ、限界か」

トリコリ

「ありがとうハク、もういいのですよ。では私は元の世界に戻りましょう、ネコネ、行きましょうか」

ネコネ

「はいです、それでは兄様、おにーさま、また後日」

その言葉を最後に2人は元の世界に戻っていった

オシユトル

「死んだ後にこんな体験ができるとはねえ、生きてりやいいことあると言うが、死んじ

まってるしな」

ハク

「まあ特例中の特例なんだがな、だが叶えられるやつがほかにいるなら叶えてやらんな」

少し2人で話し込んだ後オシユトルもまた元の世界へ戻っていった

## 長い特訓を終え

最後の戦いから3ヶ月か過ぎようとしていた

キシタルから一度だけ連絡があったがどうやらガレイの件はオーツ陣営にとつては  
かなり深刻な事態のようでこちらに気を回してゐる場合ではないとの事

ハク

「向こうの都合にこちらが合わせにやならんのは気に入らんが、こちらの特訓による戦  
力強化ができるのならば文句も言えんか、にしてもこうも長い間動きがないのも気味  
が悪いな、」

そこにウルウル、サラアナが現れる

ウルウル、サラアナ

「主様、回復した。いつでも行けます、どうかご指示を」

アンジユ

「カツカツカ、とうとう特訓の成果を見せる時が来たのじゃ！ゆくぞムネチカ！2人で  
ハクをけつちよんけつちよんにしてくれよ！」

アンジユがムネチカと共に現れる、そして



アンジュ

「お父上！お母上！見ていてくださいれ！」

先の帝とホノカもその場に呼ばれていた

ホノカ

「ふふ、またあの子のあんな姿を見る事ができるなんて、死んだ身であれど幸せですね」

帝

「そうじゃな、余も同じ気持ちである。じゃがあの子のバカは手加減などすまい。大きな怪我などしなければよいが」

他の者の特訓では冷静に分析しているものやはり娘の事となると少し私情が入る

ハク

「確かに皆このわずかな時間でまた強くなった、が、自分も負けるつもりはないぞ、ウルウル、サラアナ、頼む」

ハクもまたさらに強くなり強化の術はもはや制限無く使えるまでになっていた

ウルウル、サラアナ

「御心のままに、」

ハクは強化の術を受け、さらに自分に重ね掛けした

ハク

「さて、遠慮はいらない。来い！」

アンジュの超攻撃型とも言える猛攻にムネチカによる超防御壁による援護、隙あらばムネチカも攻撃に参加する連携は単純ながらも隙がなく「強い」とはこういうものだと言わんばかりの攻めだった

ハク

「隙が、見当たらん、ならば……こじ開ける！」

ハクがムネチカの防御壁を確認するとすぐさま距離をとり力を貯める

ガシャグラの能力である身体強化を一点に集中させる

ハク

「その壁、破壊させてもらおう！」

ハクによる一撃、ムネチカの防御壁は無残にも叩き割られるような音を出して消えていった

だがそこにアンジュがすかさずハクに詰め寄る

ハク

「やはりこの隙を狙ってきたか」

アンジュ

「あつ、」

ハクは鉄扇を使いアンジユの攻撃をいなし首元に一撃を与え気絶させる

ハク

「ムネチカよ、まだやるか？」

ムネチカ

「いや、壁を破られた時点で小生の仮面の力はだいぶ消耗したも同然。小生達の負けだ、攻めにも参加するのはやはり愚策だったのかもしれない」

ハク

「愚策とまではいかないが、オーツ戦を想定するなら確かに防御による援護を徹底したほうがいいかもな。とりあえずお疲れだ、アンと共にゆっくり休んでくれ」

ムネチカはアンジユを連れてその場を離れる、そこに帝とホノカが近寄ってきた

帝

「見事じゃった、どうじゃ我が娘は？」

ハク

「自分もそこまで戦いに特化した戦士でもないんだが、まあそれはさておき、力は確かにとんでもない、武器も相まってその破壊力はオーツでさえくらえばひとまりもないだろう、ゆえに隙が大きいかな」

帝

「ムネチカやお前ならば上手く援護してくれよう、さて、わざわざ娘の成長を見せに呼んだわけではあるまい？ 話でもあるのかの？」

ハクは少しためらう表情を見せるが意を決して話す

ハク

「兄貴、そっちに人間だった頃のホノカさんとチーちゃんはいたか？」

ホノカ

「!!」

ホノカも気にはしていたのだろう、だが言い出せなかったらしい

帝

「死者の国も広い、見つけれなかった可能性もじゅうぶんある、じゃが、おそらく死者の国にはおらん。勘じゃがの」

ハクはやはりといったような顔をしていた

ハク

「なんとなくそこに違和感があった、タタリになったあの2人は一応は生きているためそっちにはいないと、だがすでにかなりのタタリを浄化をしているにもかかわらずそっちにいないとなると、」

帝

「オーツになつてゐる可能性が高い、じやな」

ホノカ

「つゝ、我が君、」

帝

「そんな顔をするでないホノカよ、薄々は気づいておつた。してハクよ、お主はどう見ておる？」

ハク

「オーツはまだ相当数いるがキシタルによると今や直属の上司のようなオーツがいるらしい、その名をチーと言う、獣のタタリを母と呼び少女のような見た目だと、自分も薄々は気づいていたが、こういう予感は何故かよく当たる」

帝

「ふむ、ならば間違いあるまい。ハクよ、姪を、余の娘を、殺せるか？」

ハク

「気が進まない度で言うと過去で一番だな、だがやらねばならない」

ハクはもはや覚悟の上だったようだ

帝

「余も受け入れねばなるまい、ハクよ、頼む」

ハクはわかったと一言だけ言うのとアンジユとムネチカが割って入ってきた  
アンジユ

「我が前身がオーツと言う事でよいか？ならばそやつとの相手する時は必ず余も連れてい  
け、言ってやりたい事ができた！」

帝、ホノカ、ハクはそれを聞くと緊張の糸が切れたのか表情が緩んだ

ハク

「ああ、わかった。一応現状ではまだ可能性の域を出ていないが事実だった場合は必ず  
参加してもらおう、ムネチカもよいか？」

ムネチカ

「うむ、心得た」

そして特訓は一通り終わり1人になったハク

最近ではクオン達の誰が残るとか言う選択肢もなくなるとまに1人で休むようにしている  
ハク

「だいぶ仕上がってきたはず、あれから3ヶ月、これ以上待たさせるならこちらから出  
向く事も視野に入れなければな、ん？」

現実世界からなにやら信号が来ている事に気付く

ハク

「珍しいなあちらからの呼びかけか、」

信号の数は2つ

ハク

「ああこれはあれか、しばらく無かったから失念していたな」

要はクオン達による2人までの滞在をさせるの合図であった

ハク

「まあ最近は少し忙しかったしな、」

誰が来るかはわからないがとりあえず2人を迎え入れる事にした

## 放ったらかしの代償

ハクは誰が来るか恐怖を覚えながらも呼びかけに応じて2人を呼び寄せる

そこにはクオンとフミルイルがいた

ハク

「そ、息災であったか2人とも？今茶でも出そう」

ガシツ

ハクの肩をクオンが驚掴む

その力は尋常ではなく握りつぶされんばかりの力がこもっていた

ハク

「いだだだだっ!!クオン！無くなる！肩が無くなる！」

クオンはニツコリと笑いながらも身体中から怒気のようなものが出ているように見えた

クオン

「ハク？お茶とかいいから、フミルイルに任せておいて？私達はちよつとお話する必要があるかな」



ハク

「ひっ!!」

フミルイル

「あらあら、それではお茶の用意でもしてきますね。クーちゃん?あまりやりすぎないようにね」

フミルイルが茶の用意をするためにその場を離れる

クオン

「さあ私達はこっち。大人しくついてくるかな」

クオンの尻尾がハクの頭に巻きつきハクの自室へと引つ張る

ハク

「付いていくから!締め付けないでくっ!いだだだだっ!」

そして自室に連行されるといふ意味不明な状況になり正座をさせられるハク

クオン

「さあハク?1ヶ月以上も私達を放つたらかかしてどういうつもりかな?」

ハク

「い、いや特訓を、」

クオン

「ん？」

ハク

「ひっ！」

ハクは下手な言い訳は逆効果だと悟り両手を地につけ土下座のような型になり

ハク

「すまん、」

クオンは少し驚いた表情を見せた後ため息混じりに話し始める

クオン

「大変な時だつてわかつてる、ハクと過ごしたいと言うのも我儘だつてことくらい、わかつてるかな。でも私達は、それでも、」

ハクはクオンが何を言いたいのかはわかつていた

オーツに勝てる保証もない、そして三年以上も自分を探しようやく叶った再会、それなのに放ったらかしにしたのは自分の責任だ、ハクはクオンを頭を撫でながら抱きしめる

ハク

「そうだな、こんな自分のためにここまでしてくれるお前達を放ったらかしにするなどやってはいけなかったな。すまなかつた」

そこにファミルイルが入ってくる  
ファミルイル

「あらあら、ダメですよクーちゃん。訪れてすぐ伽に入るなんてがつつき過ぎです、めつですよ」

クオンが涙を拭きながら離れる

クオン

「ち、違うかな！ちゃんと説教しようとしてたんだから！そしたらハクが、ぶつぶつ」  
ファミルイル

「ハク様、オーツとの戦いは予断を許さないでしょうけど夫婦の時間と言うのもまた有限のものなのです。あまり放置をするのも酷というものだと思いますがいかがですか？」

あんなにふわふわしたファミルイルでさえ少し棘のある言い方をさせてしまうほど今回の件は重いようで

ハク

「そう、だな、ネコネやアトウイ達にも謝らないとな」

クオン

「ちよっと、ううん、しばらくは覚悟してもらうかな、頑張つてねハク」

ハク

「ああ、まあ決して嫌な訳ではないしな。人数が多いのは否めんが」

そこにいきなりハクに対してとてつもない殺気が放たれる

そこにはハクオロの制止を今にも振り切りそうなオボロの姿が

クオン

「お父様達?！」

ハク

「なんだなんだ!?!先代!どうなっている!」

ハクオロ

「い、いやあ!すまん!新しく勾玉を作っているのだがオボロがお主の所へ連れて行けとしつこくてな、連れてきたのはいいが着いた途端に殺すとか言い出して、あー!くそ、落ちつけオボロ!」

オボロ

「離せ兄者!クオンを汚しておきながら放ったらかしていた男なぞこの手でぶち殺してくれ!」

ハクはそれを聞くと全てを理解する

ハク

「つまり、聞いていたのかきっきの会話を」

それを聞くとクオンが真っ赤になる、そしてオボロに近づくクオン

クオン

「お父様？娘を心配しているのは痛いほどわかるかな、でもね？」

クオンの口だけはニツコリしている、そう口だけは

クオン

「娘の夫婦生活を盗み聞きして口を出すのは、ちよつとだけ常識が、ナツテナイカナ」

ハクオロは身の危険を感じたのか一人だけ帰ろうとする、が

クオン

「ハクオロ父様？何処にいくのかな？」

隙などあろうはずがない

ハクオロ

「い、いやそろそろ政務に戻らなければ、な」

クオン

「散々ここにサボりにきておきながら言うセリフではないかな、とりあえずオボロ父様はシメておくから次からは来ないようにして」

ハクオロ

「ハイ!!」

ハク

(初めて聞いたぞ、あんな声の先代は、)

そしてオボロを完膚なきまでにシメたあとハクオロと共に元の世界に帰らせた

オボロの懐に事のあらましを書いたのを忍ばせておいたらしくベナウイに見つけてもらおうよう工夫もしたらしい

なんでも罰として過去例に見ない大量の書簡を2人にとの事

決して逃さず見張りも3倍に増やすこと

政務はハクもそれなりにこなしてきたからその苦しきはわかっていた

ク  
どうやらトウスクールにおいてクオンの力は未だに絶大なものなのだと再認識するハク

ハク

「さすがに同情せざるをえんな、だがまあ相手がクオンなら逆らう事もできんか」

怒りという怒りを全てハク、オボロ、ハクオロにぶつけたからかスッキリした様子のクオン、笑顔がとても綺麗だ

ハク

(やれやれ、先代達には悪いがこの笑顔がもらえるだけ役得だな)

フミルイル

「それじゃあクーちゃん晩御飯の支度お願いしますね、しばらくハク様を預かりますから」

クオンは一瞬不満そうな顔になったが、まあ仕方ないかと言ってその場を離れる

その後はフミルイルと茶を飲みながら他愛ない会話が始まり食事の時を迎えたのだった

クオンの作った料理は見た目も味も絶品だった

## トウスクールかエンナカムイか

クオンはハクに限界した時の住まいについて何処がいいか希望を聞いていた

ハク

「ふむ、トウスクールではダメなのか？クオンが正室なのだろうか？」

クオン

「ハクは知らないかな、ベナウイの持つてくる仕事の量を。ベナウイの真の恐ろしさはその強さではなく愛国心ゆえに主を仕事漬けにする徹底さなの」

確かに直接的な面識は僅かしかないがその忠誠心は国を思つてこそなのはわかる

クオン

「もうハクはじゆうぶん頑張つたと思うかな、ぐうたらはあまりさせてあげないけど程々に仕事をこなして穏やかに暮らすならエンナカムイだと思うのだけど、どうかな？」

ハク

「まあ確かに母上やネコネの事、オシユトルの頼みもある以上エンナカムイで暮らすのは妥当だとは思いますが自分の存在を考えるにそれが可能なものかね。皆が黙つてい



たとしてもアンの叔父、そしてクオン、トウスクルの皇女の旦那、八柱のアトウイ、ノスリ、ムネチカの旦那でもありクジユウリのルルテイエ、シスも同様だ。そんな自分がエンナカムイで穏やかに過ごす事は難しいとは思うが」

クオンはそこまで考えていなかったらしくどうしたらいいか考え出す

そこに

フミルイル

「そうですね、しかも皆さん立場も各々ありますから皆でエンナカムイに暮らすと言うのも厳しいかもしれませんが、まあクーちゃんは何があっても引越しそうですけど、ふふふ。そうだったら私も引越す事になりますし」

ハク

「クオンとフミルイルはまあ問題はあるだろうがある意味国から解放されると見てもいいかもしれんが、八柱のうち三柱がエンナカムイにと言うわけにもいくまい」

クオン

「そっか、ならアトウイ、ノスリ、ムネチカに関しては悪いけど交代制をとってもらうかな。そうなることやっぱいエンナカムイが一番だね」

結局エンナカムイを住まいにするのが最も効率が良いと言う事になったわけだが

ハク

「クオンとファミルイルは本当によいのか？先程は無理やり納得したがトウスクルの皇女とお側付きであろう？いかに先代に全てを押し付けるにしても中々難しいように思うのだが」

本来であれば同盟国同士による結婚ともなるとその国の首都とも言える場所に住まいを用意するものだ、だが今回はエンナカムイ、決して悪いわけではないがこういう問題に対しての解決場所ではない。どちらの国からも不満は出るようにも思えた

クオン

「私達なら大丈夫、たまにハクと一緒に帰省するだけでいいと思う、だよねファミルイル？」

ファミルイル

「はい♪先日のようにオボロ様が少々面倒かもしれないけどそこはご愛嬌と言うことで」

ハクは先日のあのドタバタを思い出す

ハク

（まあここにいる以上自分が負けることはないのだろうが、あの殺気が思いのほか本気だったからなあ、現界すれば力が使えなくなる以上強さ的には自分の方が劣っているだろうし本気で殺されかねんな）

クオン

「心配しないでハク、私達はじゆうぶん守ってもらつてるかな。だからその時は私が必ず守つてあげるから。ね」

そう言つてハクの頬に口付けをする

フミルイル

「クーちゃんつたらホントにハク様が大好きなんだから、最初はその気持ちさえ気づいてなくて、気付いたら気付いたで中々気持ちを告げないしでモヤモヤしてたあの頃が懐かしいですねえ」

クオンがワーワーと言いながら顔を真つ赤に染めている

ハク

「まあ兄貴と死に別れた後に自分の目覚めた場所で我慢できず口付けをした以上最初は自分からだったわけだしな、あの時のクオンは今思うと本当になんと言うか、愛おしかつたな。まあもちろん今もだが、フミルイル、貴女にもな」

クオンはもちろんさらに真つ赤になっていたがフミルイルまで軽口で返すどころか頬が赤くなつて顔をそむけていた

ハク

「さて、少し勾玉に力を入れてくる。ゆっくりしといてくれ」

ハクがその場を離れる

クオン

「愛おしかったって、それにハクからの口付け、初めての、うふふふ」

クオンは幸せの絶頂にいた、が

フミルイル

「クーちゃん、だらしないですよ。嬉しいのはわかりますがヨダレ、ちゃんと拭いてくださいね？そんな姿ハク様に見せれないでしょう？」

クオンは一気に現実に引き戻されヨダレを拭う

クオン

「よ、よかった、ハクに見られなくて、フミルイル？この事は、」

フミルイル

「乙女のだらしなない姿をバラすような事はしませんから安心してくださいね、偶然ハク様が見かけてしまったら擁護はできませんけど、うふふ」

場所は少し離れハクの自室

ハク

「しかし見事な作りだなこの勾玉は、これを作るにはおそらく先代の力とウルトリイ殿の力を合わせなければできません。自分の力も上がってきているからか呼び出せる時間

もだいぶ長くなってきた、その分貯めるにはそれなりに時間がかかるわけだが」

ハクは最後に少し愚痴をこぼすと同時に勾玉へ力を送る

ハク

「今日は、八割は終わらせときたいが、いけるだろうか。まあやれるだけやるか」

最終的には六割程度しか貯められず少し後悔するハクだった

## ウイツアルネミテア、ミコト

クオン

「ハクっ！どうして!?息はある、、なのにどうして起きないの!?!」

フミルイル

「特に異常は見当たらないですねえ、眠っている事以外はですが、」

ハクが1人自室へと戻っていた時、いつまで経っても戻ってこないハクに違和感を感じた2人はハクの部屋に向かった。そこにはただ寝ているハクがいただけで2人は安堵した、だがいつまで経っても目覚めない、2人はハクを起こそうと頑張ったが未だにハクは眠ったままであった

クオン

「ハク、、」

フミルイル

「オーツとは最近接触はされてないはずですよ。となればハク様を眠らせ目覚めないほど意識の奥深くまで連れていけるのは、、」

クオン

「ウィツアルネミテア、つ！一体ハクに何を！場合によっては私も！」

フミルイル

「いけませんクーちゃん、もう2度と解放しない、その約束を皆としたのだから」

クオン

「、、でもこのままじゃー！」

フミルイルはハクの顔に触れ容体を可能な限り確かめる

フミルイル

「熱もありません、呼吸も落ち着いているように見えます。もう少し待ってみましょう、ね？」

クオン

「、、わかった、かな」

渋々だがハクが目覚めるのをもうしばらく待つ2人だった

場所は変わりハクの世界

ハク

「ここは、確か無性に眠くなったところまでは覚えていたが、眠くなった？自分が？」

そう、ハクは現在仮にも神である。疲れはするし痛みも感じるが眠くなるということはこの姿になってからは初めてだった。もちろん寝ようと思えば寝れるのだがそれは

することのない時が来た時の時間つぶし以外になかった

そのハクが眠くなった、この事実の違和感に瞬時に気づいたハク

ハク

「こんな芸当ができるのはウイツアルネミテア、あんたしかいないだろう。出てこい、要件はなんだ」

ウイツアルネミテア

「ああ、ようやくここまで力を取り戻せた、礼を言うぞハク、オーツを僅かながら減らした事により我は徐々に力を取り戻している、」

ハク

「な、に、？そんなバカな！オーツを倒すことにより何故貴様が力を取り戻す!？」

ウイツアルネミテア

「くくく、何故？我は今尚やつらに呪いをかけているのだぞ？これはもはや我にも避けられないもの、だがその数が減ればその分の力を自身に使えると言うのは自然な事だとは思わぬか？お前が奴らを倒せば倒すほど我は力を得る、数年前顕現したあの時よりさらに！」

ハク

（バカな、それでは星に封印などできぬ、今のやつ力ならいけると踏んだ上での判断



だった、これでは仮に星に封印できたとしても星の浄化力では意識がないぶんやつのかいには耐えられん、)

ウイツアルネミテア

「其方はよくやつてくれた、ハクオロは奴らを滅ぼすのを躊躇していたからな。そして、今更やめることもできまい？ 奴らの境遇を考えればな」

ハク

(その通りだ、奴らは浄化されなければならん、だがそうすればこいつは、)

最悪な結果が出かねない、ハクは予想してない事態に対して常に最善の行動をとっていた、故にどんな予想外の出来事でも対応できるはずだったのだが

ハク

(これは、どうすればいい、全力を出したこいつを止めれる存在など、いるのか) ???

「させません、アナタのような神、この世には必要ありません」

ハク

(誰だ？ 自分の精神世界にこうも簡単に入れるやつなんて、)

ウイツアルネミテア

「さすがと言うべきであろうな、ミコト、貴様なら来れるだろうとは思っていたが、それ

でも驚いているよ」

ハク

「ミコト、だと？ならばこいつがオーツの」

見た目は女だとわかる、だがそれでも異形の姿ではある

ミコト

「貴方がハク、どうも初めまして。私はミコト、ごめんなさいね勝手に貴方の世界に入つて」

ハク

「くっ、いろいろややこしくなってきたな。だが、」

ミコト

「ええ、敵対している三者がここに揃った。互いの目的を話し合うのもアリ、だと考えます」

ハク

「そうだ、どうやら自分のとこだけ情報が足りてないと見ている、なんとか有益な情報を聞き出したいところだ」

ウイツアルネミテア

「いいだろう、せっかくこの3人が揃っているのだ。ここで3者の立場をなるべく平等

にするのもまた面白いかもしれぬ。それでは我から、今現在我は無力。オーツならびにミコトがいなくなれば完全復活となる」

ハク

「それが一番やつかいだな、自分はオーツを浄化し平和な世界にして自分自身もその世界で暮らす。ウィツアルネミテアを星に封印してな、だが」

ミコト

「ええ、私達を倒せばこの大神はかつてない力で蘇ります。よって私達は仕掛けてこない限り手を出す事を禁じました」

ハク

「この数ヶ月音沙汰がなかったのはそのためか、」

ミコト

「そうですね、ですが私はオーツ達を家族だと思っています。止むを得ずその数を減らす時はありますが」

ガシャグラとヴレイの融合やバムナー達の暴走間近の連中の事だろう

ハク

「だが今後永遠に呪いを退けられるとは限らんだろう、現にバムナー達はそうだった」

ミコト

「ええ、ただの問題の先送りです。ですが完全体のその復活、どうやって止められると？」

そう、止められないのだ。いつか、遠い未来の話かもしれない、だがいつかその日が来る。ウイツアルネミテアの完全復活の日が

ウイツアルネミテア

「今は無力な我だが、勝者はすでに決まっている。どう足掻いてくれるのかな。仮初の神、そして人のなり損ないよ」

ミコト

「ハク、貴方はどうしますか？」

ハク

「予定を大幅に変更するべきなんだろう、が、予定は変えん。オーツは浄化する、ミコト、貴女もな」

ウイツアルネミテア

「で、あろうな。くつくつく、さて我はその時が来るまでまた眠りにつこう」

ウイツアルネミテアはそう言い残し闇に消えていった

ミコト

「聞いていた通りの方でしたね。ですが覚悟しておいてください、私はもちろん、守護者

の力はそちらの想定を軽く超えてくるもの。手加減はしませんよ」

ハク

「ああ、望むところだ。」

ミコト

「それでは私もそろそろ、あ、そうでした。あの人は、元気にしていますか？」

ハク

「やはり覚えているのだな」

ミコト

「ええ、片時も忘れたことなどございません。あの大神の呪いを跳ね除けているのもその想いがあるからこそ」

ハク

「そうか、心配するな。元気にしている、仕事が嫌になってサボったりしているよ」

ミコト

「そうですか、ふふ、あの人らしい。敵同士ですがもし私が倒れた場合は、いえ、なんでもありません。それでは」

そうしてミコトも消えていった

ハク

「ここにきてまたやつかいな問題が出てきたな、しかも最上級のやつかいごとだ、どうするかな」

ハクは考えるまもなく目を覚ました

ハク

「ここ、は、自分の部屋か」

クオン

「ハク、すう、すう、」

ハク

「クオン、目が腫れている、どうやら心配させてしまうほど寝ていたのか」

ガシャン！

陶器の割れる音

フミルイル

「ハク様!! 無事ですか!？」

その声にクオンも目を覚ます

クオン

「ハク! よかった! 大丈夫!？」

ハクは起こった事を2人に話すことにした

## 解決策を求め

ハク

「と、まあそんなわけだ」

ハクは精神世界にウィツアルネミアによって連れていかれ、そこで起こった出来事をクオン、フミルイルに話した

フミルイル

「どんな信仰が揺らいじやいますねえ、個人的にはくーちゃんを暴走させたあの時から許してはいませんけど♪」

クオン

「私もあの力を目の当たりにした時はもうこんなのではないと思っちゃったし、これを機に完全消滅させたいかな」

2人はやはりと言うか、かなりかの大神に不満、いや怒りがあるようだ

ハク

「クオン、フミルイルはちゃんと自分の席に座っているのだからいい加減腕から離れて

自分の席にだな、」

精神世界とはいえまたクオンの知らない場所に行ったからかもう離さないという意思表示が見てとれる

クオン

「嫌、しばらくは離してあげないんだから、覚悟しておくかな」

ハク

「やれやれ、しかし、どうしたものか。まさかオーツを倒すと連動してタタリの浄化どころか根源であるウィツアルネミテアを復活させるとは、いや、だからこそタタリは浄化されるのか、そこまで読み切れなかったな、」

タタリの浄化に伴いウィツアルネミテアが世界にまき散らした呪いは消える、それは事実だ。だがその瞬間ウィツアルネミテア自身が受肉し復活する

ハクは呪いが消えることによりウィツアルネミテアの力が弱くなると思っていた、だがこの考えは見事に打ち砕かれる、むしろウィツアルネミテアの呪いが無くなるということはその力が全てあるべき所に戻ると言うこと、つまりはウィツアルネミテア自身に

ハク

「オーツやタタリは、必要な存在だったと言うことか。だが、」

ハクは暴走間近のバムナー達を見てきた



オーツはいつか必ず暴走する、暴走してしまったオーツはいずれ仲間割れを起こすだろう、最後の1人になってしまえばウィツアルネミテアの力で消すことも容易いはず

つまり自分達がウィツアルネミテアを倒さねばならない

完全復活したかの大神を倒し、2度と復活などできないよう消滅させる。

ハク

「倒すしかあるまい、、なんとしても」

クオン

「策は、あるわけないよね、きつと」

ハク

「今のところはな、だが、神とはいえ無敵と言うわけでもないだろう。あるはずだ、やつに対抗しうる何かがない」

フミルイル

「戻ったらウルトリイ様やおじ様達に聞いておきますね。おじ様達はここに来る事を禁じられてますから」

ハク

（ああ、クオンが出禁にしたんだったか、やれやれ、来ても構わない時に来れないとか、日頃の行いと言うやつか）

オーツの浄化、これはもはや変えられない  
敵しい戦いになるだろう

しかも全てを倒した後はウィツアルネミテアの完全消滅を遂行しなければならない  
ハク

「ヤマトの戦がかわいく思えてくるな、あんなに大変だったつてのに」

クオン

「戦う相手が根本的に違うのが大きいかな、最後のノロイとの戦いに近いかもだけどその強さはあれの比ではないし」

ハク

「あれでもアクルトルカにならなければ負けていたからな、難儀なことだな、あれ以上と言うのも」

フミルイル

「ふふふ、今までのオーツ戦も似たようなものではありませんでしたか？」

ハクはなるほど手を叩く

ハク

「確かにそうだ、どうも策が出なさすぎて失念していたが、ガレイやキシタルと戦った時  
もかなり苦戦していた。どうも自分が神になっている事を忘れがちだな、ん？」

ハクは何かに気づく

ハク

「そうか、神の権能」

クオン

「ハク？」

ハク

「神の権能の一つに神殺しと言うのがある、本来は自身が神としてもはや使えない存在になった時に神の力全てを壊し、己の存在を消すと言う力だが」

クオン

「な、何その物騒な能力、」

ハク

「まあいろいろあつたんだろう神にも、話を戻すが本来これは自身にしか使えない力だ、だが自分は神とはいえ先代から受け継いだだけの人だ、まあ先代も元はそうなんだが。要するに自分は神とは言え不安定な神と言うことだな、受け継ぐ際にいろんな不具合が起こるのもまた必然、先代のように一部引き継ぎをせずそのまま能力を持ち去つたりな」

2人はふむふむと話を聞いている

ハク

「神を相手にするのは考えてもいなかったし忘れていた、今自分はこの神殺し、自身以外にも使うことができる。引き継ぎの際に起こった不具合の一つだろうな」

クオン

「じゃあ!!」

ハク

「危険な事に変わりはない、何かの拍子にこの神殺しを返されたら自分が消滅するからな。完全に仕留めれる瞬間が必要だろう、しかもオーツを全て倒した直後からだからな、かなり厳しい戦いだが」

クオン

「充分かな、勝機が少しでもでてきたなら」

フミルイルも頷く

ハク

「幸いオーツはあちらから攻めてこないと明言してる、この間に準備を整える、特訓も怠らないようにしないとな」

針の穴を通すような希望ではないが、それすら思いつかなかった時より万倍マシである

ハク

「せめて守護者と互角以上の戦いをしなければ希望はないだろう、そしてそれはあのガレイより強いと見ている。こちらから出向く以上次の戦いは守護者を除くオーツの全浄化だ、一気に戦いの難易度が上がるが」

クオン

「望むところかな、私もこの数ヶ月の間でだいぶ強くなったんだから」

フミルイル

「私は元々治療術による援護が主ですけど、治療速度はかなり向上していますのでどんどん頼ってくださいね♪」

皆この3ヶ月間で見違えるほど強くなったようだ、が

ハク

「本来ならばここで召集をかけ、攻めるつもりでした。が、事は思っていた以上に悪い。もうしばらく特訓に費やそうと思う。神殺しもどういったものか試す必要もあるしな」  
2人は慎重に越した事はないとハクの提案を受け入れる

ハク

「ウィツアルネミテアにミコト、か、とんだ猛者揃いだなまったく、」

その日はハクが目覚めたばかりと言うこともあり無理をせず特訓は後日からとなっ



## ユズハ、トウスクル

ハクは神殺しの権能を確かめるため一人特訓の場に行った

ハク

「はあつ、はあつ、これは、キツイな。一度使えばしばらく動けんとは、自分以外に使うとは言え反動がここまでとは」

本来なら自身にしか使えないものを他者に使う、これだけ聞くと不具合とは言えなんとも便利なものかと言いたくなるが、使うための代償はやはりそれなりに大きいものだった。

この代償は強い弱いに関わらず強制的に術者を長時間行動不能にする、一度でも外せば敗北は必須。

ハク

「そうそううまい話でもないと言うことか、さて、戻るとしよう」

ハクはクオン、ファミルイルの待つ結界内へと戻る

クオン

「あ、おかえりなさいハク、大丈夫？あまり顔色がよくないかな」

ハク

「ああ、とりあえず試してきた、が」

ハクは術を使った瞬間に動けなくなった事を話した

クオン

「それじゃあ確実に仕留めれる瞬間じゃないと勝つ事は、」

ハク

「そういう事になるな、どうやら回復するにはそれなりに時間が必要なようだ。他者からの回復もおそらく効くまい」

フミルイル

「そうみたいですねえ、ぱつと見ですが今のハク様は私の回復術では効果はないみたいです。神殺しによって受ける呪いのようなものでしょうか、これはひたすらに時間をかけて解呪されていくようで、」

フミルイルがハクの体を触り神殺しの反動がどういいうものか調べている

ハク

「ここまでのモノとは少々予定とは違うな、できればそれなりに数を撃てればとも思ってたが、、ん?」

ハクが上を向く



クオン

「ハク? どうかした?」

ハク

「兄貴からだ、呼んで欲しいらしいが、3人? いや4人か? まあ、いいか」

ハクは状況が理解できていなかったが特に気にとめず帝と他3人を呼ぶ事に

ハク

「ホノカさんもいるだろうが、他2人は感じたこともない霊気だな」

そこに現れたのは帝とホノカ、そしてもう2人は見た目は若い娘と老婆であった

ピキツ!!

ハクの仮面から映像が流れる、そう、ハクオロの記憶である

ハク

「まさか、其方らは、」

帝

「ほっほっほ、さすが理解が早いとう。そう、お主の考えているとおりの2人よ」

クオン、フミルイルは未だに誰かわからず混乱している

ハク

「お初にお目にかかります。某はハクオロ殿から仮面を受け継いだハクと申す者。貴女

方はトウスクール様、ユズハ様であらせられますな？」

それを聞いたクオンとフミルイルは驚く

トウスクール

「かしこまらなくてもよいのですじやハク殿、この度は偶然にもヤマトの先の帝様と知り合うことができましての。話を聞いているうちに孫娘達やそこにいるユズハの娘までいる事を聞き、さらには会えるとまで言われましてな。死者である身、そんな願いは持つてはならぬと思つてはいたのですが」

ハク

「いえ、よくぞ決心してくださいました。某の力も全てが片付くと使えなくなりまして。それならば可能な限り再会できるのならば叶えてさしあげたいと考えております。クオン！フミルイル！」

ハクが2人を呼ぶがどうしていいかわからずあたふたしている

ハク

(何をしている!?!早くこつちへ、ん?)

ユズハがいつのまにかクオンの前に立っている

クオン

「あ、ああつ、貴女が、」

ユズハ

「ハイ、でも、私には、それを名乗る資格があるかわからない、幼すぎる貴女を残して、だから」

クオンはユズハが言い切る前に抱きついていた

クオン

「母、様!!母様!!」

ユズハ

「クオン、母と、呼んでくれるのですか？貴女を残して、育てる事もできなかったのに、」

それを見ていたハク、そして

ハク

「兄貴、この場を少し頼む」

そう言い残すとハクは一人その場を離れる

帝

「こういう時は行動が早いのが、昔からそこは変わらんやつじゃ」

帝は笑いながら再会を楽しむ者達を見ていた

ハク

「先代、聞こえるな？」

ハクは念話により状況を伝え可能な限り早く関係者を集めるよう頼んだ

ハクオロ

（そうか、また会えるのか。わかったすぐに取り掛かろう、だが相当な人数だ。勾玉が足りない）

ハク

「そこは心配無用だ、皆の勾玉から少しずつ力を別の場所に貯めていたからな。一度くらいなら大人数で来ても差し支えあるまい。先代とオボロ皇は勾玉があるからそつちで来い」

迅速に用件を伝えクオン達がいる場へ戻るハク

クオン

「あつハク！何処に行つてたかな！早くこつちへ来て、母様に紹介しなくちやなんだから！」

ハク

「いや、さつき自己紹介したろ自分は」

クオン

「ちーがーうー、私の夫としてちゃんと紹介したいの。いいからこつちくるかな」

クオンに連れられユズハの前に座らせられるハク

ハク

「再度になりますがハクと申します」

ユズハ

「ハイ、ユズハと申します。ハク様、この度はありがとうございます。こうして娘と会えて、今ではもう愛する人もいて、本当に、ありがとうございます」

ハクはハクオロの記憶の一部を受け継いでいる

その時のユズハはあまりに弱々しく今にも消えそうな、そんな印象だった

ハク

（だいぶ変わった印象を受ける、ハキハキと喋ってるし目も見えているようだ、死者になつたことで病気から解放されていると言うことか。皮肉なものだ）

ハク

「今から先代、いやハクオロ殿含む大勢の知り合いが来ることになっています。久しぶりの再会ゆえ心ゆくまで楽しんでいただきたいと思えます」

それを聞いたユズハとトウスクールは驚く

クオン

「何処に行つてたと思つたらそういうことだったんだ。仕事が早いんだからもう、昔の

ハクとは大違いかな、聞いて母様、ハクったら最初はね、」

ハク

(最初の戸惑いはどこへやら、順応が早いなまったく、)

しばらく親子の会話を聞いていたがそこにハクオロから準備完了の知らせが来る

ハク

(いやー早すぎるだろ！)

それだけ会いたい気持ちが強いと言うことなのか

心の中でツツコミを入れつつもハクオロ、オボロを除く全員をその場に呼ぶハクだった

## 再会（ハクオ口編）

クオン

「それにしても感激かな、あのトウスクル様とこうして会えるなんて」

ハクオ口達自分達の国ができた時につけた国名「トウスクル」、それが徐々に広がり今や大国と言つても過言ではなくさらにヤマトとの同盟まで成しているのだ

トウスクル

「どこにでもいる普通のバアさんじゃよ、村を束ねることくらいしかできなかつたね、のう？ エルルウ、アルルウ」

そこにはかつてトウスクルがまだ小国だった頃から、又は国となる前からの知り合い、そして家族達がいた

エルルウ

「本当に、おばあちゃん、っ！」

アルルウ

「おばあちゃん!!」

二人がトウスクルに抱きつく

そしてユズハの方には

オボロ

「久しぶりだな、ユズハ」

ユズハ

「ハイ、その声、お兄様。ふふ、触っててある程度はわかっていましたけど、初めて見ました。お顔」

カミユ

「ユズツち、久しぶり、あー！お肌綺麗！いいなーいいなー!!」

カミユがユズハの顔をプニプニしている

ユズハ

「カ、カミユちゃん、くすぐったい。クスツ、思った通りの顔です。すごく可愛くてそして綺麗な翼」

カミユ

「えへへ、ありがと！アルちゃんはもう少し待ってあげてね。お婆様と再会中だから」

ユズハ

「ハイ、なのでまずは私から、」



ユズハがハクオロの前まで歩み寄る

ユズハ

「仮面をしてなくてもすぐわかりました、ハクオロ様」

ハクオロ

「ユズハ、私は、いや、違うな。久しぶりだユズハ、また会えて嬉しい」

それを聞いたユズハはハクオロに抱きついた

ユズハ

「ハイ、私もです。またハクオロ様と会えて、こうやって触れられて、また別れるのが辛くなるほどに、」

ハクオロ

「なに、あと数十年もしたら私もそちらに行く。また会えるさ、だから今はこの再会を互いに喜び、分かち合おう」

ユズハは何も言わずただ頷いていた

オボロ

「兄者よ！そろそろ俺にも妹との、うぶ！」

クロウ

「今は二人だけにしてやんねえ、時間はあるって話なんだからよ。ねえ大将！」

ベナウイ

「ええ、無論帰つた際にお二人には少々缶詰になつてもらいますが」

おそらくはこの場を設けるためにハクオロがかなり無茶な条件を飲んだと思われる、当然オボロも同様なのだろうが

ハク

（なるほど、この場であつても中々にブレてないな。あれが噂に聞くベナウイか、頑張れよ先代）

そしてトウスクール達はと言うと

トウスクール

「本当に大きくなつたねえ、お前達に看取られてなんの悔いもなかったが、また会えるのは本当に嬉しいねえ。それでもあの後は大変だつたらう、村人全員が来た時はびっくりしたもんさ」

エルルウ

「うん、でもハクオロさんが本当に頑張つてくれてて、」

そう話してる内にハクオロがユズハ、オボロと共にやってきた

トウスクール

「ふむ、久しぶりじやのオボロ、ドリイ、グラアよ。似合わん髭はまあこの際置いておく

としようかの」

オボロ

「トウスクール様、お久しぶりでございます。このオボロ、あの時あの場にいなかったことを今でも、」

と言いかけた時杖で頭を殴られるオボロ

オボロ

「痛っ！な、何を!?!」

トウスクール

「お前がいようがいまいが結果は変わらんかった、それに多大な犠牲を払ったとは言えあの時生きていれば今あるトウスクールと言う国はなかったはずじゃ。そうであろうハクオロ?」

ハクオロ

「しかしそれでも、この場にいる皆には納得できるものではありませんでした。その気持だけは変えられないのですよ、トウスクールさん」

トウスクール

「やれやれ、お主も相変わらずじゃのう」

皆が再会を喜び今を楽しんでいる。ハク、帝、ホノカはそれを見ながらハク達はハク

達なりに盛り上がっていたが

クオン

「もうハク！いつのまにあの場から離れちゃっててくれるかな！夫婦なんだから貴方も来るの！」

こうなると帝やホノカはクオンの味方になるためハクはその場から連れさられていくのだった

帝

「あやつも大変じゃのう。なんとか現界させてやりたいところじゃが、ホノカよ、あれの準備はまだかかんの？」

ホノカ

「ライコウ様とウオシス様が急いでやってくれていますがいかんせん数百年ともなると時間がかかるようで、」

帝

「ふむ、まだ少し時間がかかるか。じゃが成功すれば」

何やらハクの助けになるために色々動いてる帝、ホノカ達

帝

「さて、余達は先に戻るとしよう。あの者達の再会の場ゆえあまり邪魔もできまいて」

ホノカ

「ええ、それでは我が君、こちらに」

そうして帝、ホノカは戻っていった

ハク

(先に戻ったか。一言くらいは残していけよ、)

そしてハクはクオンに連れられ皆がいる場まで来る

クオン

「ふふ、現界してからのはずだったのにこの場で報告できちやうねハク」

ハクも腹を括ったのか皆に挨拶をする

オボロ

「ふん、俺はまだ認めておらんぞ！とりあえず一発は殴らせてもらわんとだな!!」

コツン！

オボロ

「痛っ！トウ、トウスクール様!?!」

トウスクール

「まったくお前はそういう所はまるつきり変わつとらんう。ユズハ、エルルウ、アルルウ、ハクオロ、この場にいる者全員が認めるほどの男になんの不満がある？手塩に育

てた娘が巢立っていくのは喜ばしい事ではないか。醜い嫉妬はおよし」

ユズハ

「兄様、クオンは親の道具じゃないから、この子が決めた殿方を信じてあげてほしいです。認めないから殴るなんて、そんな兄様は、嫌いです」

オボロ

「ぐはっ!!」

ハク

（妹に嫌いと言われるのはさすがにショックだよなあ、自分もネコネに言われたら立ち直れん自信がある）

さすがに同情したのかハクが助け船を出す

ハク

「まあまあ、オボロ殿も色々複雑な気持ちなんだろう。一方的に殴られるのはさすがに御免被りたいが手合わせという形で溜まった者を発散させてはいかがでしょう?」

それを聞いた瞬間オボロの目に光が戻った

オボロ

「乗った!それならば皆も文句あるまい!!」

ハクからの提案だからか渋々だが納得する一同

ハク

（やれやれ、やはり乗ってきたか。さて、それなりに頑張るとしますか）  
ハクとオボロの対決が始まろうとしていた

## オボロとの対決

ハクはオボロと戦うため修行場へと来ていた  
無論ハクオロやクオン、ユズハ達も来ている

ハク

「さて、国を築き数多くの戦を経験してきたほどの猛者だ。力を使わない状態を考慮すると本気を出さねばな」

離れた所でハクオロ達が見ている

ユズハ

「二人共大丈夫でしょうか、心配です。兄様はどうして、」

ハクオロ

「オボロもすでにハクを認めているよユズハ。だがあの男はこの上なく不器用だからな、何かしらのケジメをつけなければしこりが残るのだろう。ハクもその事を理解しているからこそ対決という形で皆に納得させたのだろう」

そう、オボロもまた馬鹿ではない



仮にも一国の皇だ、人を見る目は充分ある。ハクオロが国を築く前から兄と呼んでいた事からもそれは明らか

そのオボロが未だにハクに対してあの態度なのだ、やはりケジメが必要なだろう。ユズハに先立たれ、託された娘だからなのかハクオロを認めた時より厳しいのもわからなくもない

ハク

(まあ、それを抜きにしても皇女との婚約だ。国としてかなり重要な案件にもなる)

クオン

「ハク、、 力を使わないって、大丈夫なのかな、、」

ハクを心配する者がやはり多い、神の力を使えばそうでもなかったかもしれない。しかし相手はあのオボロ、今やベナウイですらそう簡単に彼を負かす事はできない

オボロ

「力を使わない、ふん、俺も舐められたものだと言いたいところだが、、」

ハク

「クオンとの事を認めてもらいたいただけだからな、勝ち負けではない、だろう?」

オボロ

「その通りだ、許せよ。貴様に非はない、あるとしたら俺だ。いくぞー!」

2人の戦いが始まった

やはり力を使わない状態ではかなり押されるハク

ハク

(なるほど、っ！やはり素の力ではかなり差があるな、だがっ！)

ハクが神の力を使わないのにもう1つ理由があった

それは素の自分の力を確認すること、今まで何かと強化状態で戦っていたハク、獣型を倒してた時でさえ神の力を少しは使っていたからだ

だからこそ元の力を確認しておく必要があった、オーツを、そしてかの大神を倒すために

ハク

(所々隙を見せているが、すべて罠だな、中々に面倒だ)

オボロ

「、、、ふん、なるほどな。眠りから覚めてわずか数年でここまで強くなるか。確かに驚異的な成長速度だ、ならば1つ上げるぞ」

ハク

「なっ、!?!」

オボロの速度が上がる

ベナウイ

「さて、ここからが本番ですね」

オボロがハクに攻撃を連続で当てていく

クオン

「ハクっ!!」

クオンがハクに駆けようとするがハクオロによって止められる

クオン

「離してっ！ハクがっ、」

ハクオロ

「信じてやるのだからクオン、オボロを、そして何よりハクを」

そしてオボロが最後の一撃を繰り出そうとしていた

オボロ

「くらえ!!」

ハク

「っ!!」

ハクはオボロの最も力の乗った一撃をひたすら待っていた、その一撃を見極める目だけは数々の強敵と戦ってきたからこそ自信をもっていた。そこにカウンターを合わせ

る。その威力は自身の力に相手の勢いもプラスされる、だがこれは自身も最大の一撃になるため外せば大きな隙を生む、ハクはそれを承知の上でカウンターの一撃を放つ

オボロ

「がっ、はっ!!」

オボロの顔面にハクの拳がめり込む

ハク

「はあっ、！はあっ、！どう、だ!？」

オボロはその場で倒れ起き上がるとはしなかった

オボロ

「、、、くくく」

ハク

「、、、終わった、か」

オボロ

「ハハハハ!!見事！見事だったハク！さすがはクオンの認めた男だ！」

そう、殴るだけでは駄目だったのだ、自分を殴り飛ばしてこそ息子と認められる。対決を提案しそれすらも成し遂げた、これでクオンを任せられる。オボロはハクを心から認める事ができたのだ

オボロ

(まあ、あのまま勝つてたとしても認めてはいたのだろうか、な、)

ハク

「はあ、はあ、とりあえず、はあ、戻るとしようか、結界内であれば、はあ、はあ、回復できるしな、」

ハクの疲れようが何やら尋常ではない、神の力に慣れすぎていたのか素の自分の制御ができなかったようだ。

一同は結界内に戻りハクは自室にて休憩を、クオン、ファミイルはそれに付き添う形に

オボロはと言うとすぐに元気になりユズハ、トウスクル、エルルウ、アルルウ、カミュ、ウルトリイ等に散々説教されていた

トウカ

「力の差はそれなりにあったはず、それを覆すとはやはり、」

カルラ

「それはどうかしら、殺す気のない攻撃ならばただ痛みを耐えればすむ話、最初から殺す気で攻撃していればまた別の結果になっていたのではなくて？まあ今回に限ってはそれはありえない話なのだけけど、」

戦闘特化型とも言える連中はまた別で話をしていた

場所が変わりハクの自室

ハク

「すまん、力を使わない状態でどこまでやれるか今後のためにも確認しときたくてな」  
クオン

「今回はお父様の無茶に付き合ってくれただけなんだし謝らないで、ありがとうハク、  
これでお父様も認めてくれるだろうから」

クオンがハクの手を握りジツとハクを見つめている

フミルイル

「ハイハイ、クーちゃん？ちよつとハク様の体調確かめますからどうぞいてください？」

クオンがムーつと言いながらその場をフミルイルに譲る

フミルイル

「、どうやら力を使う前提の動きを力を使わずに行なっていたために起きた症状のよう  
で間違いないですね。これは下手したら強化の術より体に負担がかかるものですから  
今後は気をつけてくださいね」

フミルイルがそう告げると皆にハクの容体を伝えるためその場を再びクオンに任せ  
る事に

クオン

(やった!)

クオンが再びハクの手を握り見つめる

ハク

「ク、クオン? そんなに顔を見てどうしたのだ? 何かついてるのか?」

クオン

「ううん、見たいから見てるだけかな。ハク、最後の一撃、とてもかっこよかった、よ」

ハク

「ハハ、さすがに生身であのオボロ殿に勝つにはあれしかなかったのな。決まったのは喜ばしいことだがそこに至るまでは無様な姿だったろう」

クオンが首を横に振る

クオン

「そんな事ないかな、とても、とても素敵だった。ハク、大好きだよ」

しばらく2人は手を握り会っていた

オボロ

「そうか、無事だったか、」

ハクオロ達はハクの無事を聞くと一気に緊張が解けたのかその場に座り込んだ

トウスクル

「オボロよ、あのような事二度とするでないぞ。気が気ではないわい、まったく」

ユズハ

「無事でよかったです。クオンもきつとベツタリなんでしょうね、ハクオロ様、せつかくですから私達も」

ユズハがハクオロの腕にしがみつくと、せつかく会えたこの機会に可能な限り甘えたいのか、しかしそれを見てものすごい形相の女が一人、そう、もちろんエルルウである

エルルウ

「ハクオロさん？せつかくの再会だからってちよつと距離、近すぎませんか？」

ハクオロ

「エ、エルルウ？今回ばかりはその、だな」

元の世界に戻った時どうなったかはもはや語る必要もないだろう

トウスクル

「二国の主とは言えあまりハメを外すでないぞ、暴君になればいずれ滅ぶのは必定じやからの」

ハクオロ

「も、もちろんですよ」



こうしてこの奇跡の再会はまだまだ続くのであった

## 助言

トウスクール

「なるほどのう、そこまでの大事になっておったか。かの大神がそのようなものだったとは」

トウスクール、ユズハは今ハクヤクオン達の直面している事態の説明を受けていた

そしてハクオロ達もまた新たに発生した問題、ウィツアルネミアの完全復活の情報を聞き驚愕していた。

ハクオロ

「オーツは浄化されなければならない、だがそうなるとアレが復活、か。まったく、こちら側に利する点が皆無とはな」

そう、オーツ側からするなら実力的にも上であり自ら攻め入る事もしなくなったのだから迎え撃つだけでいい。

ウィツアルネミア側は言わずもがな、ただ待てばいいのだ

一方でハク達はオーツの守護者、そしてミコトに対して力不足なのにこれらを全浄化しなければならぬ、そして仮にそれが成ったとしてそこからさらに完全復活したウィ

ツアルネミテアを倒すと言う一番大変な立場にいるのだ

ハク

「ウイツアルネミテアとオーツが潰し合うなんてのは不可能、ん？」

本当にそうだろうか、確かにオーツがいるからこそウイツアルネミテアは力を制限され、復活できないでいる

だが復活に足る力だけを戻し残りのオーツをこちらに付かせる事ができれば、

ハク

「厳しいか？ウイツアルネミテアが消滅すればオーツ自体もおそらくは浄化される、それを考えるなら自分達の敵でいる方が生きながらえる可能性は高いからな、」

キシタルならまだしもそれを全オーツに求めるのは難しいだろう。

トウスクル

「何事も話し合えるならそうした方がよいものじゃよ。全体を味方につける時は頭同士で話し合うのが道理じゃて」

ハクはそれを聞きある作戦を構築していく

ハク

「ミコトと、取引する必要があるな、受け入れてくれるかはわからんが」

ハクオロ

「そうくるか、成功率で言うなら無いに等しいぞ」

ハクオロはハクが何をするのか瞬時に理解する

ミコトを説き伏せる

ウィツアルネミテアが復活に足る分のオーツを犠牲にし、復活したウィツアルネミテアを残ったオーツと共に倒す

ハク

「相応の力を示し、なおかつ最終的には自らの浄化を全員に認めさせなければならぬ、が」

どんなに力をつけようがオーツ、ミコト戦の直後にウィツアルネミテア戦など無理がある。それはガレイと戦ったハクとハクオロ、そしてガレイの強さをほんのわずかでも見たクオンには分かっていた。

クオン

「ハク、それじゃまさか、」

ハク

「ああ、ミコトと自分が対決し勝利する。おそらくこれが最善策だろう」

しかし

ハク

「自分がオーツの頂点にいるミコトに勝つ、か、正直それだけでも現実問題不可能に近い、」

不安が顔に出ていたその時背中をポンつと叩く者がいた

オボロ

「しゃんとしろ、俺がようやく貴様を息子と認めたのだ。最終決戦となれば俺たちも行く。すべての決着をつけるためにな」

クオン

「そうだよハク、私達はその場では見てるだけかもしれない。でもハクはいつだって道を切り開いてきたかな、だから大丈夫。私達もウィツアルネミアが復活したら全力で成すべき事を成すから」

ハク

「そうか、そうだな。現状これ以外の道はない、気落ちなどしている場合ではないな。トウスクール様、助言感謝致す。希望が見えてきた気がします」

トウスクール

「なに、難しく考えるところでも簡単な事を忘れてしまうもの。ワシじゃなくても誰かが論じたことじゃろう」

神殺しの権能は1度使えばハクはもう動けなくなる、そのため味方は多いほうがよ

かったのだ

ハク

「残る問題はあと一つだな、」

クオンはまだ何かあるのかと言う顔をしていた、そこに

ベナウイ

「かの大神が復活するにあたりどれだけのオーツが犠牲になるか、ですね」

ハク

「ああ、完全復活は文字通り全てのオーツ、そしてミコトの浄化だが最低限の復活にはどれだけの必要か、だな。おそらくだがミコトと自分であれば中途半端な状態でも本体を呼び出せるはずだ、本体さえ倒してしまえば」

クオン

「やつと、やつと希望が見えてきたかな。絶対ハクを連れ戻してみせるんだから」

ハクオロ

「ミコトとの交渉、私にも参加させてはくれまいかハク、逆効果かもしれないが、」

確かにその可能性もなくはないが

ハク

「いや、助かる。先代がいなければこちらの条件はおそらくのんではくれないだろう」

まさか良かれと思ひ用意した再会の場で攻略の糸口をつかむ事になるとは思ひもしなかつたハク

ハク

(まあ、先代はこちらに利する点がないと言つたが、人数が集まりアイデアが出ると言つた点では十分こちらの利点とも言えるな。死者すらも含まれているのだから)

ハク

「さて、少し勾玉に力を送ってくる。皆の者はまだ時間がありますゆえ存分にお過ごしただきたい」

フミルイル

「それでは私もお手伝いさせていただきますね、うふふ」

ハクとフミルイルがその場を後にする

クオン

「フミルイルつたらちやつかり自分の居場所確保しちゃつて、ずるいかな、もう」  
不貞腐れてるクオンを抱きしめるユズハ

ユズハ

「それなら今だけは母の相手をしてくださいクオン、もつともつと話したい、貴女の事を、貴女が愛したあの人の事を、ね」

最終決戦も近づきつつある中、この機会もまた大事な大事な時でもある。クオンは家族に囲まれとても楽しそうにハクや仲間の事を話すのだった



## ハクの覚醒（前編）

事はトウスクルの提案からだった

トウスクル

「ハク殿、オボロとの手合わせからそれほど時間は経っておらぬが、その力、存分に奮つてみてはいかがか？ここにはそれに耐えきれぬ猛者が揃つてますからのう」

確かに、

ハクオロの指揮による一騎当千の猛者達による猛攻はハクにとってこの上ない特訓にもなる

ハク

「しかし危険もありましょう、万が一という事もありえる。せつかくの再会の機会故にあまりそういった事は避けたいと思つていたのですが、」

トウスクル

「なにもただの特訓のために提案したわけではないですぞ、ユズハとこの老いぼれの力をもつてその神の力に少し後押しができるかもしれないと思ひましたの。伊達に長い事死者でいたわけではない故、いかがかの？」

なにやら考えがある模様、そうまで言われてはハクも断る理由がない。実際問題ミコトや守護者と戦うには力不足である、やれる事は何でもやっておきたい

ハク

「では、お願い致します。正直これ以上はどうやって力をつけるか迷っていたのも事実ですから」

ユズハ

「本来ならハクオロ様にお渡しする予定でした、相当危険な力ですのであまり気が進まないのですが、事情が事情なので、」

どうやら危ない代物のようだ

ハク

「まあ仕方ありますまい、このままでは圧倒的に不利な戦いになるのは火を見るより明らか、その差を少しでも縮める事ができるならいくらでも耐えてみせましょう。クオン達のためにも」

クオンがそれを聞いた途端に真っ赤になる

ハク

（そろそろ慣れてはくれんものかね、こつちまで恥ずかしくなるだろ）

トウスクル

「ならば早速取り掛かりますかの、ハクオロや、オボロと腕利き達をここへ」

ハクオロはトウスクルの言われた通り皆を集め戻ってくる

ハクオロ、ベナウイ、クロウ、トウカ、カルラ、ウルトリイ、オボロ、ドリイ、グラア、アルルウ、カミュ、そしてエルルウ

指揮はもちろん遠距離、近距離、術や獣の攻撃、ありとあらゆる攻撃がとんでくる、なおかつ防御面まで完璧、もはやこの連中だけで国が落とせるのではないかと思つてしま

う  
クロウ

「さすがにこのメンツを一人で相手にするとか、冗談がすぎやせんかねえ」

トウスクル

「いかに神の力と言えど分が悪いじやろうな、じゃが一度ハク殿にはその力すべてを使い空っぽになっていただけかねばならん。そのためのお主らじゃ、むしろハクオロ達が負けては困るのじゃよ」

ベナウイ

「なるほど、ならば遠慮は無用、という事でよろしいですね」

ハク

(怖えなおい、)

ハク達は修練場に転移、そして今までに無い最も過酷な訓練が始まろうとしていたクオン、フミルイルは参戦せずハクを心配そうに見つめる

ハク

（目的は自分の力を使い果たす事、この連中ならば耐え切り尚且つ自分を負かす事ができるだろう、）

ハクは強化の術を自身に施す

ハクオロ

「少し痛い思いをするかもしれないが、許せ。ベナウイ、クロウ、オボロ、カルラにトウカ、頼んだぞ」

五人が瞬時にハクを囲み牽制し始める

カルラ

「剣はあの子に渡してしまいましたから、今回は素手でやらしてもらいますわよ。決戦までにはもう一振り用意いたしますけど」

クロウ

「あんなもんをまた作らせられる連中が可哀想になってくらあ、ねえ大将？」

ベナウイ

「クロウ、集中しなさい。油断すると包囲を破られますよ」

余裕がある、だが隙はない。ハクは崩しやすいのは何処か、いや誰かを探していたが、いない、五人ともまるで隙がない。何処かを崩そうとすれば残りの4人が必ず仕掛けてくる、その連携をこの連中は難なくこなすだろう、ハクはそれを確信していた

ハク

(囲まれた時点でかなり動きが制限されている、が)

一つだけ穴があった

5人とも超が付くほどの武の達人であるが、カルラは武器が無くそこをフォローしようとしてトウカが若干寄っている

オボロは1人でなんとかしようとしているからか少し離れ気味、クロウは自分んとこの大将は大丈夫と踏んでいる、ベナウイ本人もまたオボロのいるあたりを崩しにかかると見ているようだ、つまり

ハク

(狙うはベナウイ、ここが最善だがここまでは読まれていると見ていいだろう。なら狙うは)

ハクは振り向きトウカのいる場所へ向かう

他の4人がすぐさまトウカの場所へ集まる、連携が早い

結局ハクは5人同時に相手をすることになるが、本気を出したハク相手に苦戦する5

人

ベナウイ

「くっ、これは」

クロウ

「なんてヤロウだ、俺たちの攻撃を全部捌ききってやがる」

5人の攻撃をなんとか凌いでいるハクだが

ハクオロ

「散！」

その号令と共に5人はその場を瞬時に離れる

カルラ

「すこし口惜しいですけど、仕方ありませんわね。さすがにあれの巻き添えはごめんですもの」

ウルトリイとカミュによる術攻撃がハクを襲う、とてつもない重力によりハクの動きが止まる、その真上にはドリイ、グラアが待機していた

上から降り注ぐ矢の雨、それは術による超重力によりさらに貫通力が上がりハクを襲うのだった

クオン

「ハクっ!!」

トウスクール

「耐えるのじゃクオン、ハク殿は必ずこの試練を乗り越える。信じてあげるのじゃ」

ハク

（くそつ、まさか重力で動きを封じるところか上からの攻撃の威力を底上げしてくるとはな、この矢、完全に貫通してるな、いててて）

矢の攻撃が終わると重力も解かれたがすぐさまアルルウを乗せたムツクルが攻撃を仕掛ける

畳み掛けるように先ほどの5人も続けざまにハクに攻撃を仕掛けていく

恐ろしいまでの完璧な連携、ハクはもう傷だらけで満身創痍なのだが、

ハク

「意識、、は、ハッキリしてるんだが、、な、、痛くてもう気絶したいくらい、、だ」

トウスクール

「ユズハ、準備はよいか？」

ユズハ

「はい、トウスクール様。いつでもいけます」

トウスクール

「ハクオロや、皆を下がらせるのじゃ。あとは任せよ」

ハクオロが皆を引き上げさせる

ハクオロ

「後は頼みます、お気をつけて」

トウスクル、ユズハによるハクへの最後の試練が始まろうとしていた



## ハクの覚醒（後編）

ハクは持てる力をすべて出し切ったがそれでもハクオ口達には届かなかつた

当然と言えば当然だ、彼等は神が相手であつてもそう簡単に負けるような連中ではない、むしろその類で言うなら専門家と言つてもいいくらいである

ハク

「はあつ、はあつ、」

ハクは立ち上がるとうとするも叶わずその場に片膝をつき自身の負けを認めた

ハク

「さすがは先代率いる猛者達、だな、ここまで完膚無きまでにやられるとは、」

ハクの状態を心配するクオン、フミルイル

ハクに駆け寄ろうとするが

ハクオロ

「行つてはならない、ここからが本番だ」

クオン

「でも！でもハクがつー！」

そこにユズハがクオンを抱きしめる

ユズハ

「安心してくださいクオン、確かにこの儀式は危険なものです。でも私とトウスクール様で必ず成功させます、そうすればハク様もすぐ元気になりますから」

ユズハはそう言うと共に先にハクの元に向かったトウスクルの後を追っていった

クオン

「お母様、！」

そしてハクの元にトウスクールが先に着くと

トウスクール

「こっぴどくやられてしまいましたな、しかしその状態でなければ成功いたしませぬ、ユズハの抱えていた病、そしてそれはあのクオンにも当初はかかっていた病ですじや。我々には病でしかありませんが、神である其方にとってはむしろ力に変わる。それを御せるかどうかはハク殿にかかっておりますが、この老いぼれとユズハが支えますゆえどうかクオン達のためにも乗り越えていただきたい」

ハク

「なるほど、しかし、死した以上その病はもはやユズハ様のもとから離れているはず、

それをどうやって？」

そこにユズハが到着する

ユズハ

「その仮面はハクオロ様の記憶も見れると聞きました、ハク様は過去の私と比べて違和感を感じませんか？」

ハク

「む、そうだな、弱々しい雰囲気であった過去の貴女と比べるとその、いささか活発になったと言うべきか」

ユズハ

「ふふ、そうですね。私は病で命を落としました、そしてそれを抱えたまま死者の国へ。です。で実はまだ私の中にいるのです、様々な力を持った何かが。それを死したあとにトウスクール様達の助けもあり御する事ができました。死してから元気になると言うのも不思議なものですけど、それから少し性格まで変わってしまったように」

ハク

（様々な神が衝突することで体を蝕む、だったか？正直解明されていない病ゆえそのような理由になっただけかと思っていたが、、）

トウスクール

「まああれこれ説明したところでやる事は変わりませぬからの、早速始めさせていたただこうかの、ユズハ、準備はよいかい？」

ユズハはコクンと頷くと手をハクに向けた

ハク

「ぐっ、、！！こ、れは！」

ハクに何かが流れ込んで行く

ハク

「が、、！あ！」

ユズハ

「言ってもたかが病の元でしかない力です、ですがハク様がすでに持っている神の力、その力が弱まっている瞬間ならばこの力をかき消すのではなく取り込む事ができるはず！その力のみを取り込み病となる不純物だけを放出してください！」

ハク

（なるほど、そういう事か、しかし不純物だけを取り除くと言っても、一体どうやって、）

そこにトウスクールがユズハの近くに行く

トウスクール

「見えるかいユズハ？」

ユズハ

「はい、あれが生前私を苦しめていたもの、見えます、病が、病だけが」

そう、ユズハには見えていた

ユズハ

「ハク様、今から私が見えているものをお見せします。取り除く作業はトウスクール様と共に、お願いします！」

トウスクールは粉袋のようなものを取り出す

トウスクール

「今からこの粉を振り掛け病を一時止めます、その隙に力を取り込んでください。そして取り込んだ後は残りの病を本来の力で掻き消せば成功ですじゃ」

ハク

「了解、しまし、た、お願い、します」

トウスクールはそれを聞いてハクに粉をかけた

するとハクは流れ込んでくる力の一部分が止まる事を感じた、その瞬間ハクは今流れ込んでくる力に病がない事を悟り一気に力を取り込んでいく

ハク

（だが、これは、思った以上に多い。急がなければ病が動き出す、なんとも妙な表現だなまったく）

なんとかかすべての力を取り込んだハク

残るはなんの益もない病だけが残された

ハク

「さて、残されたものはもう必要ないな。っしょっと」

病の元はあつけなく消滅、、とは行かず

異形の者と化した

病？

「オノレエエエ、ユルサヌゾ!!ヨクモ！ヨクモオオ！」

病が具現化した？そう感じたハクだがすぐに何かが違うと感じる

ハク

（なんだ、この嫌な感じは、何処かで感じたような、、）

病？

「キサマアアア！キサマサエイナケレバ！ヨクモオオ！ヨクモオオ！ハクウウ！」

ハクの名前を呼んだ、可能性を考えれば知っていても不思議ではない、力だけを取り込み病だけ除け者にした以上激怒するのもまあ頷ける、だがこの怒りはそうではないよ

うに思えた。貴様さえいなければ、この儀式自体はハクオ口である可能性もあった、だがこいつはハクに恨みを持っている口ぶりだ、つまりこれは病の意思ではなく別の何か、

ハク

(これは、病の元が消える瞬間に何かを取り憑いたのか？だとしたらこいつは、)

トウスクール

「これは予想外じゃった、まさか具現化するとは」

ハク

「いえ、これは病が具現化したのではなく、病に怨霊が取り憑き形を成したと言ったところでしょう。自分にここまで恨みを持つてる点からして間違いないかと、トウスクール様、ユズハ様と共にこの場から避難を。この者の相手は某がいたす」

口調が変わるやいなや目つきが変わるハク

ハク

「なるほどな、禁忌を犯すだけあつてしぶとい、だがその姿であるなら遠慮はいらぬようだ、二度と某の前に現れぬよう次は完全に仕留める、覚悟せよガレイ!!」

ガレイ(怨霊)

「ハクハクハクハクハクウウ!!コロスコロス!」

ガレイとの戦いが再び始まる



# 压倒

ハクは怨霊と成り果てたガレイと相対する

ハク

（理性はほとんど無いようだが、強くなってるな。以前より遥かに、だが守護者、いやミコトと戦うのであればこれくらい敵は軽く超えてみせねばな）

ハクは手に入れた力を全身で感じ馴染ませる

病と化すほどの力、本来神は人に対し自ら干渉することはしない。それはこの神も同様、だがそれでも病を引き起こしてしまうほどの力があつた

神々がぶつかり合う、つまりは抑えようとする力と全てを解き放とうとする力が病となつて顕現したものであつた

ハク

（なるほど、その二つの力を完全に自身の物にする事で得られる、か）

ガレイ

「ハクううウウ、シイイイネエエエイ」

ガレイの一撃がハクの顔面に直撃する

が

ガレイ

「!?」

ハク

「確かに以前より力は上がっているようだ、理性がほぼ失われている分戦い方は単調ではあるがな。だがもはやお前では某を倒すことは叶わぬ」

確かに数ヶ月前より特訓により強くなったとはいえあまりにも強くなりすぎていたクオン

「あれが、病の、すごい」

トウスクール

「クオンや、完治したとはいえお主にもあった病、決して体外に出たわけではない。ウィツアルネミテアの力を一度解放してしまったお主なら扱いきれるかもしれぬが、」

ユズハ

「トウスクール様！それは、」

ユズハが動揺する

トウスクール

「わかっておる、本来ならこんな事言いたくはない。じゃが今は力が必要な時。そして

その重荷をハク殿だけに背負わせる、そんな事を我慢できる子でもないじやろう、のうクオン？」

クオン

「もちろんかな、力が全てではない。でもどうしても必要な時がある。私はそれを知っているのユズハお母様、だから心配なのはものすごく分かるのだけど、お願い、」

ユズハは真つ直ぐな目をしているクオンを見てやれやれといった表情をする

ユズハ

「、わかりました。ですがハク様ですらギリギリだったのです、できるだけ安全性を高めるためハク様にも協力していただきますね。つまりあの戦いの後という事、ちゃんとハク様にも承諾してもらおう事、いいですね？」

クオンはおれいを言いながらユズハに抱きついた

ユズハ

「さあ、見届けましょう、今のハク様ならきつと大丈夫でしょう」

ユズハの言った通りハクはガレイを圧倒していた

ハク

「禁忌を使ったがために永遠に苦しみながら虚空を彷徨い続けるしかなかったのだな。ならば貴様は幸運だったと言えよう、病と共に完全に消滅すれば浄化されるだろうから

な」

ガレイ

「ガアアアア!!ギガアアアア!」

ハク

「恨みによる僅かな理性も無くなりつつあるか、さらばだガレイ、死者の国では迷惑かけるなよ」

ハクは鉄扇による攻撃でガレイを切り刻む、そして術による攻撃、ガレイは跡形も無く散っていった

ハク

「なんとか浄化できたか、少し心残りでもあったからな。この件に関してはこれ以上の結果はないだろう」

ハクはこの数ヶ月間浄化もできず永遠に苦しむあの2人をどうしても忘れる事ができなかった、殺す以上何が違うと聞かれれば確かにそうかもしれない、ただの自己満足でしかないのだろう、だがそれでいい、その何が悪い。

少なくともこれ以上苦しむ必要はなくなったのだ、ハクにとってはそれだけでよかった

ハク

「すまん、待たせてしまったな」

ハクは皆の所に着くと

ハクオロ

「成果としては上々と言ったところか、今やると結果は逆になりそうだな」

トウカ

「確かに、四方から攻撃、いや八方からの攻撃でやつと入るかどうか、」

オボロ

「気に食わんが事実だろう、もはや先のような攻撃では返り討ちにあうだろうな」

さすが歴戦の猛者と言うべきか、どうやれば勝てるか議論をし始めた

クオン

「ハク、お疲れ様。さっそくだけど、ちよつと相談があるんだ、聞いてくれないかな？」

何やら深刻な顔で見つめてくるクオン

ハク

「ああ、構わんが？」

クオンからハクがしたように病を力に変える事ができるかもしれない、今後のために

必要だと説明される

ハク

「、ダメだと言いたい所だがな、言っても無駄なんだろう？そもそも自分がそれを止める権利がないのはわかっていているしな。無理はするなど言いたいが、無理をしなければ得られないものでもある、」

ハクはクオンを抱きしめ

ハク

「可能な限り援護する。頑張ってくれ」

クオンは何も言わず頷く

ユズハ

「とりあえず本番は後日にしましょう、準備は万全にしとかないといけませんので」

ハク

「そうですね、勾玉によるここへの滞在時間も以前より長くなってはいますが、今日はそろそろ限界でしょう。再びこの人数を呼ぶにも数日はかかるかと」

トウスクル

「もう一度集まる機会があるのは僥倖ですのう、ほれエルルウ、アルルウ、こつちへ来な

きゃい」

エルルウ

「どうしたのおばあちゃん？」

エルルウとアルルウがトウスクルの側に寄る  
トウスクール

「今日はもうお別れのようじゃからのう、おそらくじゃが会えるのは次で最後、だから抱きしめたくてのう」

トウスクールは力一杯に2人を抱きしめる

トウスクール

「本当に立派になったのう2人共、これからも元気で幸せに、それだけが望み、いいかい?」

エルルウ

「ぐすつ、大丈夫だよオバアちゃん、私、幸せだよ?」

アルルウ

「カミユちくもいる、クーもいる、家族いっぱいいる。だからバアちゃ、心配無用」  
トウスクール

「ふふ、そうかいそうかい。まあまだあと一回は機会があるからねえ。今日はもう帰るとするよ、ユズハ?」

トウスクールがユズハに呼びかける

ユズハ

「あつ、はい、もう少しお待ちください。クオン、しつかり準備するのですよ？再び病を起こすのですからきつと想像以上に苦しいはず、後は、えつと、えつと」

クオン

「大丈夫かなユズハお母様、だから今はお父様の所に行つてあげて？」

ユズハ

「あ、、ハイッ、ありがとうクオン、ありがとう」

そう言うユズハはハクオロの元に走つていった

ハク

「よかつたのか？」

クオン

「まあ少し寂しいけど次もあるし、2人の邪魔をしたくないから、それに寂しさはハクが埋めてくれるでしょ？」

ハクはやれやれと言いながらもクオンを抱き寄せる

ハクオロ

「ユズハ、行くのか？」

ユズハ

「はい、一応クオンのためにもう一度ここに来るのでまた会えるとは思うのですが、今日



のところは、」

ハクオロ

「そうか、まあこちらもそろそろ滞在時間が限界らしいのでな、お互い様だ。本当に、会えて嬉しかった、母親になって、母親らしいユズハを見て、本当に良かった」

ユズハ

「はい、私も、またハクオロ様に、アナタに会えて嬉しかった、仮面のない、素顔のアナタを見てよかった。大好きです」

ユズハがハクオロを抱きしめる、それにこたえるようにまたハクオロもユズハを抱きしめた

滞在時間の限界がきたのか強制的に生者側が消えていく

ハクオロ

「また後日、だな」

ユズハ

「はい、楽しみにしてますね」

そして生者達は元の世界に帰っていった、ハクの側にいるクオン、ファミルイルを除いて

トウスクル

「それではこちらにも戻るとしようかい、ハク殿、後日準備が出来次第呼んでください」

ハク

「わかりました、道中と言うものでもありませんがお気をつけてお帰りください」

そうしてトウスクール、ユズハもまた死者の国へ帰っていった

クオン

「なんか、すごい一日だったかな」

フミルイル

「そうですねえ、なんだか一気に物語の展開が進んだような感じがしますね♪」

ハク

「物語、か、言い得て妙だな。だが確かに、最後の戦いは近そうだな。あの2人がここまで自分に影響があるとはさすがに予想できなかつた」

クオン

「そうだね、そしてそれは私も同じ、かならず成功してハクのとなりに立ってみせるかな」

確かにクオンがこの力を手に入れば勝機がグンつと上がる

ハク

「危険ではあるがな、まあ自分が止められる立場ではないし仕方ないが」

3人はその後他愛ない話をしながらその日を終えるのだった

## クオンの決意

クオン

「……」

クオンは座禅を組みながら目を閉じ集中していた

完治したはずの病、だがそれは己の中の神々が衝突しないよう別々に封印される事によつて成されたものだった

このままでは自分の子ができた時、同じような事が繰り返される可能性が高い。

力を得ると同時に病を完全に消すためにもこの神々を乗り越える必要があるとクオンは気付いた

クオン

（封印は、、そっか、、皆大変だったんだろうなあ、ごめんね、せつかく私のためにしてくれた事なのに、解いてしまうなんて、でも、必要なんだ、私のためにも、ハクのためにも）

クオンは自身の中にある封印を感じ取る、そしてそれを解除できるのはクオン自身だった、それを望む事、簡単な事だったが基本的に病を再びその身になんて事望む馬鹿

はいない

クオンは儀式を行うその時までひたすらに座禅を組み集中する

それをただ見守る事しかできないハクとフミルイル

ハク

「現時点では何もできんのが歯がゆいな、自分がやる時より遥かに困難である事は明白、ウルウル、サラアナにも手伝ってもらおう必要があるか」

フミルイル

「微力ながら私も、治癒術ならお任せくださいね」

ハクとフミルイルが儀式に向け段取りを話し合い可能な限り成功率を上げようとする

そして数時間にもわたる集中状態を終え立ち上がるクオン

クオン

「もう、2人共心配しすぎかな。ウィツアルネミテアをどうこうするわけじゃないんだから」

と2人を安心させるように言うも

ハク

「いや、クオンよ、抑えきれず失敗した話をされても説得力に欠けるぞ?」

クオン

「そ、そんな事ないかな！あれはもう少して抑えきれてた、はず、かな？」

「ファミルイルとハクが互いに深いため息をつきながらやれやれと言った表情をするとクオン

「と、とにかく！今回は必ず成功するんだから！」

それに関してはハクとファミルイルも同じ気持ちだった

ハク

「成功すれば戦力も大幅に強化される、他の皆も以前より遥かに強くなったらしいからな、それに先代率いる猛者達も参戦してくれる、勝機が見えてきたか、」

確かに当初バムナー達と事を構える前までと今では天と地ほどの差があるだろう、そんな戦力でよく戦えると思ったものだが

クオン

「色々見えてきたけど、相手の守護者の情報が未だに無いのが気味が悪いかな、1人はハクの姪という話だったけど」

ハク

「そうだな、守護者の情報は欲しいところだが、いかんせん情報提供者からは何の音沙汰もないからな。おそらくだがミコトには全てバレているのだろう、知ってて今まで泳が

せていた可能性が高いと見ている」

フミルイル

「これ以上は直接相対しない限りは分からないと言ったところでしようか」

ハク

「交渉次第ではあろうな、一蹴されれば全面対決になる。守護者以外のオーツならばもはやそこまで苦戦はしないと見ているがそれでもある程度の消耗は避けられまい」

クオン

「交渉の時期はどうするの？向こうが動かないとは言えあまり長引くわけにも、」

確かに、いつまでもズルズルと先延ばしにしたところで解決しないだろう。特訓するにしてももう数ヶ月は経っている、強ければ強いほど助かるものの何処かで区切りをつける必要がある

ハク

「クオンの儀式が終了すればすぐにも向かう事にする、先代もいる事だしな。同行者は先代、クオン、アンジュ、後は兄貴とホノカさんあたりか」

クオンの儀式が成功した際の最強の2人、ハクとクオン、そしてヤマト、トウスクルの代表であるアンジュとハクオロ、ハクオロに関してはミコトと面識がある事も理由の一つである、そして死者代表の先の帝とお付きのホノカ、交渉をするには文句なしの面

子と言える

ハク

「クオン、成功した際には間をおかずそのまま向かうつもりだが体が万全ではない場合は必ず言ってくれ。クオンの回復を待つ必要があるからな」

クオン

「うん、でも私そこまで必要かな？今聞くとあまり役に立てないような気もするのだけど」

ハク

「相手に納得させるだけの理由、根拠が必要だ。交渉事態は自分と先代で行うがこちらの条件を納得させるためには強さが必要不可欠になる、神の力を手に入れたクオンならば充分理由になるだろうと見ている」

なるほどとクオンは納得する

ハク

「まあ、儀式が成功すればそうなると思うことだ。失敗した時はその体内の神は自分かなんとかしよう」

クオン

「できるの？そんな事が」



ハク

「ウルウル、サラアナ、カミュ殿とウルトリイ殿の力を借りれば可能だろう。ただしそう  
なるとその神の力はもう無くなり力は得られない、だが例え失敗しても気に病むような  
真似は勘弁してくれよ」

クオン

「分かったかな、その時はその時と言う事にしとく。でも失敗は絶対にしない、それだけ  
は確かかな」

自信があるみたいだが根拠は無さそうである

しかしその自信はハク、フミルイルにとつて少なからず安心できる言葉であったのも  
確かだった

ハク

「そうだな、こちらも可能な限り手伝う。さて、あまり悩んでも仕方ないしな。今日は  
そろそろ休むとするか、また明日な2人共」

ちやちやつと去ろうするハク

しかし

ガシツ

クオン

「ハク？私がすごく頑張る時なのに何処に行くつもりかな？」

フミルイル

「いけませんよハク様、クーちゃんが大変な時なのでそれからちゃんと一緒にいてあげないと、もちろん私も一緒にですけど」

やはり無理か、ボソリと呟くハクであった

## クオン覚醒

クオンに封印されている病を力に変える

クオンにとって最大の試練とも言えるだろう、その試練が始まろうとしていた

ハク

「落ち着いているようだな、今更頑張れだの健闘を祈るだのは言わん。ただ、待っているぞクオン」

そう言われクオンはハクを少し見つめた後振り返り試練の場へと向かう

周りにはハクオロを始めトウスクルの面々、そしてアンジュ率いるヤマトの面々、さらには死者の者たち

現状集められる人数を最大限集めた形となる

ハクオロ

「なんと言うか、とんでもないな、この面子ならば何にでもできてしまいそうな気がするほどに」

ハク

「実際可能であろうな、此度の件以外ならばだが」

そう、これだけの強者がこれでもかと揃ってなお勝てる保証はない、むしろ低いまであるだろう

ハクはそう感じざるを得なかった

ハク

（故にクオンの力の解放は成功するに越した事はない、だが少しでも失敗の可能性があったその時は、）

ハクの心配をよそに儀式は始まろうとしていた

ユズハ

「いいですかクオン、落ち着いて一つ一つ対処していけば必ず成功しますから、母を、トウスクール様を信じてね」

クオンは笑顔で頷く

トウスクール

「では始めるとしようかの」

クオンの意思で病の封印は解かれたその瞬間、待っていたとばかりにクオンの中から力が暴れだした

封印されて解放されたからかユズハの病とは比べ物にならないくらいに大きく禍々

しい力、それはもはや周りの者達が目視できる段階にまで達していた

ハク

「溢れ出す力が目視できるほどか！自分の時とはまるで違う！こんなのはいくらクオンでも!!」

ハクが予想外の出来事によりクオンに近寄ろうとした瞬間、クオンは手を前に出し

クオン

「大丈夫だよ、まだまだいける、からっ」

そう言いハクが来るのをとめた

ユズハ

「トウスクール様!」

トウスクール

「ふふ、強い子じゃ、ならばこの老いぼれも気合を入れんといかんやつ!」

次の瞬間トウスクルの姿に変化が起きる

ハクオロ

「若返って、いるのか?」

トウスクール

「いくよユズハ!しっかりついてきな!」

トウスクルとユズハが暴れている力の大半を押さえ込んでいた  
ユズハ

「クオン、後は少しずつ力を取り込みなさい！」

それを聞いたクオンが暴れている力の一つを自らに宿し始める

しかしトウスクルとユズハもかなり疲弊している、この状態を長時間維持するのは無茶が過ぎると判断したハクとハクオロ

ハク

「ウルウル！サラアナ！そしてファミルイル！力を貸してくれ！2人の負担を軽減する  
！」

ハクオロ

「ウルト！カミュ！」

2人の指示によりトウスクルとユズハの援護を始める5人

そしてハクはクオンの元に向かう

クオン

「ハク、私は、大丈夫、だから」

ハク

「止めにきたわけではない、クオンなら必ず成功するさ。だが少しだけ手伝わせてくれ」

そう言つてハクはクオンの額に人差し指を当てる

ハク

「気休めにしかならんがな」

そう言い残してハクは再びユズ八達の援護にまわる

クオン

（ああ、痛いなあ、辛いなあ、でも皆が手伝つてくれてる。ここで頑張らなきゃ、意地を見せなきゃ、ハクの妻として！失格、かな！）

次の瞬間

トウスクル

「これは！とんでもないねえ、」

クオンが一気に力を取り込み出した

ウルウル、サラアナ

「有り得ない、少しづつ取り込むだけでも激痛が襲うはずです」

だがクオンは目を閉じまるで寝ているかのように落ち着いていた

クオン

「うん、ありがとうかな。皆これから仲良くね、これからもよろしくね」

クオンの目が開いた瞬間

一同

「!!」

皆が瞬時に気付いた、クオンの力が今までとは比べ物にならないくらいに上がっている

シノン

「おおー! あねごー! すごいぞー! ぶわーって! ぶわーってなってるぞー!」

なんならシノンまで違いがわかるほどに

ハク

「これはすごいな、下手したら自分より、」

ユズハがクオンに駆け寄る

ユズハ

「驚きました、まさか一気に取り込むなんて、大丈夫でしたか?」

クオン

「うん、ごめんねユズハ母様。私は大丈夫」

そしてクオンからユズハに抱きつくと

クオン

「ありがとう、会えただけでもすごく嬉しかったのにハクの力になれるようにしてくれ



て

それを聞いた瞬間ユズハは少女のように泣いてしまう

トウスクール

「娘にああ言われちゃ泣くのも仕方ないだろうねえ、苦労した甲斐があつたよ」

その姿に真つ先にエルルウが突つ込みだす

エルルウ

「つてかお婆あちゃん何それ!?!すっごく綺麗、じゃなくて何で若返つてるの!?!」

トウスクール

「まあ死者だからねえ、力を最大限使いたい時は相応の若さが必要という事さね、少しばかり口調まで若返つてしまう時があるのが欠点じゃの。恥ずかしいつたらないよ中身はただのバアさんなのに」

アルルウ

「そつくりだけど、なんか負けた気分」

トウスクール

「ふふ、ならもつとそつち方面も努力あるのみだねえ。諦めるのはまだまだ早いんじゃないかいアルルウ?」

アルルウ

「んっ！分かった」

そしてハクの方を向くトウスクール

トウスクール

「どうです？クオンの仕上がりは」

ハク

「想像以上、としか言えませんな、正直ここまでものとは」

トウスクール

「まあ本来は力に変えるなんて思いもしない代物ですから、それでもワシも貴方と同様、想像以上でした」

クオンが小走りでハクの元にやってくる

クオン

「ハクっ、その、ちゃんとやれたよ？」

ハク

「ああ、ちゃんと見てたさ。だが一気に取り込んだんだ、疲れていないか？」

クオン

「うん、むしろ元気すぎるくらいかな？」

ハク

「そうか、ならば、ファミイル達の回復が終わり次第向かうとするか」  
オーツへの交渉のためついにハク達が動きだす

## 前夜

ハク

「ようやく準備が整ったな」

ハクの力が増しくオンの力も借りる事により勾玉を使わずに全員を時間制限なく呼びだす事に成功する

ハクオロ

「無駄ではなかったとはいえいらなくなったと言うのも寂しいものだな」

ウルトリイ

「ふふ、喜びたい所ではありませんが確かに寂しい気持ちはありますね」

勾玉は主にハクオロとウルトリイ2人で作った物、数も相当数がある

ハク

「いや、まだまだ使い道はある。憶測の域を出ないゆえ今はまだなんとも言えないが」  
しかし全員が集まるのは初めての事、各々話が尽きないのか中々本題に入れない

ハク

「うゝむ、どうしたもんかね、」

クオン

「まあ死者もいるこの場は奇跡みたいなものだから、今日くらいは多めに見てもいいんじゃないかな。私とハクで時間制限の壁も越えられたし」

確かにこの奇跡を早々に終わらせるのもどうかと感ずるハク

ハク

「そうだな、それならば、皆！聞いてくれ！」

皆一斉にハクの方を見る

ヤクトワルト

「お、早速行くかい旦那？こっちはいつでも行けるじゃない」

オシユトル

「だな、死者側も準備できてるぜ」

ハク

「ああ、本来なら今すぐオーツの場へ行くつもりだったが、せっかく時間制限もなく皆を呼べるようになったのだ、今日一日は皆この場で好きに過ごしてくれ。決戦は明日とする」

それを聞いた一同は一瞬戸惑いながらもせっかくの機会を楽しむ事にしたのだった

帝

「しかしムネチカよ、お主も変わり者じゃのう。まあそれはそうと余の義妹になつたわけじゃがどうじゃ？この際お兄さんと呼んでくれても構わぬぞ？」

ムネチカ

「そ！そんな恐れ多い事小生には、」

アンジユ

「ムネチカよ、むしろそこで遠慮する方が失礼にあたるのではないかの？」

ウオシス

「そうですね、家族になつたのならそれくらいは自然とこなしてほしいものです、ここでは堅苦しい決まり事があるわけでもないのですから」

アンジユ、ウオシスの兄妹がムネチカを弄りだす

ムネチカ

「なつ、ひ、卑怯であるぞウオシス！聖上まで！」

アンジユ

「何の事かのう？ウオシス兄様、余はムネチカお姉様が何を焦っているのかわからぬのじゃが？」

ウオシス

「ええ、私もわかりかねますねアンジュ」

なんとも息が合っている2人

ハク

(あの兄妹息合いすぎだろ、)

エルルウ

「ユズハちゃん？さすがにくつつき過ぎじゃないかなあ？」

ユズハ

「最後の機会くらい譲って欲しいですエルルウさん、ハクオロさんは皆のハクオロさんです。ですから機会は平等にしないとダメです」

エルルウ

「うぐつ、で、でも！」

トウスクル

「エルルウや、譲っておやり。食い下がるとオボロみたいに見えるよ」

それを聞いた途端肩を落とし引き下がるエルルウ

カルラ

「ふふ、主様も罪なお方です事。ウルト、トウカ、こつちにいらつしやいな。こつちはこつちで楽しみましょう」

クロウ

「あの頃と比べてずいぶん腕を上げたじゃねーか！」

ヤクトワルト

「そう思ってたんだがねえ！それでももついでいくので精一杯じゃない！」

ベナウイ

「中々に読みづらい動きではありますが、まだ少し荒さがあるようですね」

オウギ

「ヤクトワルトさんもヤマトで随分と腕を上げましたからね、それを上回るクロウさん、そして貴方は本当に高い壁である事を実感してしまいます」

皆それぞれ楽しんでるようだ

アトウイ

「なあなあおにーさん？ちよつと修練場借りてもいいけ？」

ハク

「もちろん構わんが特訓か？」

アトウイ

「そうそう、ちよつとクオンはんな」

クオンとの特訓、いまやクオンはハクと大差ない力を持っている。そのクオンを相手



に1人で戦う、無謀にも思えたがアトウイはいつもその無謀にも思える相手に戦つてきた

ハク

「わかった、それでは行くとするか」

ハクはクオン、アトウイ、そしてネコネを連れ修練場に向かった

アトウイ

「ごめんなあクオンはん無理言うて」

クオン

「気にしないで、私も力の使い方慣れておきたいから」

ハクとネコネは離れた場所で見ると

ハク

「しかしいくらアトウイと言えども今のクオンには、」

ネコネ

「私もそう思いますアトウイさんはいつも予想外の結果を出してくるですから、八柱最強は伊達ではないのですよ」

アトウイの顔が真剣になる、いつもの戦闘狂スタイルではない

ハク

「これが、今のアトウイか」

その表情だけでアトウイが今までのアトウイとは別物である事を感じさせる

アトウイ

「いくえ、クオンはん」

アトウイが仕掛ける、クオンはアトウイの攻撃を軽くないし続ける

クオン

(今までのアトウイとはまるで違う、強い、でも！)

クオンはアトウイの隙をつき一撃を入れる

アトウイ

「っ、！」

が、アトウイはこの一撃に耐え反撃に出る

クオン

(そんな！手応えはあったのに)

アトウイはさらに攻撃の速度を速める、しかも槍の軌道がどんどん読みづらくなりク

オンを追い詰める

ハク

(アトウイは今まで戦いを楽しむスタイルだった、それはそれで強かったが何処かで負

けても悔いはない、仕方がないと思つていた節があつた。だが今はもはや次がない、必ず勝つと言う強い意志が見られる。クオンの一撃をもらいながらも耐えたのはその強い意志からだろう、だがそれでもこれは)

しばらくしてアトウイの顔から疲れが見えだす、だがそれでも速度は落ちない、むしろさらに速くなつてきている

クオン

「アトウイ、貴女は！」

アトウイ

「クオンはんだけやないつ、はあつ、はあつ、ウチだつておにーさんの、力につ、！」

アトウイがついにクオンの動きをとめる事に成功する

アトウイ

「ウチもおにーさんの、妻なんやから!!」

アトウイの渾身の一撃、クオンはそれを真正面から受けきる

クオン

「つつ、、」

アトウイ

「やっぱ、強いなあクオンはん」

アトウイはその場で膝をつく

クオン

「アトウイ、」

そこに離れて見ていたハクとネコネが現れる

ネコネ

「アトウイさん、すごいのです。まさかここまで強いとは想像もしてなかったのです」

素直に感心するネコネ

ハク

「まさか今のクオン相手にここまでやるとはな、正直自分も驚いている」

クオン

「でも、納得してないんだよね？アトウイ」

アトウイ

「そう、やなあ。すごく、悔しい、ウチ、まだまだなんやって」

そう言うのと涙を流していた

ハクはクオンとネコネに目配せして先に結界へと帰す事にした

クオンは最後に

クオン

「アトウイを、お願い」

ハク

(さて、ここからは自分の出番だな)

アトウイ

「氣い使わせてしもたなあ、ごめんなおにーさん、」

本気で勝ちに行きそれでも届かなかった、それが悔しくて仕方がないのだろう

ハク

「結果は上々と言いたい所だが、やはり悔しいのだな」

アトウイ

「うん、一番になりたいわけでもないんやけどなあ、ウチ、おにーさんにまた会えるまでハ柱としてすごく頑張ってきたつもりなんよ。その過程でハ柱最強とか言われだして、天狗になってたんかなあ、今ならおにーさんの力になれる、きつと楽しむ戦いじゃなくて本気に勝ちに行けば誰にでも勝てるって、全然そんな事なかったけど、」

ハクはアトウイを抱きしめる

ハク

「ありがとうアトウイ、そして今までお前に散々甘えてきてすまなかった。自分の前ではもういいんだ、素直になってくれアトウイ」

アトウイ

「あ、あああつ、ウチすつごく辛くて！いつも通りでないと迷惑やつて！だからつ、だからつ！」

ハク

「ああ、そうだな。アトウイ、ありがとう。皆を影からずっと支えてきてくれて」

アトウイは全てを曝け出し泣いた、今までにないくらい

アトウイ

「すう、すう、」

ハク

「泣き疲れたか、今はゆっくり寝るといい。アトウイの力は必ず必要になる、頼りにしているぞ」

そして結界内に戻りアトウイを運んで行きアトウイが目覚めるまで待つハクとクオン達だった

## アトウイ覚醒

ハクは眠っているアトウイを抱え結界内に戻っていた

そしてアトウイを寝室にて休ませしばらくその様子を見ていた

途中からクオン、ノスリ、ネコネがやってくる

さらししばらくするとアトウイに異変が起こった、とてつもない力がアトウイから発せられているのだ

クオン

「ハク、これは、」

クオン、ネコネ、ノスリは驚きを隠せないでいたがハクはなるほど、そういう事かと納得していた

ハク

「おかしいと思った、アトウイの異常なまでの戦闘を楽しむあの状態、あれは海神の力ゆえだったのか。アトウイもまた内に神を宿す存在という事か」

クオン

「それって、私と同じ、」

ハク

「ああ、さすがにウィツアルネミテアほどではないがな、今まではその力に振り回されてたゆえ力を一部しか引き出せなかったのだろう。だが先のクオンとの特訓で神自身がアトウイを依代と認めた、そして今アトウイと神が一つに混ざり、覚醒する」

その直後アトウイが目を覚ます

アトウイ

「おにーさん、クオンはん、ネコヤん、ノスリはん、あはは、おはよーさん♪なんか恥ずかしいところ見せてもうたなあ」

先の特訓での事だろう

ハク

「ふむ、どうやら自身に起きた変化、すでに理解しているようだな」

アトウイ

「うん、戦いを楽しむのは今でも変わらんけどなあ、ちゃんとそれだけじゃない、未来に向けて戦う姿勢、おにーさんを必ず取り戻す決意、それにウチの中にある何か力が貸してくれるのを感じるんよ」

ノスリ

「はあ、これはもう八柱最強は覆せそうにもないな。だが友として家族としてこんなに



嬉しい事もない！さすがはアトウイだ！」

ネコネ

「私もずいぶん強くなった自覚はあるですが、さすがに姉様とアトウイさんにはもう勝てる気がしないのですよ」

ノスリとネコネが若干悔しそうにしながらもアトウイの覚醒を喜んだ

そしてアトウイとクオンが見つめ合う

クオン

「うん、これだとさすがに勝敗はわからないかな」

アトウイ

「そうやなあ、勝てるかもしれないけど負ける可能性も十分あるって感じやなあ、でももうクオンはんとやるのはやめとくえ。訓練でもどっちか死にそうやしな〜」

ハクはアトウイに眠る神の力に気付く事ができなかった、アトウイ本人ですら気付いてなかったのだから仕方がないと言えばそうかもしれない、だが

ハク

（やれる事は全てやらなければいけなかったのに気付く事ができなかった、こうなってしまうと何かを見落としているのではないかと疑心暗鬼になってしまふな、本当にこのまま決戦へと向かって大丈夫なのか、しかし時間をそんなにかけるわけにもいかぬ、

か)

アトウイ

「おにーさんまた難しい顔してるえ、どうせうちの状態を見て決戦へ行くにはまだ早いんじゃないかと思ってるんやろ？ウチの力が上がったんは偶然でもあるんやからそんな奇跡みたいな物を全部待つてるわけにもいかないえ、早く終わらせて皆で幸せになる？」

ハクはそれを聞き吹っ切れた

ハク

「ああ、そうだな、その通りだ。こんな時にまで慎重になっただけはいつまで経っても動けんしな。ありがとうアトウイ、決戦は予定通り明日にする。頼りにしているぞ皆」

そしてしばらく話した後ハクはその場を離れ自室に戻った

ハク

(着実に流れは来ている、決戦は明日もはや変更はない、だがもう一手欲しい、何かないか、何か)

帝

「辛気臭い顔をしているな弟よ」

ハク

「兄貴!? その姿はっ!」

帝

「ああ、ウオシスとライコウのおかげでな。なんとか間に合った、だが若返ったとはいえ戦う力があるわけではない、余にできるのはただ一つ、全盛期のこの頭脳、そして其方の力で試してみたい事がある。その仮面の、さらなる強化を」

ハク

「、、考えなかったわけじゃない、だが可能なのか? この仮面のスペックはもう粗方引き出されている。これ以上となると根本的な部分を変えにやららん、今から着手して到底間に合うとは」

帝

「だからこそこの体になったのだよ、この姿から老ぼれになるまでの数百年分の時間をこの小さな結界内でその仮面を強化する、外の時間はほぼ止まっているからな」

ハク

「なっ、! いや、確かに時間が動いていない」

まさか明日を迎えるのにいきなりそれが数百年先になるとは

ハク

「せめてやる前に一言言ってほしかったが」

帝

「どうせやるのだから変わらんだろう、さあ始めるぞ。なあに早く終われば自然と結界も解ける。結界の解除はその仮面の力が一定の値に達した時だ、さあ頑張るぞハク！」

ハク

「はは、なんか昔を思い出すな。ん？」

帝

「なんだ、結界に入ってくる者だと？」

そこにはクオンとアトウイがいた

クオン

「時間がやけに遅くなったと思ったら、ここが原因かな」

アトウイ

「みたいやなあ、おにーさんと、誰？」

ハク

「なるほど、神の力か、兄貴だよその人は」

クオン

「えっ？帝様？なんでこんなに若返って、ああ死者だから」

帝

「これは誤算だったな、まあ確かに何事も例外は付き物か。ちょうどいい、人手が増えたのだから作業も捗るといふものだ」

帝は2人に経緯を説明し協力しともらうよう頼んだ

神の力を持つ2人だ、仮面の強化に使える事も考えられる

クオン

「まあやれる事はやらないとかな」

アトウイ

「外の時間は止まってるとは言うてもおにーさんと帰る時間が体感的に伸びるのは嫌やなあ、先の帝様?できるだけ早う終わらせてな?」

ハク

「そうだな、なるべく早く早く終わらせるに越した事はない。早速始めるとしようか」

仮面の強化に取り掛かる4人、数百年かかると思われていた作業はクオン、アトウイのおかげでなんと3年で終わったのだった